

子どもの貧困 絶望の連鎖が明らかに

全国的生活保護・住民税非課税世帯の子ども・若者と保護者
コロナ禍・物価高騰で深刻化する実態・教育の課題などが判明

あすのば給付金受給者 6 千人調査 中間報告

2024年4月

公益財団法人あすのば

あすのば給付金受給者 6 千人調査 中間報告にあたって

わが国で最も厳しいと思われる子どもの貧困世帯の実態が浮き彫りになった。

極度の経済的困窮が継続し、子ども・若者も保護者も心身ともにボロボロにも関わらず、医療を受けることができず、十分な食事がとれず、毎日入浴ができない。

子どもにとっては、学校が居場所ではなく、授業が分からない。経済的理由で欲しくても買えず、さまざまな経験ができず、友だちとも遊べず、希望する進路にも進めない。

若者にとっては、大学や専門学校に通う学生は、国の高等教育無償化制度の成果が見え始めた。一方で、就業者では、仕事が充実していない人が多く、非就業・就学者は、絶望的だと感じる若者の率が極めて高い。

保護者にとっては、行政への不信が根強く、頼りになるものではない。「自己責任」だと周囲から責められるとともに自責の念に苦しんでいる。

こうした平時の厳しい状況にコロナ禍と物価高騰が襲いかかった。失業や減収、支出増などで経済的困窮がより深刻化している。子どもの不登校増加などの影響も見逃せない。

今回の調査結果を踏まえ、子どもの貧困解消のため、十分な予算と人を確保し、大幅な施策拡充とともに、実効性の高い子どもの貧困対策法改正の早期実現を心から願っている。

あすのば給付金受給者アンケート 検討委員会委員（敬称略）

宮本みち子	放送大学／千葉大学名誉教授
末富芳	日本大学教授
直島克樹	川崎医療福祉大学講師
秋吉晴子	しんぐるまざあず・ふぉーらむ沖縄代表
須田洋平	特定非営利活動法人サードプレイス代表理事
村野裕子	特定非営利活動法人 AIKURU 理事
李炯植	認定特定非営利活動法人 Learning for All 代表理事
川村空	あすのば子ども・若者委員（高知県立大学 3 年）
高山優樹	あすのば子ども・若者委員、こどもまんなか静岡代表（静岡大学 3 年）
棚橋実千瑠	あすのば子ども・若者委員（東京福祉大学 2 年）
花村拓己	あすのば子ども・若者委員（成蹊大学 2 年）
藤井麗乃	あすのば子ども・若者委員（慶応義塾大学 2 年）
（分析協力）	
三菱 UFJ リサーチ & コンサルティング株式会社	

あすのば給付金受給者 6 千人調査 中間報告 目次

1 アンケート概要	1
1-1 アンケート調査概要	1
1-2 アンケート協力者の概況	5
2 アンケートに寄せられた子ども・若者と保護者たちの声	16
2-1 子ども・若者たちの声	16
2-2 保護者たちの声	19
3 アンケート調査から見えてきたこと（全体的な傾向）	22
3-1 新型コロナウイルス・物価高騰の影響	22
3-2 保護者調査	23
3-3 子ども・若者調査	26
4 アンケート調査から見えてきたこと（調査別詳細）	29
4-1 保護者調査から見えてきたこと	29
4-2 就学中の子ども・学生の調査から見えてきたこと	45
4-3 就業している若者、非就業の若者調査から見えてきたこと	84

1 アンケート概要

1-1 アンケート調査概要

1-1-1 アンケート対象

あすのばが実施する「入学・新生活応援給付金」などの事業の受給世帯（生活保護受給者世帯、住民税非課税世帯、家計急変などで住民税非課税相当の世帯）14,845世帯の保護者、子ども・若者に対してアンケートへの協力をメール・郵送で依頼した。

なお、メール・郵送ともに不達は、1,070世帯であったため、実際のアンケート依頼世帯は、13,775世帯だった。

図表 1 アンケート調査協力依頼対象

対象	対象数
(1) 2020～2022年度の「入学・新生活応援給付金」受給者（社会的養護を除く）	7,963人 <内訳> 2020年度：2,706人 2021年度：2,376人 2022年度：2,881人
(2) 2020年度のコロナ禍緊急支援第1弾・第2弾受給者（同上）	4,312人 <内訳> 緊急支援第1弾：1,068人 緊急支援第2弾：3,244人
(3) 2017～2019年度の「入学・新生活応援給付金」小学入学・中学入学区分の受給者、及び2019年度の「入学・新生活応援給付金」中学卒業区分の受給者	2,570人 <内訳> 2017年度 小学入学：358人 中学入学：528人 2018年度 小学入学：206人 中学入学：302人 2019年度 小学入学：242人 中学入学：381人 中学卒業：553人

1-1-2 アンケート方法及び有効回答数

上記の対象に対し、回答者を以下の通り分類しそれぞれに対して異なる調査票を作成し、回答を収集した。調査票はWEB アンケート作成サービス「Questant」上に作成し、対象者には調査画面へのリンクをメールにて案内した。また、紙での回答を希望する対象者には別途紙の調査票を郵送し回答を得た。保護者と子ども・若者の有効回答は、5,874 票だった。

なお、保護者の有効回答率は、29.1%だった。

図表 2 調査対象別有効回答数

対象（対象ごとに調査票を作成）	有効回答数
保護者	4,012
子ども	1,862
①小学生	123
②中学生	428
③高校・高専生（以下、高校／高校生）	660
④大学・短大・専門学校・大学院生（以下、大学・専門学校／大学・専門学校生）	465
⑤就職している若者（以下、就業者）	143
⑥就学・就職していない若者（以下、非就業者）	43

1-1-3 調査期間

2023年11月9日から2023年12月4日までを調査期間に設定した。

1-1-4 留意点及び集計方法

- ・ WEB 回答画面は基本的に任意回答に設定して実施した。また、回答対象者が一部に限定される質問については、WEB 調査上で事前に制御を行った。報告における集計にあたっては、基本的に無回答も含む集計・割合である。
- ・ 年齢や時間など、数値で回答する質問において、外れ値（非現実的な大きい値を回答しているもの）があった場合は、あすのばと分析協力者で協議の上、一部無回答としているものがある。また、選択肢式の回答で、「その他」に元々の選択肢に含まれる内容と同じ回答が見られた場合、回答の修正を行っている。
- ・ 小学生と中学生の調査票は類似性が高いことから、以下の報告では統合して取りまとめている。
- ・ 端数処理の関係上、割合の合計が100%に一致しないことがある。

- ・ 調査にあたっては、以下の既往調査を参考にし、必要に応じ比較を可能にするため共通・類似の設問を設けた。

図表 3 参考にした既往調査

- ・ 内閣府政策統括官（政策調整担当）「令和 3 年 子供の生活状況調査の分析 報告書」
令和 3 年 12 月
(https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/13103332/www8.cao.go.jp/kodomonohi_nkon/chousa/r03/pdf/print.pdf) 〔以下では「内閣府令和 3 年調査」と言う〕
- ・ 公益財団法人あすのば「子どもの生活と声 1 500 人アンケート中間報告 ～大人の段階をのぼるということ～」2018 年 2 月 (<https://www.usnova.org/wp-content/uploads/2018/02/アンケート中間報告.pdf>) 〔以下では「あすのば 2017 年度調査中間報告」と言う〕
- ・ NHK 放送文化研究所「中学生・高校生の生活と意識調査 2022 単純集計結果」2022 年 12 月 16 (https://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20221216_1.pdf)
〔以下では、「NHK2022 年調査」と言う〕
- ・ 厚生労働省「2022(令和 4)年 国民生活基礎調査」
(<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa22/dl/14.pdf>)
- ・ 国立教育政策研究所「令和 5 年度全国学力・学習状況調査結果資料」
(<https://www.nier.go.jp/23chousakekkahoukoku/index.html>)
- ・ 厚生労働省「2019 年家庭の生活実態及び生活意識に関する調査」 (<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00450314&tstat=000001066889>)

「あすのば入学・新生活応援給付金」 概要

○目的・使命

経済的に困窮している世帯の子どもにおいて、入学・新生活を迎えるための費用が不足している実態を明らかにし、広く市民からのご寄付によって、経済的な支援のみならず、「あなたのことを想っている人が『ここにいるよ』」というメッセージとともに、入学・新生活を迎える子どもたちに給付金を贈ることを目的とする。また、その必要性を行政や社会に訴えるためのモデル事業という位置づけで実施し、その成果によって、行政などによる入学・新生活を迎えるにあたっての支援施策を拡充させることを事業の使命とする。

○給付対象者

生活保護受給世帯、住民税の所得割が非課税世帯、家計急変などで住民税非課税相当となった世帯、児童養護施設・里親などのもとで生活していて新年度までに措置解除予定の子どもで、小学生入学生、中学校入学生、中学校卒業生、高校卒業生など。

○給付額

小学生入学生・中学校入学生 3万円／中学校卒業生 4万円

高校卒業生など 5万円

なお、災害特例は、それぞれ1万円を上乗せして給付。

○給付実績

	一般		災害特例		合計	
	人数	総額	人数	総額	人数	総額
2015年度	198	7,790,000	0	0	198	7,790,000
2016年度	2,159	85,100,000	97	4,870,000	2,256	89,970,000
2017年度	2,803	110,970,000	4	180,000	2,807	111,150,000
2018年度	1,756	70,060,000	12	630,000	1,768	70,690,000
2019年度	1,982	78,370,000	5	230,000	1,987	78,600,000
2020年度	2,945	118,420,000	11	480,000	2,956	118,900,000
2021年度	2,481	97,790,000	2	80,000	2,483	97,870,000
2022年度	2,977	115,820,000	2	120,000	2,979	115,940,000
合計	17,301	684,320,000	133	6,590,000	17,434	690,910,000
2020年度	コロナ禍緊急支援給付金				4,995	187,250,000
合計	(上記緊急支援給付金含む)				22,429	878,160,000

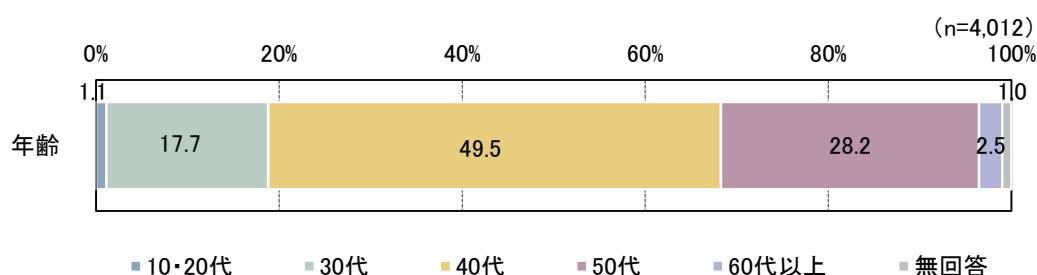
1-2 アンケート協力者の概況

1-2-1 保護者調査

(1) 回答者の概況

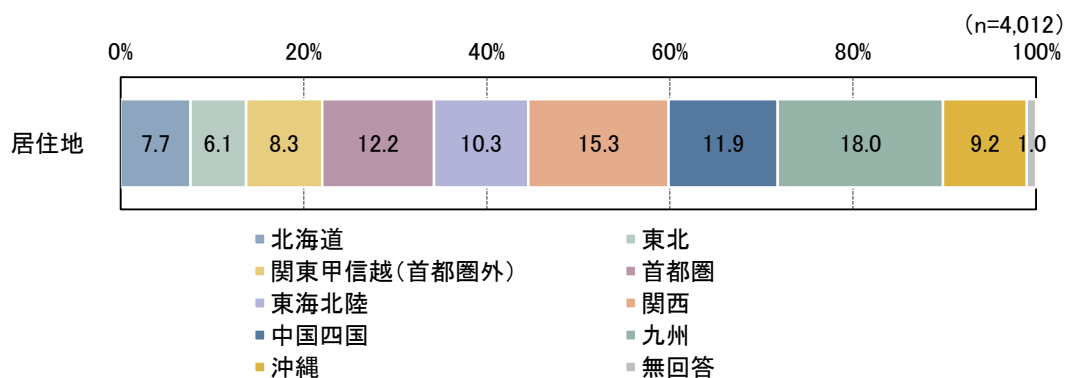
- ・**年齢**は平均 45.4 歳で、10・20 代 1.1%、30 代 17.7%、40 代 49.5%、50 代 28.2%、60 代以上 2.5%、無回答 1.0%。

図表 4 回答者の年齢



- ・**居住地域¹**は、北海道 7.7%、東北 6.1%、関東甲信越(首都圏外)8.3%、首都圏 12.2%、東海北陸 10.3%、関西 15.3%、中国四国 11.9%、九州 18.0%、沖縄 9.2%、無回答 1.0%。

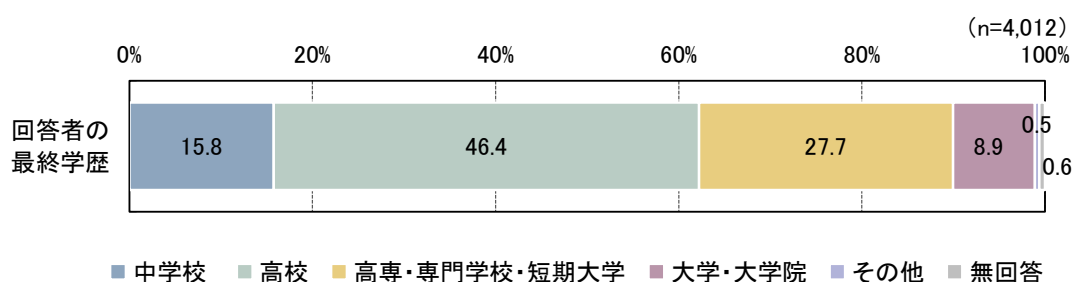
図表 5 回答者の居住地域



1 地域区分は以下の通り。北海道、東北（青森、岩手、秋田、宮城、山形、福島）、関東甲信越（首都圏外）（茨城、栃木、群馬、山梨、長野）、首都圏（埼玉、千葉、東京、神奈川）、東海北陸（静岡、岐阜、愛知、三重、新潟、富山、石川、福井）、関西（滋賀、京都、奈良、和歌山、大阪、兵庫）、中国四国（鳥取、島根、岡山、広島、山口、徳島、香川、愛媛、高知）、九州（福岡、佐賀、長崎、大分、熊本、宮崎、鹿児島）、沖縄

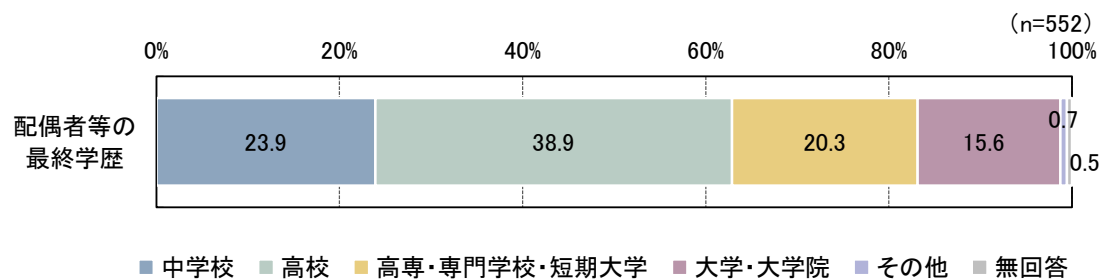
- ・ **回答者の学歴**は、中学校 15.8%、高校 46.4%、高専・専門学校・短期大学 27.7%、大学・大学院 8.9%、その他 0.5%、無回答 0.6%。

図表 6 回答者の学歴



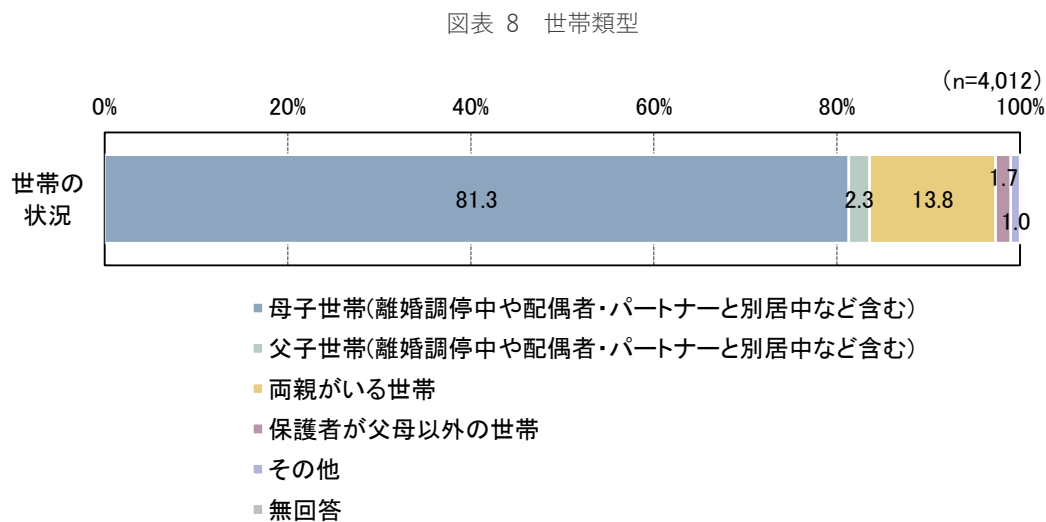
- ・ **配偶者・パートナーの学歴**は、中学校 23.9%、高校 38.9%、高専・専門学校・短期大学 20.3%、大学・大学院 15.6%、その他 0.7%、無回答 0.5%。

図表 7 配偶者・パートナーの年齢

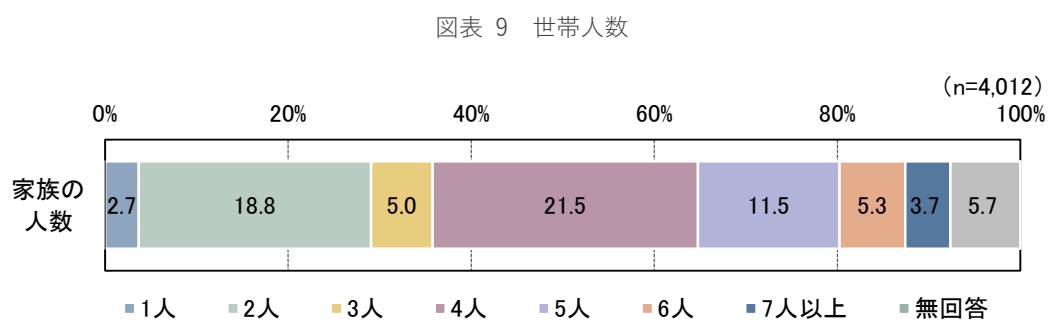


(2) 世帯の概況

・**世帯類型**は、母子世帯 81.3%、父子世帯 2.3%、両親がいる世帯 13.8%、保護者が父母以外の世帯 1.7%、その他 1.0%。



・**世帯人数**は平均 3.6 人で、1 人 2.7%、2 人 18.8%、3 人 5.0%、4 人 21.5%、5 人 11.5%、6 人 5.3%、7 人以上 3.7%、無回答 5.7%。



・子どもの人数は平均 2.3 人で、1 人 27.2%、2 人 34.2%、3 人 22.0%、4 人以上 15.1%、無回答 1.6%。

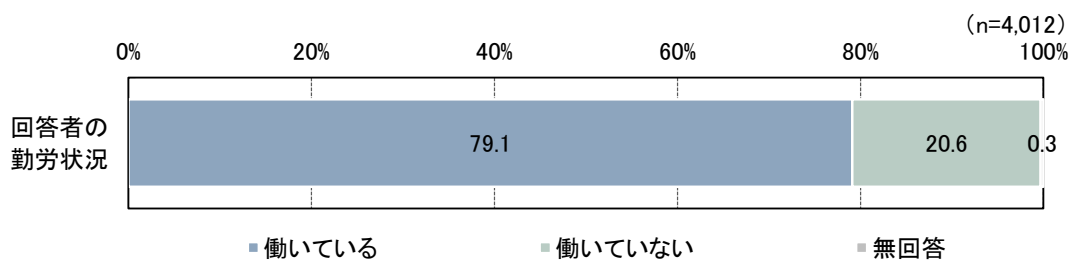
図表 10 扶養している子どもの人数



(3) 仕事・収入などの概況

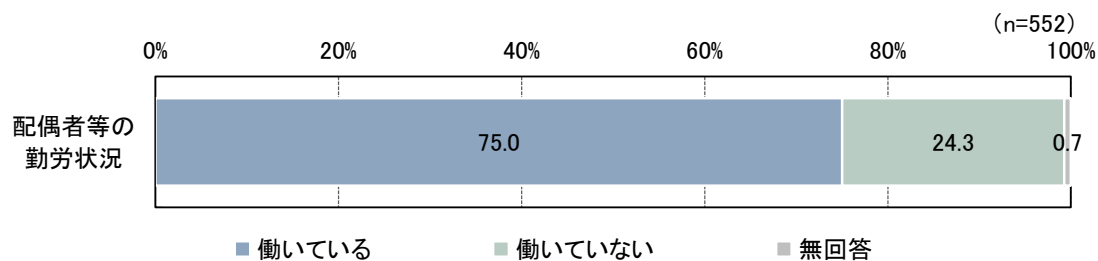
・回答者の勤務状況は、働いている 79.1%、働いていない 20.6%、無回答 0.3%。

図表 11 回答者の勤務状況



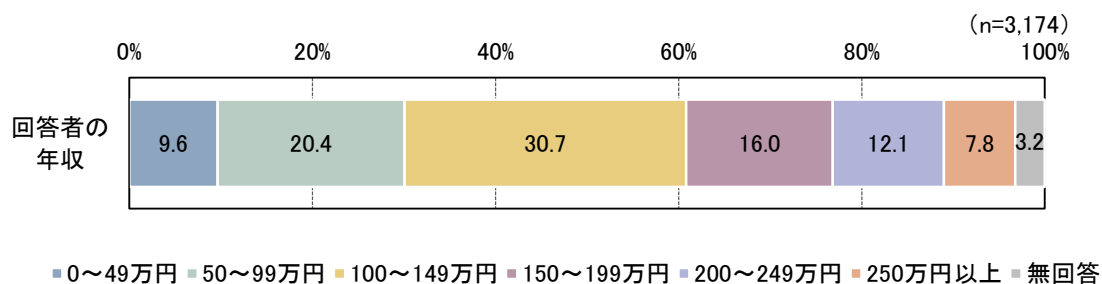
・配偶者・パートナーの勤務状況は、働いている 75.0%、働いていない 24.3%、無回答 0.7%。

図表 12 配偶者・パートナーの勤務状況



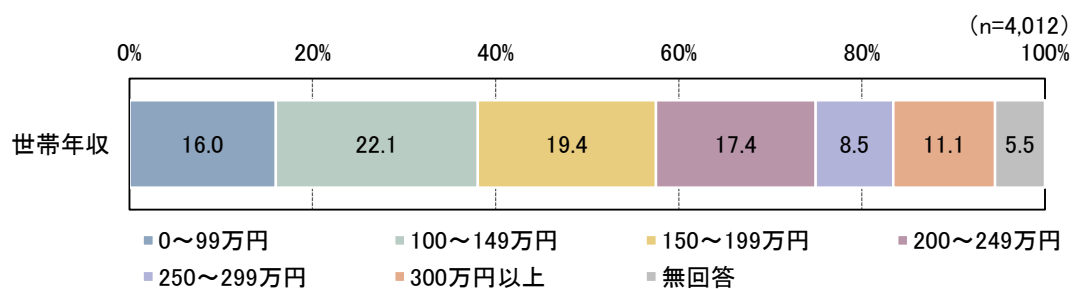
- ・**回答者の勤労年収**は平均 137.4 万円で、0～49 万円 9.6%、50～99 万円 20.4%、100～149 万円 30.7%、150～199 万円 16.0%、200～249 万円 12.1%、250 万円以上 7.8%、無回答 3.2%。

図表 13 回答者の勤労年収



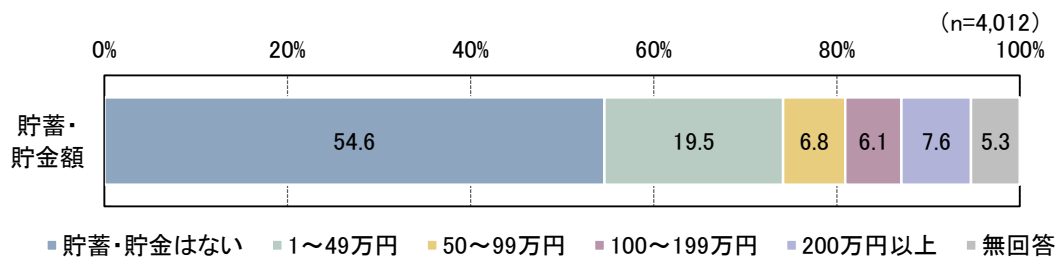
- ・**世帯年収**は平均 178.0 万円で、0～99 万円 16.0%、100～149 万円 22.1%、150～199 万円 19.4%、200～249 万円 17.4%、250～299 万円 8.5%、300 万円以上 11.1%、無回答 5.5%。

図表 14 回答者の世帯年収



- ・**世帯貯蓄**は平均 36.7 万円で、0 円 54.6%、1～49 万円 19.5%、50～99 万円 6.8%、100～199 万円 6.1%、200 万円以上 7.6%、無回答 5.3%。

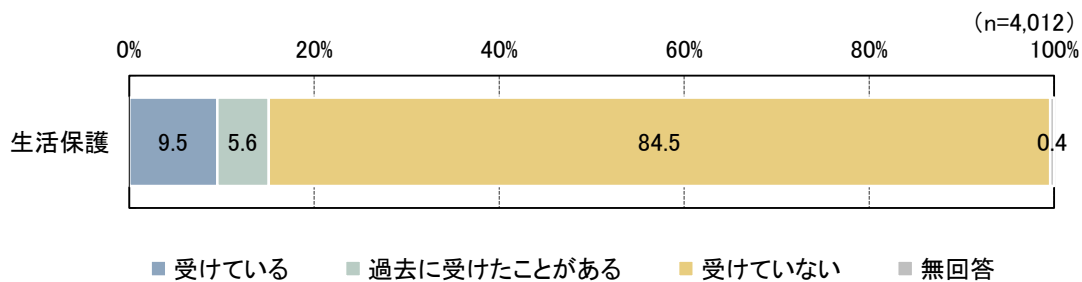
図表 15 回答者の世帯貯蓄



(4) 困窮に関する状況

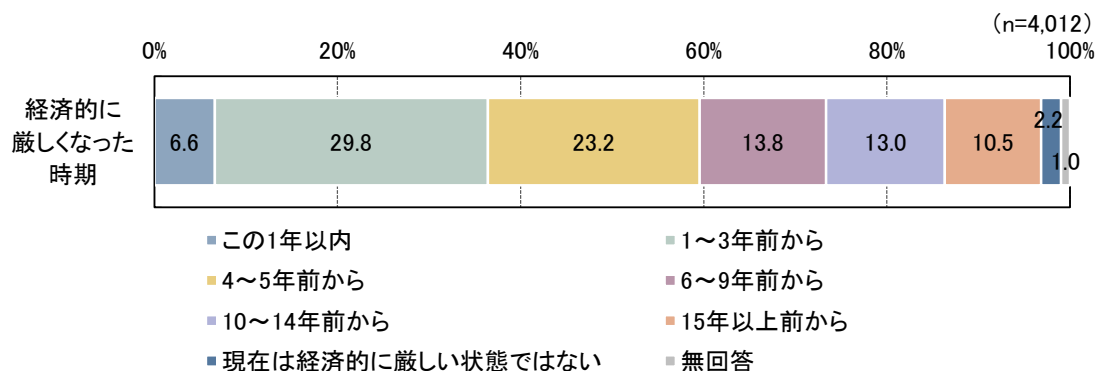
- ・生活保護については、受けている 9.5%、過去に受けたことがある 5.9%、受けていない 84.5%、無回答 0.4%。

図表 16 生活保護の受給経験



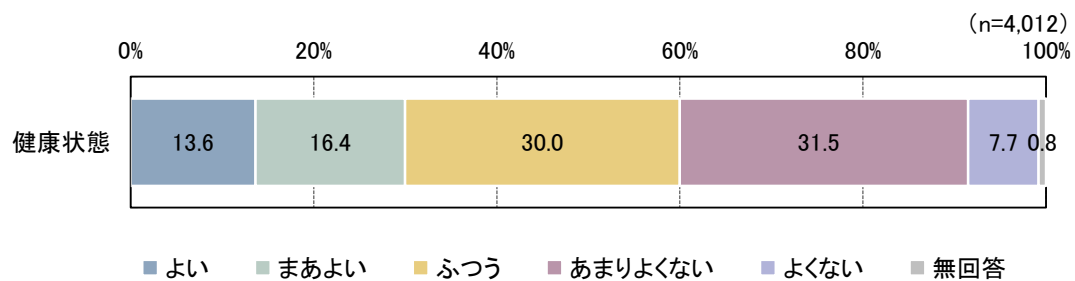
- ・いつから困窮かについては、この1年以内 6.6%、1～3年前から 29.8%、4～5年前から 23.2%、6～9年前から 13.8%、10～14年前から 13.0%、15年以上前から 10.5%、現在は経済的に厳しい状態ではない 2.2%、無回答 1.0%。

図表 17 経済的に厳しくなった時期



- ・ 健康状況については、よい・まあよい 30.0%、ふつう 30.0%、よくなりよくない 39.2%、無回答 0.8%。

図表 18 回答者の健康状況



1-2-2 子ども・若者調査（小学生／中学生／高校生／大学・専門学校生／就業者／非就学・就業者）

- ・ 世帯類型については、母子世帯が各調査で 65～82%の間をとっており、父子世帯は最大で約 5%。世帯の人数は平均して 3～4 人程度。
- ・ 高校などの学校種別は、全日制 74.5%、定時制 5.0%、通信制 12.4%、高専 2.6%、その他 5.3%。
- ・ 大学などの学校種別は、専門・各種学校 30.5%、短大 4.1%、4 年制大学 63.0%、6 年制大学 1.1%、その他 0.9%。
- ・ 住居については、大学・専門学校生、就業者の 70%弱が実家に暮らしている。就業していない若者は約 95%が実家で暮らしている。
- ・ 就業者の 雇用形態は、正社員 46.9%、契約・派遣社員 8.4%、パート・アルバイト 37.8%、自営 1.4%、その他 5.6%。
- ・ 就業者の 仕送りの有無は、家族に生活費を渡している 52.4%、渡していない 46.9%。

図表 19 子ども調査 協力者の概況（回答者の属性、世帯、所属などについて①）

設問		合計※ (n=1,862)	①小学生 (n=123)	②中学生 (n=428)	③高校生 (n=660)	④大学・専門学 校生 (n=465)	⑤就業者 (n=143)	⑥非就学・就業 者 (n=43)
性別	男性	44.7	43.1	49.1	45.8	42.2	37.8	39.5
	女性	53.0	56.1	48.8	51.4	55.9	60.8	53.5
学年 (年齢)	1年生	-	-	38.3	40.5	47.3	18歳以下:18.9	18歳以下:23.3
	2年生	-	-	31.3	26.7	33.3	19歳:29.4	19歳:34.9
	3年生	-	-	29.9	30.0	15.9	20歳:23.1	20歳:16.3
	4年生	-	39.0	-	2.0	2.8	21歳:21.7	21歳:16.3
	5年生	-	20.3	-	※4年生以上	※4年生以上	22歳以上:7.0	22歳以上:4.7
	6年生	-	39.0	-			-	-
世帯類型	母子	76.0	81.3	79.2	77.9	72.3	65.0	74.4
	父子	3.7	1.6	2.6	4.1	4.5	4.9	0.0
	ふたり親	13.4	14.6	12.6	12.3	14.6	14.0	18.6
	父母以外	5.0	2.4	4.9	5.0	4.1	11.9	2.3
世帯人数	1人	4.1	-	0.7	0.8	11.0	10.5	4.7
	2人	18.1	14.6	14.7	18.5	19.4	18.9	37.2
	3人	30.3	33.0	29.7	33.6	28.4	26.6	11.6
	4人	22.2	19.5	25.0	22.9	21.7	16.8	16.3
	5人以上	24.4	32.5	29.2	23.0	19.0	25.9	27.9
	平均	3.7	4.0	3.9	3.7	3.3	3.6	3.7
子どもの人数	1人	27.1	18.7	21.2	27.2	30.9	32.8	46.3
	2人	28.2	36.6	25.6	27.9	31.5	24.8	9.8
	3人以上	43.1	42.3	50.4	44.3	35.6	40.9	41.5
	平均	2.6	2.6	2.8	2.5	2.7	2.5	2.4

図表 20 子ども調査 協力者の概況（回答者の属性、世帯、所属などについて②）

設問		③高校生	④大学・専門学校生	⑤就業者	⑥非就学・就業者
学校種別		全日制:74.5	専門・各種学校:30.5	-	-
		定時制:5.0	短大:4.1	-	-
		通信制:12.4	4年制大学:63.0	-	-
		高専:2.6	6年制大学:1.1	-	-
		その他:5.3	その他:0.9	-	-
住居	実家	-	67.7	69.2	95.3
	一人暮らし	-	22.8	13.3	2.3
	寮・シェアハウス	-	8.0	11.9	-
	その他	-	1.3	5.6	2.3
雇用形態	正社員	-	-	46.9	-
	契約・派遣社員	-	-	8.4	-
	パート・アルバイト	-	-	37.8	-
	自営	-	-	1.4	-
	その他	-	-	5.6	-
家族への仕送り	生活費を渡している	-	-	52.4	-
	渡していない	-	-	46.9	-

図表 21 子ども調査 協力者の概況（回答者の困窮の状況について）

設問		①小学生	②中学生	③高校生	④大学・専門学 校生	⑤就業者	⑥非就学・就業 者
生活が大変・ 苦しい	感じる	76.4	83.6	86.7	88.4	89.5	83.7
	感じない	22.0	16.1	13.0	11.2	9.8	11.6
いつから生活 が苦しいか	この1年	4.1	4.9	4.2	5.1	11.7	11.1
	1～3年前	35.8	31.3	29.4	20.7	22.7	25.0
	4～5年前	13.0	25.9	25.7	21.7	24.2	16.7
	6～9年前	18.7	17.1	15.0	15.8	8.6	16.7
	10年以上前	※5年以上前	※5年以上前	19.4	29.2	24.2	22.2
	今は苦しくない	2.4	4.4	5.8	7.3	8.6	8.3
健康状態	よい・まあよい	-	-	-	-	-	25.6
	ふつう	-	-	-	-	-	34.9
	よくない・あまりよくない	-	-	-	-	-	37.2

以下、図表 19～図表 21 について同様。

※数値の単位は%。

※各質問について無回答者が含まれるため、掲載されている割合の合計は 100%と一致しない場合がある。

※各属性について「無回答」の構成比は記載していない。図表 19 の合計の構成比・平均値は、①～⑥の各構成比・平均値を各 n 数をウェイトとして加重平均したもの。

※調査対象によって、設問の言葉遣いを調整しているものがある。

2 アンケートに寄せられた子ども・若者と保護者たちの声

2-1 子ども・若者たちの声

好きなものや、好きなことをたくさんしたい。（京都府、小学4年、女性）

お父さんが身体が不自由で普通に動けないのに、生活保護を受けているという理由で車に乗れないのはおかしい。都会と私が住んでいる田舎は違うと思う。困っている人を助けてあげようと学校でも習ったのに反対のことをされていると思う。（鳥取県、小学6年、女性）

離婚後、母は一生懸命働いて育ててくれています。でも物価高で食費が足りないため、毎日朝は抜いて学校に行きます。学校が休みになると昼も抜くこともあります。シャワーは週に1回と決めています。髪の毛の汚れが目立たってこないように、絶対髪にさわらないようにして掻かないようにしています。支援には年収制限があるのですが、正社員だとギリギリ引っかかってしまうそうです。年収制限ギリギリの私の家では、生活をきりつめてやっと生きている状態です。物価が高くなって食品が買えなくなったことも原因です。

特に中高に入ると部活や体験学習や学外の活動などもしたいので、お金がかかって生活がますます大変です。だから年収制限はなくすか、もっと高くして、ギリギリの生活をしている母子家庭を救ってほしいです。（神奈川県、中学1年、女性）

音楽の勉強がしたいです。でも、とてもお金がかかります。母が、やりくりしてくれているのを知っているので、みんなみたいにスマホやゲームがほしかったり、旅行に行きたかったりしても、がまんしてます。教育費にお金がかからなかったらいいのにと、よく母が言ってます。日本は子どもの教育についてはフォローが少ないのはなぜですか。お年寄りばかりの国だからですか。それなら、日本ではなく外国の方が良い国で、将来はそっちで生活したほうがいいのかと思っています。

中学校では、塾に通っている子たちはもう勉強がわかっているので、授業中はうるさいです。私は塾に行けないので学校でしか勉強できません。でもうるさいので、授業内容も理解できないまま進んでしまうし、学校では集中できません。吹奏楽部の部費はとても高いです。本当に日本はこんな国でいいのですか。（大阪府、中学1年）

そもそも習いごととかできない。人と関わるのが嫌だ。うちは貧乏なのでバカにされるし、どこかに出かけられたとしても、友達と同じご飯が食べられないから行きたくてもいけない。（福岡県、中学2年、男性）

お母さんは病気なのに、無理して働いて、病気がひどくなりました。それでも、毎日頑張って家のことをしてくれたり、僕のためにいろんなことを我慢してて、お母さんに、幸せになってほしいです。早く働いて、お母さんを助けたいです。（香川県、中学3年、男性）

友達に遊びに誘われてもお金が無いから断ることがあった。お金が足りなくて学校のお弁当もおにぎり1つだったり、休みの日の食事も1日1回か2回。学費が高くて学費を払うと食費が足りなくなったり公共料金が払えなかったりするの毎月もう少しお金をもらいたいです。（千葉県、高等専門学校2年、女性）

自分や妹たちの生活の維持のために親がご飯を食べなくなった。生活を切り詰めているのは親だけで自分たち子どもには不足がないようにしてくれているのを見るのが辛い。

（宮城県、全日制高校1年、男性）

中学生の時、部活ができなかった。妹も、部活ができてない。

（宮城県、通信制高校1年、女性）

消えてしまいたい、誰かに見られている気がする、学校に行きたくない、理由は分からない。（福岡県、全日制高校1年、女性）

コロナ禍と物価高騰で家庭の経済状況が厳しい状態が続いているので、進学できるか不安です。（岩手県、全日制高校2年、男性）

今でさえ苦しんでいるのに自分が大学に行ったせいで家族の家計が苦しくなり仕事を増やそうとしている母を見るのはしんどい。（奈良県、4年制大学1年、一人暮らし、女性）

奨学給付金を頂いて大学に行かせていただいています。経済的に恵まれていなくてもおかげさまで有名理系大学に通うことが出来て、入学当初は大変嬉しかったです。でも今は奨学金が打ち切られることがほぼ確定し、辛くてたまりません。今後学費や生活費をどうするか悩んでいます。現在の奨学金は成績が下位4分の1になると打ち切られます。

私は真面目に毎日授業に出て、レポートも必ず出していますが、小さい頃から学習環境が恵まれていない中必死に勉強してギリギリ今の大学に入学したので、もともと成績上位ではありません。頑張っても有名大学に入っても成績下位だから奨学金を打ち切られてしまうのです。（神奈川県、4年制大学3年、一人暮らし、男性）

18歳迄で遺族年金や児童手当が終わるが、大学の4年間の方がさらにお金がかかるので拡充してほしい。（熊本県、4年制大学、実家、男性）

発想の転換が必要だと思います。苦しい=支援を続けて受けているとそこから抜け出せなくなり永遠に貧困状態です。脱却するためには学びが必要です。貧困だからこそ学ぶのです。自分はそう思い頑張っています。（東京都、4年制大学3年、実家、女性）

うちの家族は生活保護を受けて生活しています。母は障害があり働けません。私は専門学校1年生ですので保護からは抜けなければならない、母と高校1年生の弟2人分の保護費で3人で暮らしているため、生活に全く余裕がなく、母がごはんを食べている姿をあまり見ません。お風呂も数日に一度、とし、私と弟には毎日入らせてくれています。なんとか専門学校・大学生も生活保護を受給できるようにしてもらえないでしょうか？

アルバイトをたくさんすると学生支援機構の奨学金を満額借りれなくなり学費が払えなくなり、今のアルバイトの金額では奨学金の返済も始まっていますし、親子ともに負のループに陥っています。（大阪府、専門学校・各種学校1年、実家、女性）

修学旅行に行けなかった。受けた資格取得の費用がなかった。大学に行けなかった。
（長野県、正社員、19歳、女性）

親ガチャという言葉は好きではありませんが、お金が無いことで諦めなきゃいけない人との差が辛いと感じます。自分自身は大学に進学して自分と同じように悩んだり苦しんでいる方たちに寄り添えたらと思って、心理士の道を目指したりしていました。結局その日の食べる物や生活費に余裕がないと無理なのかなと思いはじめています。

（鹿児島県、非正規雇用、20歳、男性）

やりたいことがあっても生きて行くために働かなければならなくて、時間とお金に余裕がないこと。みんなそうなんだと無理やり納得して諦めている。

（岡山県、自営業・個人事業主、22歳、男性）

理解してくれるひとが、母しかいない。友達もいない。

（東京都、非就労・就学、20歳、女性）

高校に行っていないのもあるが未成年では仕事がなく就職がむずかしい。未成年で働ける職場を増やしてほしい。（宮崎県、非就労・就学、16歳、男性）

この世界の、この国の、今の社会の未来に、絶望しかありません(むしろ未来などくるのでしょうか)。辛いこと、困ることしか増えていません。100歳超えのおばあちゃんになるまで生きたいですが、今のままではまず無理ですね。大人が壊そうとしている、壊してしまっている私たちの人生を、未来を、(もう失われてしまったものも多くあるのですべては無理ですが)可能な限り努力して、正常に戻して返してほしいです。

自分たちが壊した社会・現実を見つめ、何とかしてほしいです。この社会を世界を受け継ぐことができたなら、尻拭いをするのは、修復していかねばならぬのは、辛い思いを抱えていかなければいけないのは、無力なうちにこんな世界にさせられていた他でもない私たちなのです。（北海道、非就労・就学、20歳、女性）

18歳から20歳までの給付金がないので、自立ができない子どもたちがたくさんいるので、家の家計は苦しくなるので、給付金があれば助かると思う。

(鳥取県、非就労・就学、18歳、女性)

2-2 保護者たちの声

給料が増えるように、高校生の息子をひとり置いて夜勤の仕事も月に5～6回し始めました。そうやって頑張って働いて給料が増えたら、大学生の娘の給付型奨学金を減額されました。(徳島県、3人家族、母子世帯、40代)

私 父親が障害者1級のため障害年金の9万円にて毎月生活してますので子どもたちの負担も大きいと思います。下の子は修学旅行にもいかせれず学校も辞めることになりました。私みたいな迷惑を子どもたちにかける人間は生きる価値がないと思います。

(愛知県、3人家族、父子世帯、50代)

収入より教育費がかかり、貯金を崩した。食費も野菜や果物や魚が高くて買えない。健康を損ねている。(千葉県、3人家族、ふたり親世帯、50代母親)

学童保育の料金がなくて利用できず、子どもが低学年のため一人にできないので、夏休みのなどの長期休暇中は働きに行けず更に収入が減り、借金が返せず赤字が膨らむ一方です。給付金もありがたいとは思いますが、ひとり親世帯や低所得者世帯が、せめて春休み、夏休み、冬休みの期間だけでも学童保育を無償で利用できるような仕組みを構築していただけたら助かります。(福井県、5人家族、ふたり親世帯、40代母親)

児童扶養手当と児童手当が出ているが、4月、8月、12月はどちらも支給がないのに4月は子どもたちが進学進級、8月は夏休み、12月は冬休みや年末年始の準備をしなければなりません。この3ヶ月は支給が0円なんです。夏休みはどこにも行けません。昼ごはんはありません。夜たくさん食べさせるので精一杯です。クリスマスはサンタはきません。年末年始関係なくメニューは同じ。冬の光熱費に圧迫され押しつぶされます。昼間も子どもたちがいるから光熱費は倍以上。お年玉をもらっている家庭と比べて我が家は何もありません。

本当に情けなくなります。国って一体何をやってるんでしょうか。本当に辛い思いをしている人たちにはこのまま一生光が当たらないのでしょうか。真面目に働き子育てをしている家庭にしっかりした支援を提供するべきです。(北海道、4人家族、母子世帯、40代)

経済的な理由で子どもが進学をあきらめて、就職せざるを得ないことを子どもが理解した時、親として悲しかった。(長野県、3人家族、ふたり親世帯、60代父親)

生活が苦しくて借金しても支払いに追われて光熱費、学費、家賃など滞納中。自分名義で借入などできないためかなり苦しい状況です。ガスも5ヶ月止まっており、お風呂も夏は冷たい水で入れたのですが今は実家にお風呂借りに行ったりとホント苦しい生活でどうにかまとまった支援金がほしいです。（沖縄県、4人家族、母子世帯、40代）

子どもが、お腹がすいたと言ってもあげれるものがないのがつらい。特に1歳の子に9歳の子が食事を自分も足りないのに分け与えているとつらくて苦しい。給食費を払えないことを学校に知られることなくしてほしい。同級生に「税金どろぼう」と言われても、先生も止めない。（京都府、5人家族、ふたり親世帯、30代母親）

私があきらかに病気なのですが、検査のお金が出せず数年間苦しんでいます。

（北海道、2人家族、母子世帯、50代）

生きていくのがつらい。（新潟県、3人家族、母子世帯、50代）

つらいことがあり、死にたい気持ちになります子どもを残して死ぬか一緒に死ぬか迷いがある。子どもも生きてる意味がないと言う。でも子どもは頭も良いのでもう少し頑張っしてほしいと思う。（大阪府、3人家族、母子世帯、40代）

もうすべてが絶望しかない。生きていけない。今すぐにでも死にたい。

（鳥取県、2人家族、母子世帯、40代）

辛くても辛いことを話すことによって傷つけられたりすることが今まで何度もあったので話せないです。いつ精神的にも経済的にも身体的にも限界がきてもおかしくない状況でこれからも子どもを育てていけるのか不安しかありません。

（長崎県、2人家族、母子世帯、40代）

子ども食堂を利用したくても、周りの目を気にして子どもたちが嫌がる。子どもたちに支援やサービスを受けさせたくても、周りの目を気にして嫌がる。支援を受けるのか当たり前になってほしいし、格差なく高校まではせめて学費以外の通学送迎サービスや部活の送迎サービスを行政が支援してほしい。また外に出ることの難しい子どもに家庭教師を支援してもらえたり、公共の乗り物などを使う訓練支援を当たり前にしてほしい。障害があっても外に出やすい環境を、親だけの力では限界があります。

（宮崎県、5人家族、母子世帯、40代）

未婚で産むと決めたときに、生活保護の申請に行ったとき、「生活保護を受けてまで産む必要があるのか。親に頭を下げて援助してもらえ」と言われたことがあり、それから生活保護は受けたこともなく、なんとかやってきました。なので、何も期待はしていませんが、給食だけは絶対なくなっほしくないです。（岐阜県、2人家族、母子世帯、30代）

責任が何事も自分だと言われる。子どもの性格までも自分が悪いと責められる。国に対してはもっと支援してほしい。ひとりだと生活が苦しくまらない。

(宮城県、4人家族、母子世帯、40代)

児童扶養手当は、すべて生活費に回って終わり、義務教育が終わってからのの方がお金かかり学費も高い。生活費が毎月赤字、貯金なんてできません。将来不安しかない。児童扶養手当がなくなった後の生活も不安でなりません。(福岡県、3人家族、母子世帯、40代)

体調が優れず、仕事もきちんとできない状態で、子どもの学費は必要であり、毎日自分を責めて益々体調が悪くなる状態です。相談をする人もおらず、親にも迷惑をかけており、今とても辛い。(熊本県、3人家族、母子世帯、40代)

コロナ前に戻りたい。多くはないが収入があったし、子どもたちにも誇れる仕事だった。働くお母さんを応援してくれていた。食事を揃ってとれることも少なかったけど、職場が近く、他に頼れる大人がいなくても何とかやってこれていた。子どもたちも学校を休みがちではなかったし、健康的だった。すべてが変わってしまった。私自身の変化についていけなかった。後悔しかない。何とか今の状況から抜け出したい。

最近、やっとパートを始めることができたが、子どもたちが不登校や病気で欠勤することも多く、私自身も体力的にも辛い。自分が情けない。子どもたちに不自由な思いをさせたくない。子どもにも自分も生き生きと生活できるようになりたい。

(福岡県、4人家族、母子世帯、40代)

仕事、家庭でのストレスが増え精神状態の悪化。通院費の負担も大きく心も体も苦しいと思うことが増えた。物価高騰により生活費のやりくりがもっと大変になり、夫婦での教育資金に対する考えにズレが生じ対立が増えた。上の子が奨学金返済のため、アルバイトをしても世帯収入としてみなされ、下の子が県や市からの奨学制度を受けられなくなるので下の子の学費、進学への援助を受けられないなど、兄弟での格差も生まれることになり、これから先が不安だ。成人式の着物の案内の電話も頻繁になり、レンタル費用も高く費用が出せない。市から案内が届くので市や自治体の支援があったらいいと思う。

(香川県、4人家族、ふたり親世帯、30代母親)

生活が苦しく転職しました。次に気になるのは、児童扶養手当の所得制限にギリギリかかってしまうのではないかと、ということです。どう転んでもがんじがらめです。毎月毎月、ギリギリ生きています。少しずつ借金が膨らんでいき恐怖というものが押し寄せています。助けてほしいです。(石川県、4人家族、母子世帯、40代)

このアンケートでは伝えきれないくらいこれから生活がもっと苦しくなってくると思うと…(香川県、2人家族、40代)

3 アンケート調査から見てきたこと（全体的な傾向）

3-1 新型コロナウイルス・物価高騰の影響

① 経済的困窮がより深刻化

- ・新型コロナウイルス蔓延の影響によって、過半数（53.0%）の家庭で、「失業・休業・転職などで世帯の収入が減った」。また、コロナ前からの仕事の変化として「転職や再就職をした」が34.7%、「ダブルワークが必要になった」が12.7%、「失業したまま」が9.8%であった。
- ・大学・専門学校生、就業者のうち、コロナ禍の影響で「仕事（バイト）の給料が下がった」がそれぞれ27.3%、28.7%にのぼった。
- ・物価・光熱費の高騰の影響として、「家計がさらに苦しくなった」が85.4%、衣食住に関する費用（衣類、光熱費、食費）をさらに節約するようになった家庭が70%前後に達する。さらに、「食事を3回とれなくなった」が約2割（19.7%）にも達した。
- ・この1年で家計が楽になると思うかについて「まったくそう思わない」「あまりそう思わない」を合わせて93.9%に達した。

該当図表、頁： 図表 46~図表 49 (p42~p44)/図表 104(p82)

② 子どもや家庭への悪影響も

- ・新型コロナウイルスの影響によって、「子どもが不登校や学校を休むことが増えた」が26.0%に達した。また、「子どもの学力が下がった」が21.5%、「家族の人間関係が悪くなった」は10.5%であった。
- ・物価・光熱費の高騰の影響として、「子どもの教育費をさらに節約するようになった」が23.6%に達した。
- ・小学生では、コロナ禍による影響として、「学校が休みになり家にいるのがつらかった」が最も高く22.8%に達した。中学生では「学校の成績が下がった」が36.4%、「学校に行くのがイヤになったり、休むことが増えた」が34.1%と高かった。

該当図表、頁： 図表 46(p42)/図表 48(p43)/図表 103(p81)

3-2 保護者調査

① 深刻かつ長期的な経済的困窮

- ・今回調査対象となったあすのばの給付金事業の対象家庭における、深刻な経済的困窮の状況が明らかとなった。
- ・世帯年収は平均 178 万円で、世帯貯蓄 50 万円未満の家庭は 74.1%にのぼる。生活保護を受給中または過去に受給していた者は 15.4%にのぼった。
- ・2023 年 10 月の世帯収支は 74.9%が赤字であった。そのうち約 4 割（39.4%）が貯金を切り崩し、約 2 割強（22.3%）が借金をしている。
- ・回答者の約 6 割（60.5%）は 4 年以上の長期にわたり困窮状態にあり、貧困の長期化がうかがわれる。

該当図表、頁：図表 16~図表 17(p10)/図表 25~図表 28 (p30~p31)

② 危機的な健康状態・精神状態

- ・回答者の健康状態・精神状態についても危機的な状況が浮かびあがってきた。
- ・健康状況を「よくない・あまりよくない」と回答した者が約 4 割（39.2%）に達する。加えて、明らかに体調不良や明確に症状が出ているときに、医療機関を「ほとんど受診しない・まったく受診しない」者が 33.9%にのぼる。その理由として、「医療費負担が大きい」が 60.9%、「病院に行く時間がない」が 51.4%にのぼった。
- ・概ね 3~4 割の保護者が、常に精神的な辛さを抱えている。「絶望的だと感じた」に「いつも」または「たいてい」と回答した者は 30.7%に達し、これは内閣府による「令和 3 年子供の生活状況調査」の同質問の 3.8%と比べ大変高くなっている。
- ・困ったときに頼れる人が「いない」という回答が約 4 割（41.7%）に達する。

該当図表、頁：図表 30~図表 34 (p33~p35)

③ 経済的理由で子どものさまざまな機会・経験が剥奪されている

- ・経済的理由により、子どもについて何らかの「諦めた経験」がある者は約9割に達する。
- ・最も多いのは、「塾・習いごと」で68.6%に達する。学習関係では他にも「模試や資格試験」(15.1%)、「教科書・参考書」(10.7%)となっており、こうした経験などの剥奪の影響が、子どもの「進学や就職」の諦め(21.3%)に帰結すると推察される。
- ・その他にも、「誕生日のお祝いやクリスマスなどのイベントごと」(46.1%)、「友達との外出」(39.2%)、「海水浴やキャンプなどの体験」(37.0%)など、さまざまな経験、体験が剥奪されている状況が明らかとなった。

該当図表、頁：図表 29(p32)

④ 行政への不信と忌避感

- ・困ったときに頼れる人が「いる」と回答した者のうちでも、「役所など福祉の職員」と回答した者は約1割(10.2%)にとどまった。
- ・「相談したくても、できるだけ役所に行きたくない」と回答した者は約7割(68.9%。「とてもそう思う・まあそう思う」)。また、「相談や手続きでイヤな思いや屈辱的に感じることもある」が58.7%に達する。
- ・行政の制度については、「自分たちの現状や要望・ニーズに沿ったものだ」について「あまりそう思わない・まったくそう思わない」の回答割合が83.7%、「生活などが改善される」について同割合は81.5%にも達する。

該当図表、頁：図表 35(p35)/図表 37(p37)/図表 38(p37)

⑤ 困窮した生活をさらに追い詰める「自己責任論」

- ・困窮の原因が回答者や家族にあると責められた経験が「よくある＋ときどきある」と答えた割合は過半数（50.6%）をしめた。生活保護受給、あるいは過去に受給していた家庭に限定すると同割合は 60%超に達する。どのような人から責められた経験があるかについては、「自分の親や兄弟・姉妹、親族」が 56.1%で、次いで「役場などの職員」が 34.0%にのぼった。
- ・回答者自身が、困窮状況にあることに対して責任があると感じた経験については、「よくある＋ときどきある」が 87.3%にものぼる。
- ・こうした自己責任論を向けられる一方で、働いていない保護者のうち、その理由として、「自分の病気・障害」と「家族の介護・介助」を挙げた者は 3分の2に達するなど、個人の責任に還元できない苦しさの中にあることがうかがわれる。

該当図表、頁：図表 24(p30)/図表 42~図表 45(p40~p41)

3-3 子ども・若者調査

① 不安定な「衣・食・住」と厳しい精神状態

- ・子どもたちの基本的な衣食住の不安定な状態と、こうした基本的環境の剥奪状態を反映してか、精神状態の深刻な状況が明らかとなった。
- ・朝食を「毎日食べる」小学生は 63.4%、中学生は 50.5%にとどまる。国立教育政策研究所「令和5年度全国学力・学習状況調査」における、朝食を毎日食べている子どもの割合（小学生 83.7%、中学生 79.9%）と比べてもかなり低水準である。また、長期休み中の昼食については、「毎日食べる」小学生は 73.2%、中学生は 54.7%であった。
- ・入浴について、「毎日」が小学生では 69.9%で、「週1～2日、ほとんど入らない」が 5.7%にのぼる。中学生では「毎日」が 69.6%、「週1～2日、ほとんど入らない」が 2.1%であった。
- ・小学生～高校生の合計で、以下の質問について「よくある、ときどきある」と回答した者の割合は、「何でもないのにイライラする」48.2%、「何となく大声を出したい」39.2%、「学校に行く気がしない」38.7%、「孤独を感じることもある」34.6%、「消えてしまいたい」17.8%。日常的に厳しい精神状態に置かれている子どもの姿が浮かびあがる。
- ・特に非就業の若者において深刻な健康状態・精神状態がみられる。非就学・非就業の理由として「けがや病気の療養・休養」が 27.9%に達するほか、以下の質問について「いつも・たいてい」と回答した者の割合が、「自分は価値のない人間だと感じた」が就業者 18.9%に対し非就業者 44.2%、「絶望的だと感じた」が就業者 16.1%に対し非就業者 30.3%と非常に高くなっている。

該当図表、頁：図表 50～図表 52(p45～p46)/図表 89(p68)/図表 117(p92)

② 学校を「居場所」にできない子どもの多さ

- ・学校が「あまり+ぜんぜん」楽しくないとの回答が、小学生で 22.8%、中学生で 29.4%と 3 割に迫る。進学先を一定程度選択できる高校生でも、同割合は 22.1%に達する。「NHK2022年調査」における中学生 9.5%、高校生 12.4%と比較しても非常に高い。
- ・学校の授業の理解度について、「いつも+だいたいわかる」が小学生で 37.4%、中学生で 16.1%、高校生では 35.3%にとどまる。特に中学校において、学校が楽しくなく、授業が分からないという生徒の割合が高くなっている。

- ・学校をやめたくなるほど悩んだことがある者は、高校生、大学・専門学校生ともに約半数に達する。理由として高校生で最も高いのが「友人や教員とうまくかかわれない」で22.7%、大学・専門学校生で最も高いのが「経済的に余裕がない」で28.6%にのぼる。「勉強についていけない」は高校生で14.2%、大学・専門学校生で11.2%であった。
- ・困っていることや悩みごとがあるとき、相談できると思う人として、「学校の先生」は小学生で23.6%、中学生で14.5%、高校生で13.6%であった。同質問に対する「内閣府令和3年調査」の中学生の回答（23.4%）と比較しても低水準である。

該当図表、頁：図表 53~図表 57 (p47~48)/図表 88(p67)/図表 96(p74)

③ 働いても続く経済的な苦しさや閉塞感

- ・就業者のうち、仕事が「あまり+まったく充実していない」が32.2%に達する。その理由として、「十分な金額を稼ぐことができない」（65.2%）、「将来が見えない」（50.0%）、「収入が安定していない」（47.8%）、「やりたい仕事ではない」（39.1%）。
- ・高校生でアルバイト経験がある者は43.8%をしめ、アルバイト代の用途は「自分のおこづかい」78.9%である一方、「授業料や通学費などの学校の費用」34.3%、「家庭の生活費」25.3%、「進学や就職など卒業後の費用」16.6%など、現在や将来の生活に欠かせない費用をアルバイトで賄っている状況が明らかとなった。
- ・経済的な心配がなければアルバイトの日数を「減らしたい」は54.0%で、アルバイトのために学校の授業や生活に悪い影響が「とても+少しある」が50.2%に達した。同様に大学・専門学校生でも、アルバイト日数を「減らしたい」は64.2%、アルバイトの悪い影響が「とても+少しある」が62.2%にのぼった。

該当図表、頁：図表 106(p84)/図表 71~図表 77(p56~p58)

④ 学びたい意欲や機会の剥奪

- ・小学生の70.7%が、「高校や大学に行きたいと思った人が誰でも行けるしくみ」を求めている。同じように、「教育や進学の費用負担を減らす制度」（中学生72.4%、高校生86.4%、大学・専門学校生89.9%）、「無料学習塾や習いごとなどの費用負担の軽減」（中学生60.7%、高校生49.7%、大学・専門学校生43.7%）など、学習やその継続に関する支援を求める声が明らかとなった。
- ・お金がなくてしたくても諦めた経験について、塾や習いごとを諦めた経験がある者が小学生~大学・専門学校生でそれぞれ5割弱程度であった。また、高校生や大学・専門学校生

では、模試や検定など、将来に直結する経験を諦めた者も約2割に達する（高校生18.5%、大学・専門学校生23.7%）。

- ・ 高校生の進路選択の理由について、「家にお金がないと思うから」が19.0%、「早く働く必要があるから」が12.6%に達する。
- ・ 他方で、大学・専門学校生で、奨学金や学費免除を受けている者は92%に達し、その中でも給付型奨学金・学費免除の受給者割合が高いことには、教育費負担軽減策の一定の効果を見ることができると考えられる。
- ・ 奨学金などを受けて「家計にゆとりが生まれる」「アルバイトが軽減され、学業との両立がしやすい」が3割超の一方で、「利用中の奨学金だけでは足りず、アルバイトの負担が大きい」が25.0%、「利用中の奨学金だけでは足りず、仕送りのため保護者の負担が大きい」が10.0%にのぼった。

該当図表、頁：図表 98(p76)/図表 99(p77)/図表 87(p66)/図表 85(p63)/図表 78~図表 80(p59~p60)

⑤ 何よりも生活の安定を希求

- ・ 小学生による国などの制度への希望のうち、「生活が楽になるしくみ」が最も高く78.0%に達する。同様に中学生以降でも、保護者や家族全体への支援制度として、「生活を安定させるための手当や給付金の拡充」が最も高く9割近くに達する（中学生87.6%、高校生90.8%、大学・専門学校生88.4%）。子どもであっても、家庭生活の経済的安定を希求している状況が浮かびあがった。

該当図表、頁：図表 98(p76)/図表 100(p78)

4 アンケート調査から見えてきたこと（調査別詳細）

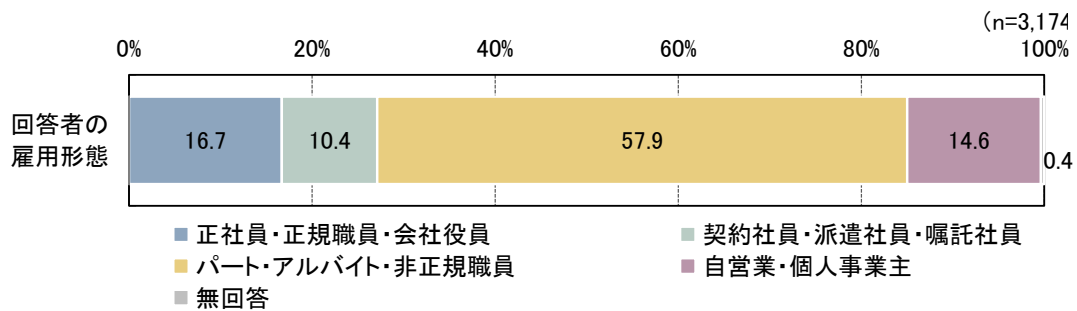
4-1 保護者調査から見えてきたこと

4-1-1 就業状況

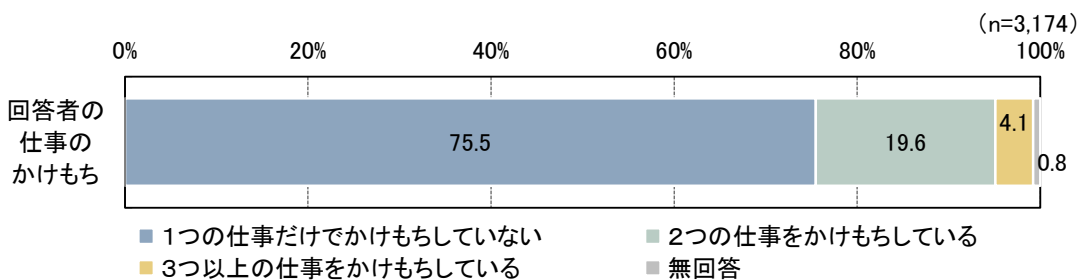
(1) 就業者のうち 68.3%が非正規雇用（契約社員・派遣社員・嘱託社員、パート・アルバイト・非正規職員）。23.7%が2つ以上の仕事をかけもちしている。

・回答者のうち働いている者の割合は約8割で、そのうち68.3%が非正規雇用。さらに、そのうち23.7%が2つ以上の仕事をかけもちしている。

図表 22 就業状況



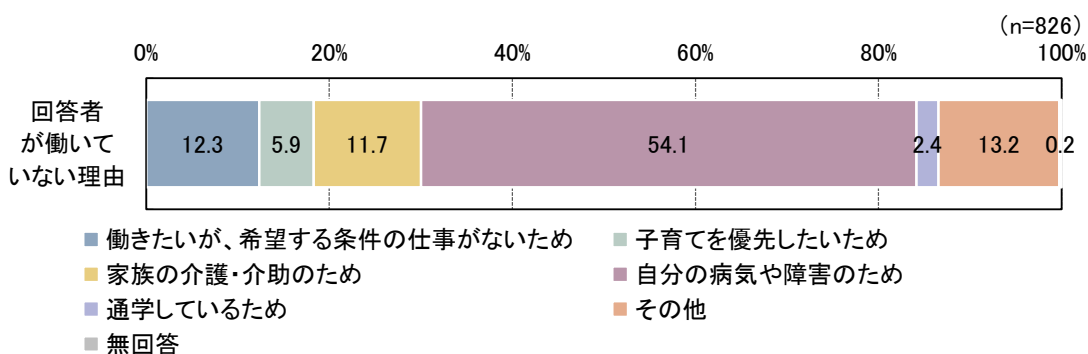
図表 23 仕事のかけもちの状況



(2) 非就業の理由は自分の病気・障害のため、家族の介護・介助のためで65.8%をしめる。

・回答者の働いていない割合は約2割で、その理由として「自分の病気・障害」54.1%、「家族の介護・介助」11.7%で合わせて3分の2をしめる。

図表 24 非就業の理由

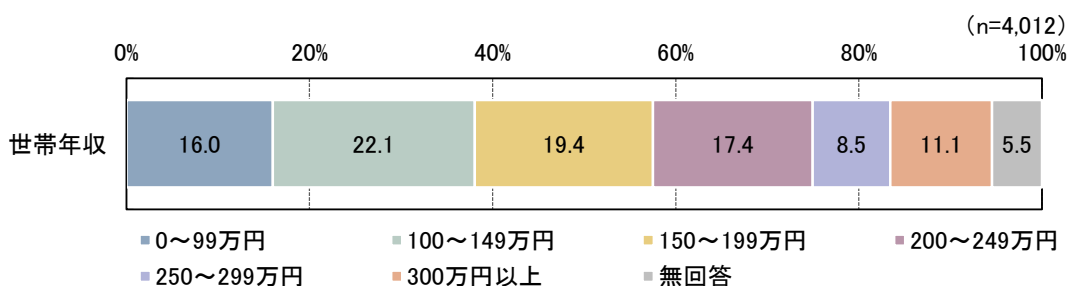


4-1-2 経済状況

(3) 平均世帯年収は178万円。日本の児童のいる世帯の平均年収785万円²の22.7%。

・回答者のうち、平均世帯年収が100万円未満が16.0%、200万未満が57.5%。

図表 25 回答者の世帯年収



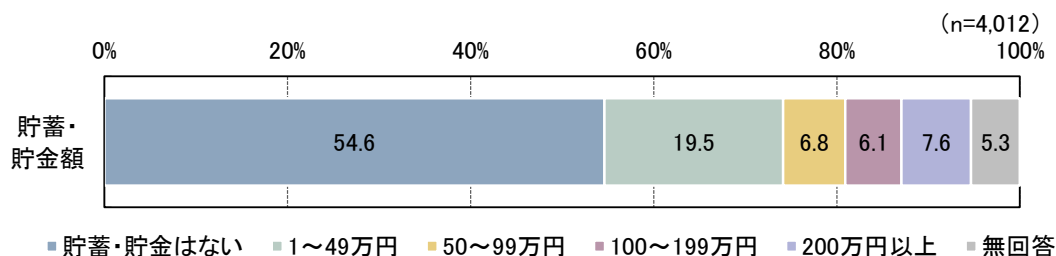
2 厚生労働省「2022（令和4）年 国民生活基礎調査」

(<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa22/dl/14.pdf>) p11。2021（令和3年）の児童がいる世帯の総所得平均値。なお、母子世帯の総所得平均は328.2万円。

(4) 54.6%の世帯が貯蓄ゼロ、74.1%が50万円未満。

・54.6%の世帯が貯蓄ゼロ。1～49万円未満の19.5%と合わせて、4分の3が貯蓄50万円未満。

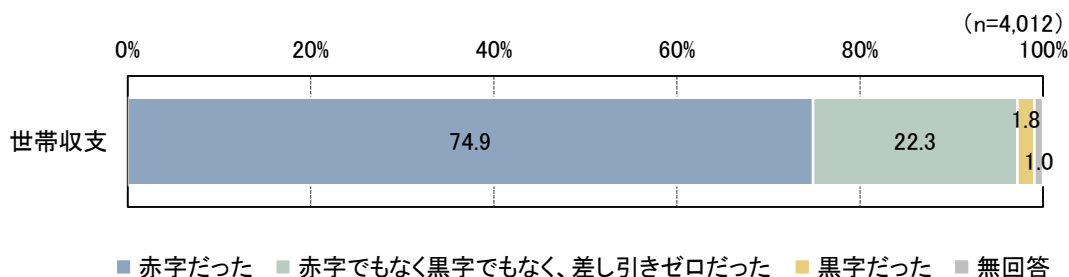
図表 26 回答者の世帯貯蓄



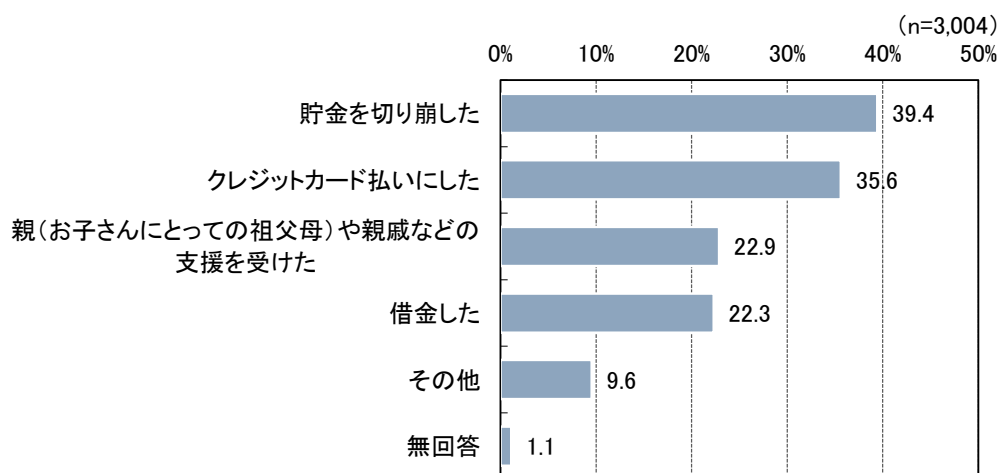
(5) 世帯収支は74.9%が赤字。そのうち39.4%が貯金を切り崩し、22.3%が借金をした。

・昨年(2023年)10月の世帯収支は74.9%が赤字で、そのうち39.4%が貯金を切り崩し、22.3%は借金をした。

図表 27 昨年10月の世帯収支



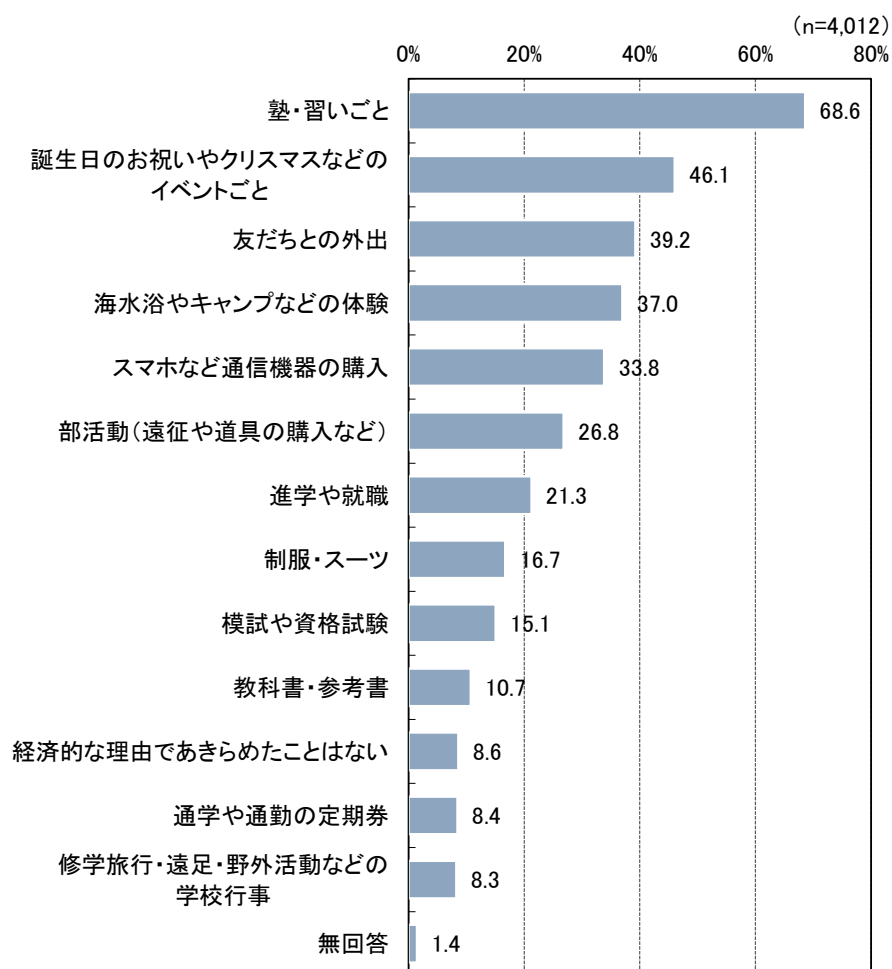
図表 28 赤字を補った方法(複数回答)



(6) 子どもが経済的理由で、何らかの「諦めた経験」がある者は9割超³。

- ・子どもが経済的理由で何らかの諦めた経験がある人は9割超で、「塾・習いごと」68.6%、「誕生日のお祝いやクリスマスなどのイベントごと」46.1%、「友達との外出」39.2%、「海水浴やキャンプなどの体験」37.0%、「スマホなど通信機器の購入」33.8%、「部活動（遠征や道具の購入など）」26.8%、「進学や就職」21.3%にのぼった。

図表 29 経済的理由で諦めた経験があるもの（複数回答）



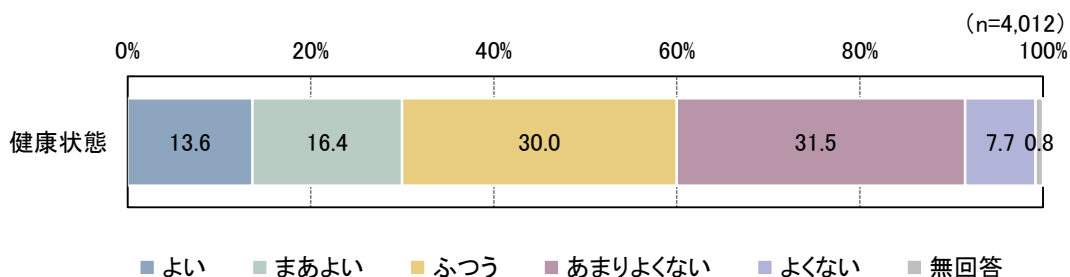
3 「あすのば 2017 年度調査中間報告」（13 頁）では、「塾・習いごと」が 68.8%、「海水浴やキャンプなどの体験」が 25.3%、「お祝い」が 20.2%、「部活動」が 14.3%、「進学・就職」が 11.9%、「病院への通院」が 9.5%、「制服・スーツ」が 9.4%、「教科書・参考書」が 9.1%、「遠足・野外活動など学校行事」が 3.9%、「通学・通勤定期」が 3.2%、「その他」が 11.5%となっている。また、「経済的な理由で諦めた経験はない」が 14.0%となっている。

4-1-3 回答者の健康状態

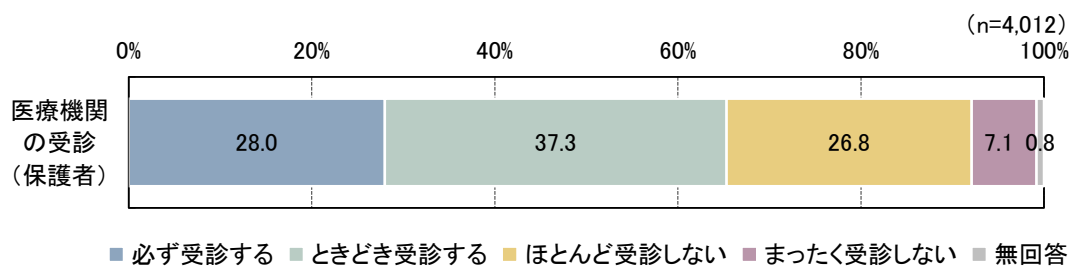
(7) 回答者の健康状況は、「よくない・あまりよくない」が約4割⁴。

・明らかに体調不良や明確に症状が出ているときに「ほとんど受診しない・まったく受診しない」が33.9%にのぼる。受診しない理由は、「医療費の負担が大きいため」60.9%、「病院などに行く時間がないため」が51.4%にのぼる。

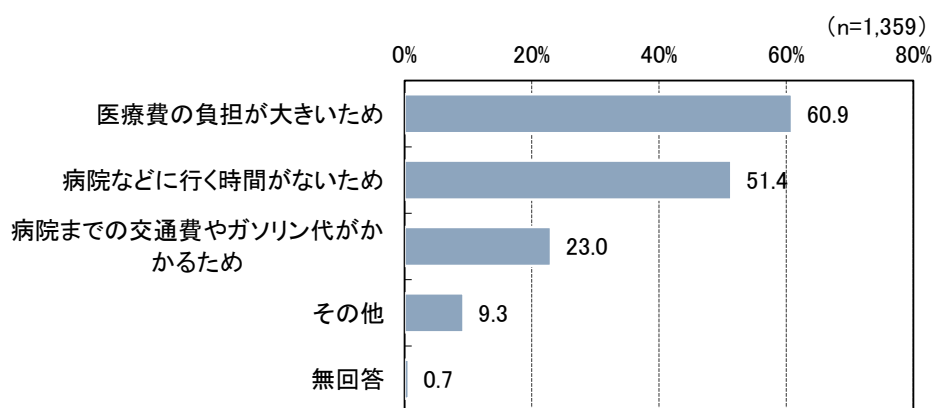
図表 30 回答者の健康状況



図表 31 体調不良の際に、医療機関を受診するか



図表 32 受診しない理由 (複数回答)

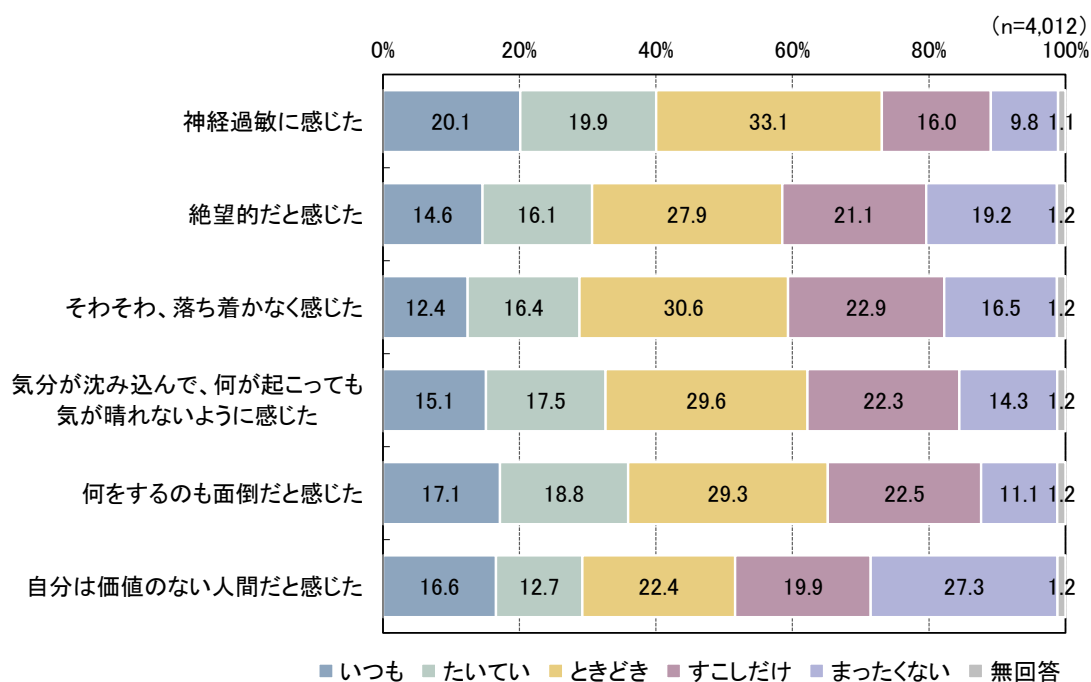


4 「あすのぼ 2017 年度調査中間報告」(18 頁)では、健康状態が「良くない」(13.3%)、「どちらかと言えば良くない」(27.9%)の合計は41.2%となっている。

(8) 3~4 割の保護者が、常に精神的な辛さを抱えている⁵。

・精神面では、以下の質問について「いつも・たいてい」と回答した者の割合が、「神経過敏に感じた」40.0%、「何をするのも面倒だと感じた」35.9%、「気分が沈み込んで、何が起こっても気が晴れないように感じた」32.6%、「絶望的だと感じた」30.7%、「自分は価値のない人間だと感じた」29.3%、「そろそろ、落ち着かなく感じた」28.8%にのぼる。

図表 33 回答者の精神状況



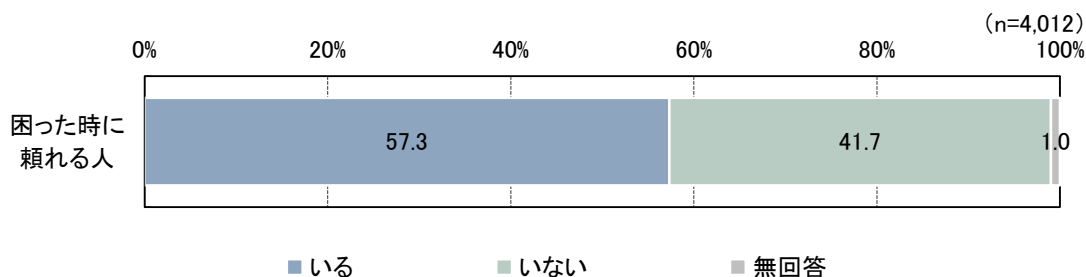
5 「内閣府令和3年調査」(177頁)では、「いつも」と「たいてい」の割合は、「神経過敏に感じた」(5.1%、7.2%)、「絶望的だと感じた」(1.0%、2.8%)、「そろそろ、落ち着かなく感じた」(1.5%、4.2%)、「気分が沈み込んで、何が起こっても気が晴れないように感じた」(2.4%、5.8%)、「何をするのも面倒だと感じた」(3.7%、6.7%)、「自分は価値のない人間だと感じた」(2.3%、3.5%)となっている。

4-1-4 繋がり、支援利用の状況

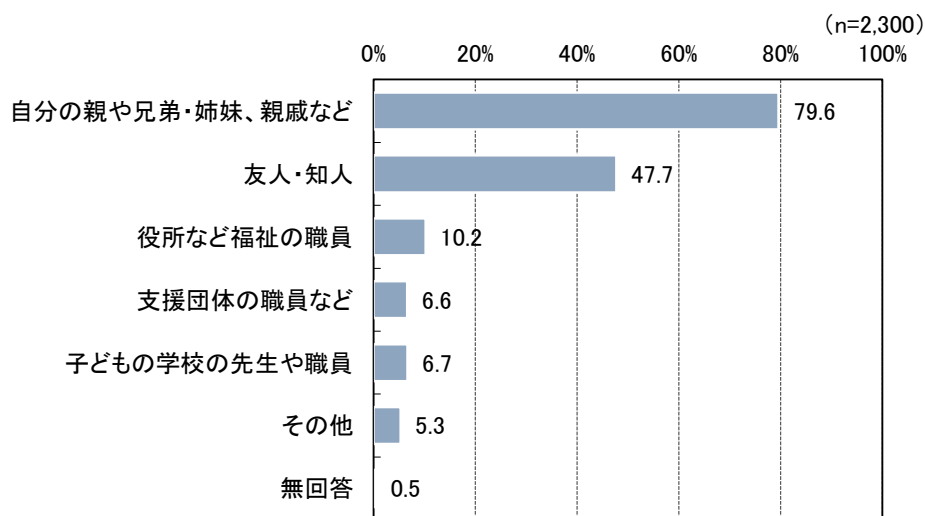
(9) 困ったときに頼れる人が「いない」という回答が4割超⁶。

- ・困ったときに頼れる人は、「自分の親や兄弟・姉妹、親戚など」79.6%、「友人・知人」47.7%で、「役所など福祉の職員」は10.2%のみであった。

図表 34 困ったときに頼れる人がいるか



図表 35 困ったときに頼れる人の属性（複数回答）

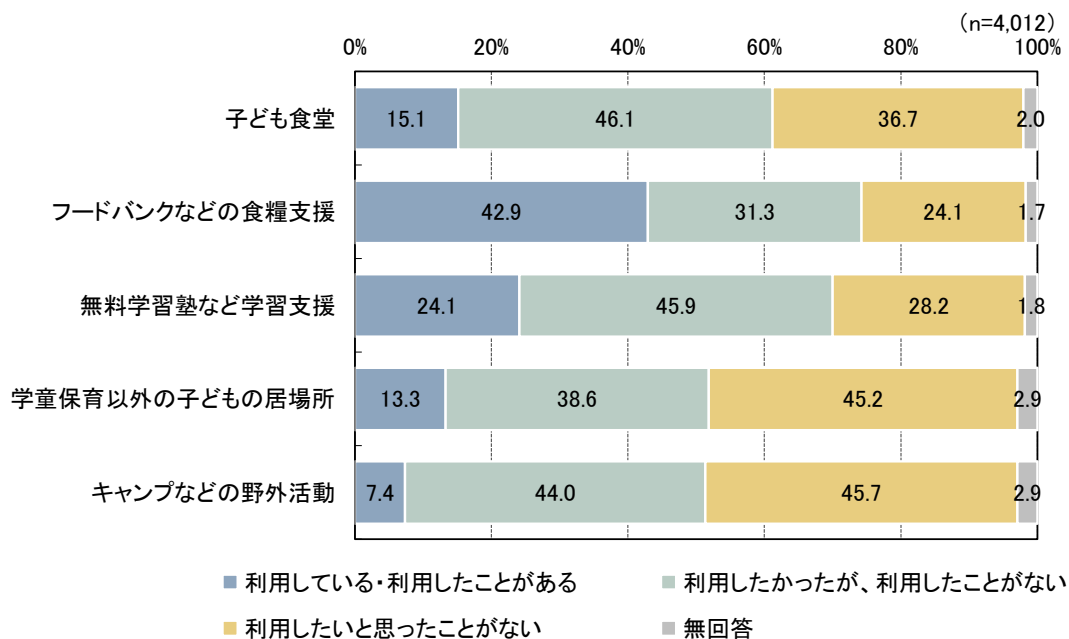


⁶ 「内閣府令和3年調査」（176頁）では、「あなたは次に挙げる事柄で頼れる人はいますか」の設問に対して、「頼れる人がいる」と回答した割合は、「a. 子育てに関する相談」で92.4%、「b. 重要な事柄の相談」で90.7%、「c. いざというときのお金の援助」で66.5%となっている。

(10) 民間支援について「利用しなかったがしたことがない」が3~4割台に達する。

・民間支援について、以下の利用経験（利用している・利用したことがある）は、「フードバンクなどの食糧支援」が42.9%である一方、「無料学習塾など学習支援」24.1%、「子ども食堂」15.1%、「学童保育以外の子どもの居場所」が13.3%にとどまっている。

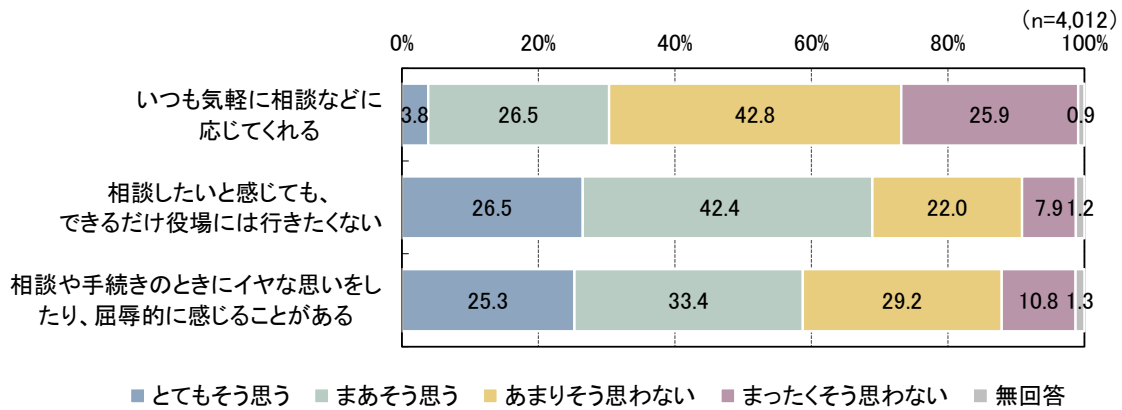
図表 36 民間の支援の利用経験



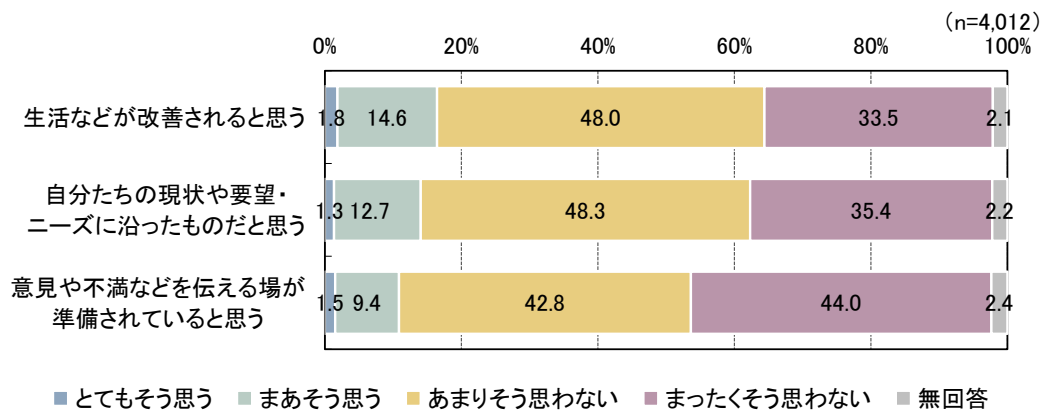
(11) 「相談したくても、できるだけ役所に行きたくない」が約7割。行政の制度に対する信頼や満足は非常に低い。

- ・役所の窓口にたいする印象として「とてもそう思う・まあそう思う」と回答した者の割合は、「いつも気軽に相談などに応じてくれる」で30.3%にとどまる。また、「相談や手続きのときに思いをしたり、屈辱的に感じることもある」が58.7%をしめる。
- ・行政の制度に対する印象について、「あまりそう思わない・まったくそう思わない」と回答した者の割合は、「意見や不満などを伝える場が準備されていると思う」で86.8%、「自分たちの現状や要望・ニーズに沿ったものだと思う」が83.7%、「生活などが改善されると思う」が81.5%にも達する。

図表 37 役所の窓口に対する印象



図表 38 行政の制度に対する印象

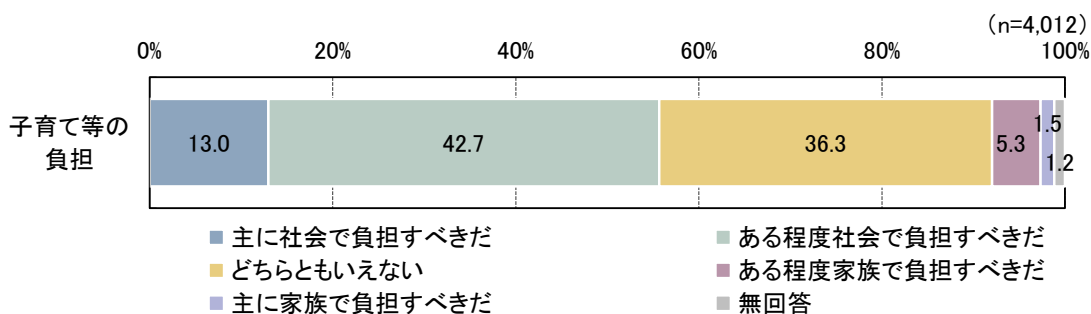


4-1-5 希望する支援について

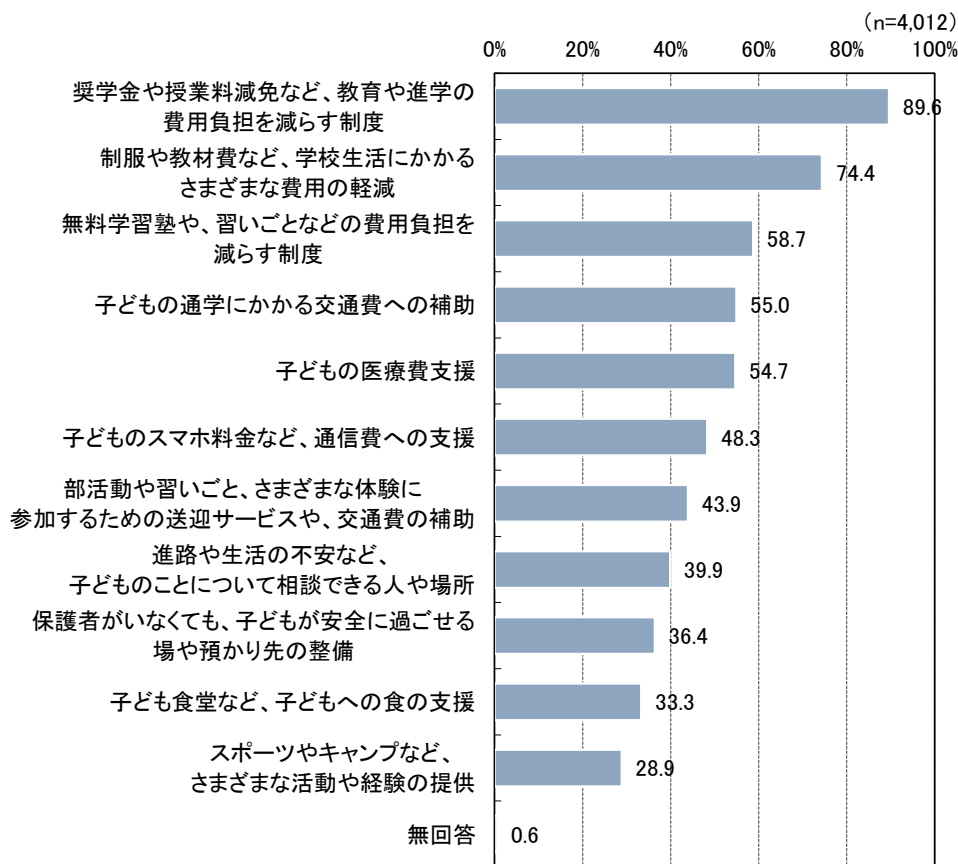
(12) 希望する支援制度として「奨学金や授業料減免など、教育や進学のコスト負担を減らす制度」89.6%、「生活を安定させる手当や給付金の拡充」86.5%

- ・子育てや教育のコストや労力を社会で負担すべきという回答が 55.7%に達する。希望する子どもへの支援制度は、「奨学金や授業料減免など、教育や進学のコスト負担を減らす制度」89.6%、「制服や教材費など、学校生活にかかるさまざまなコストの軽減」74.4%。

図表 39 子育てや教育のコストや労力の負担について、社会と家族のどちらが負担すべきと思うか

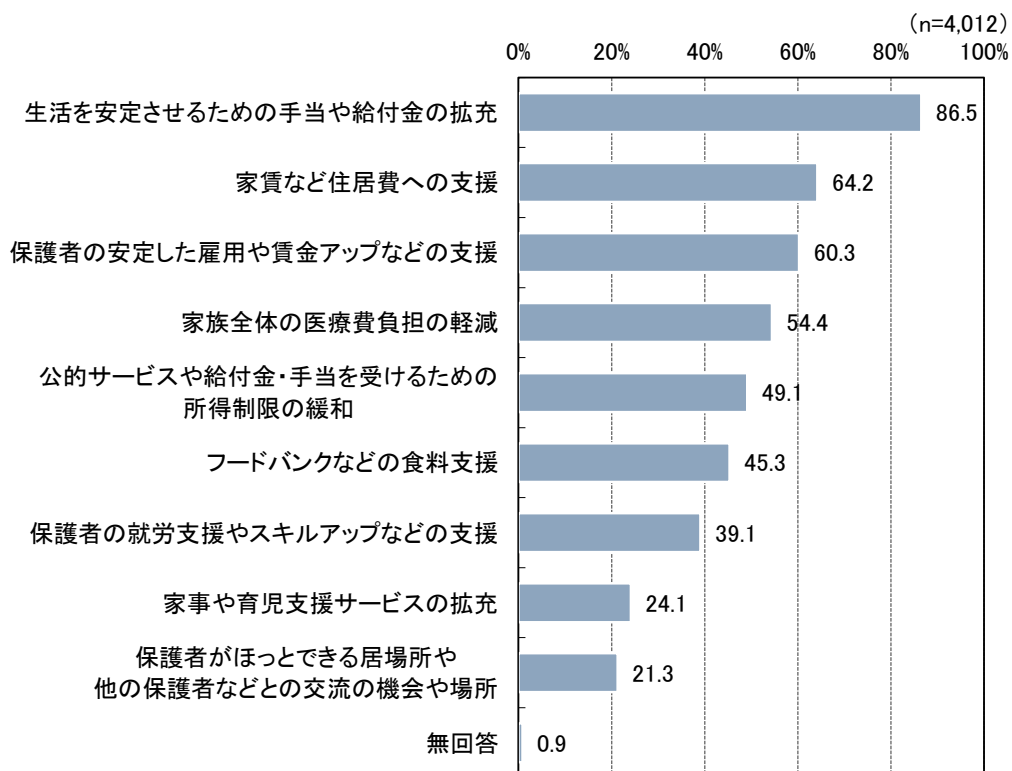


図表 40 希望する子どもへの支援制度（複数回答）



- ・希望する保護者・家族全体への支援制度は、「生活を安定させるための手当や給付金の拡充」86.5%、「家賃など住居費への支援」64.2%。

図表 41 希望する保護者・家族全体への支援制度（複数回答）

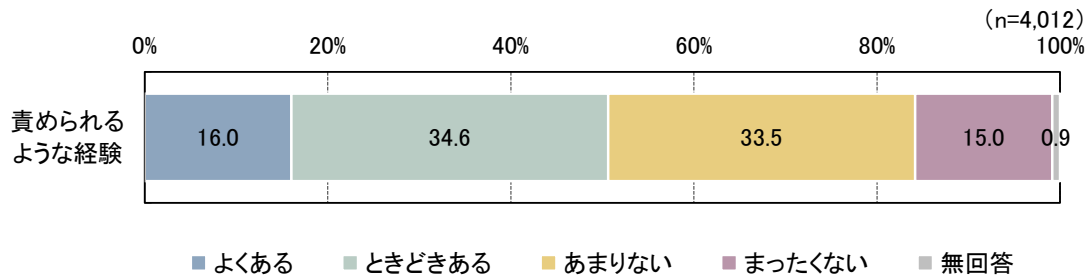


4-1-6 困窮と自己責任について

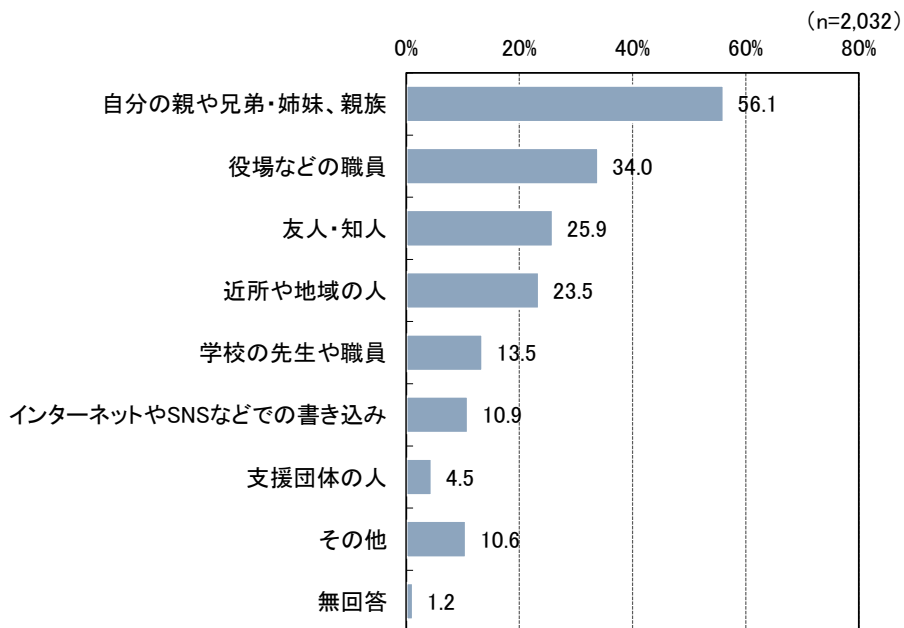
(13) 困窮の責任を責められた経験ありが半数超。自責を感じたことがある人が87.3%

- ・困窮の原因が回答者・家族にあると責められた経験が「よくある・ときどきある」と回答した者の割合は50.6%をしめ、責められた経験がある人は「自分の親や兄弟・姉妹、親族」からが56.1%、「役場などの職員」からが34.0%にものぼる。生活保護受給、あるいは過去に受給していた世帯において、非受給の世帯よりも、責められた経験があると答える割合がより高くなっている。
- ・困窮状況にあることに対して回答者自身の責任があると感じたことが、「よくある・ときどきある」は87.3%にものぼる。

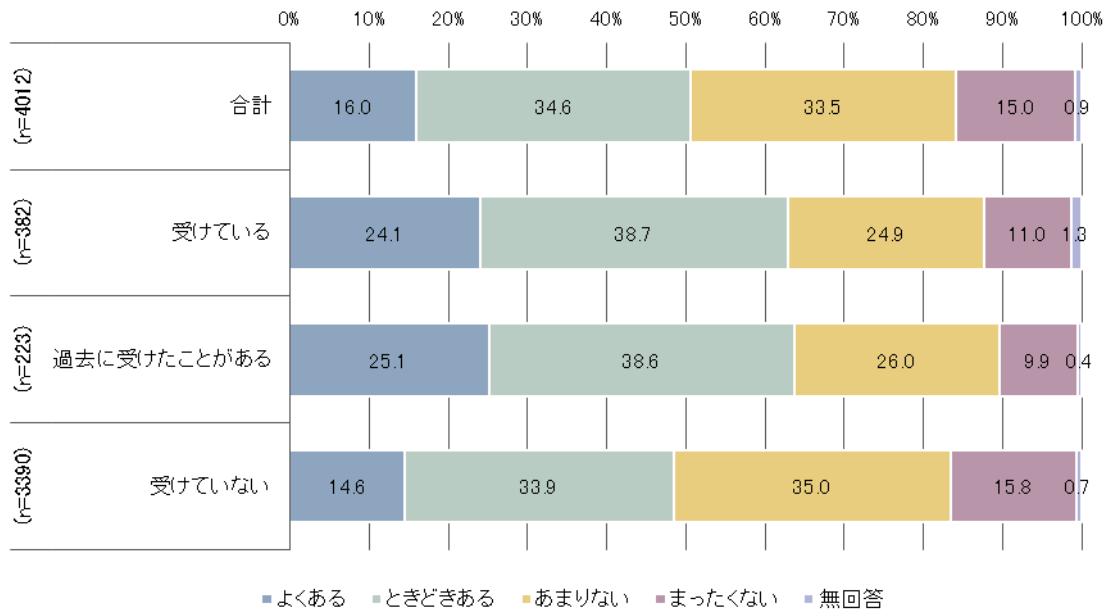
図表 42 困窮の原因が回答者・家族にあると責められた経験



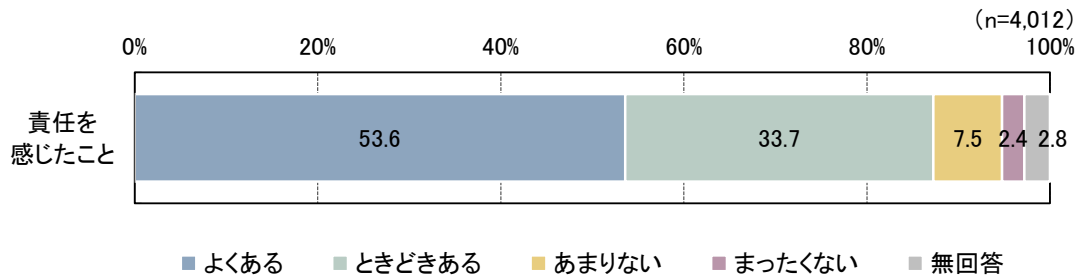
図表 43 責められた経験があるのはどのような人からか (複数回答)



図表 44 生活保護受給状況×困窮の原因が回答者・家族にあると責められた経験



図表 45 困窮状況にあることに対して自身の責任があると感じたことがあるか

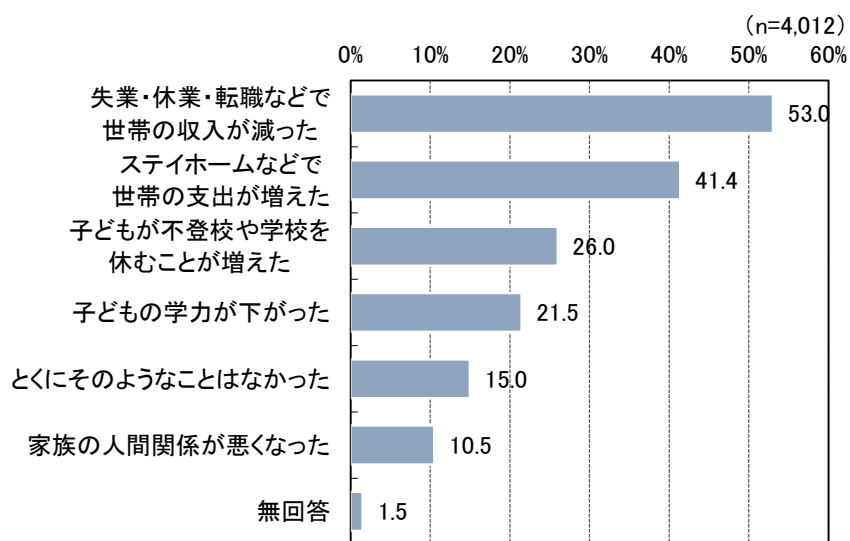


4-1-7 コロナ禍・物価上昇の影響

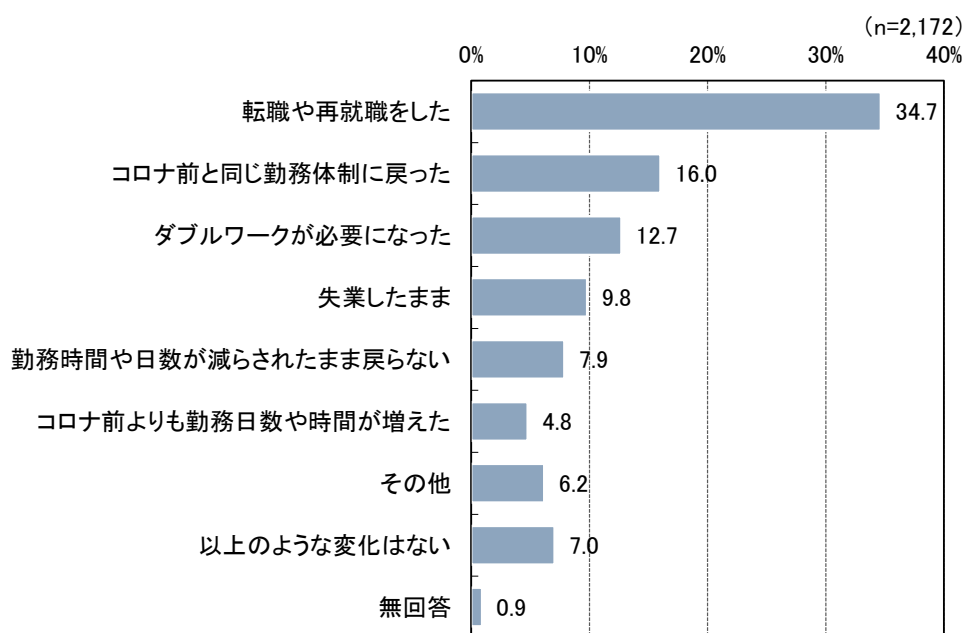
(14) コロナ禍によって過半数の家庭で世帯収入が減少。

- ・コロナ禍によって、保護者の8割超が、家庭・子どもに何らかの影響があったと回答した。そのうち「失業・休業・転職などで世帯の収入が減った」が53.0%と半数を超え、「子どもが不登校や学校を休むことが増えた」も26.0%に達した。
- ・コロナ前からの仕事の変化として「転職や再就職をした」が34.7%にのぼる。

図表 46 コロナによる家庭・子どもへの影響（複数回答）

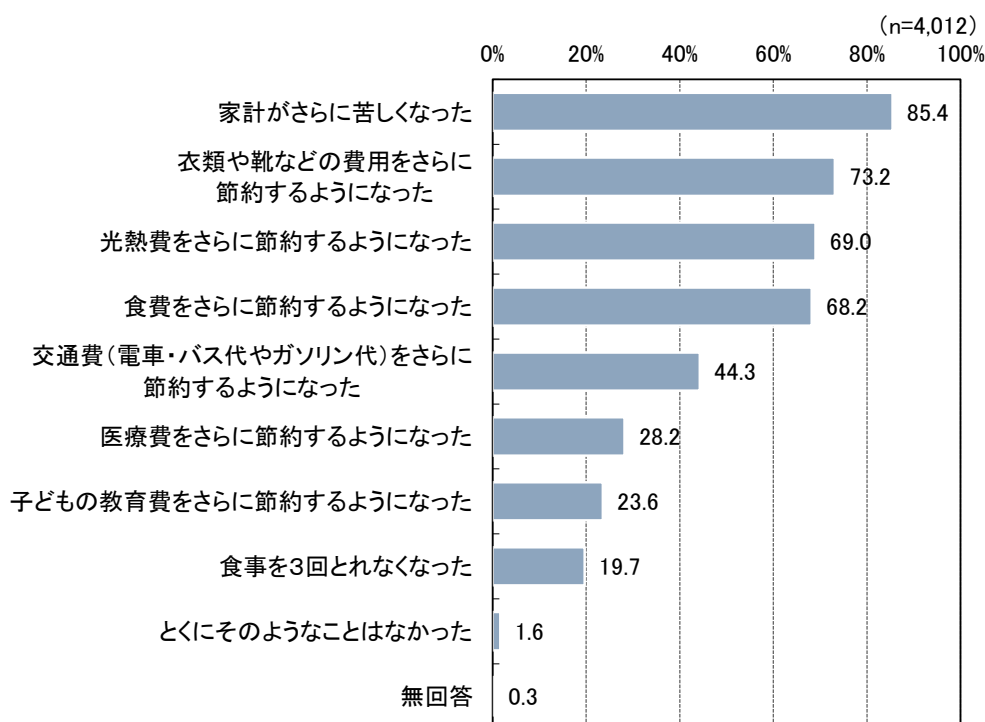


図表 47 コロナ前からの仕事の変化（複数回答）



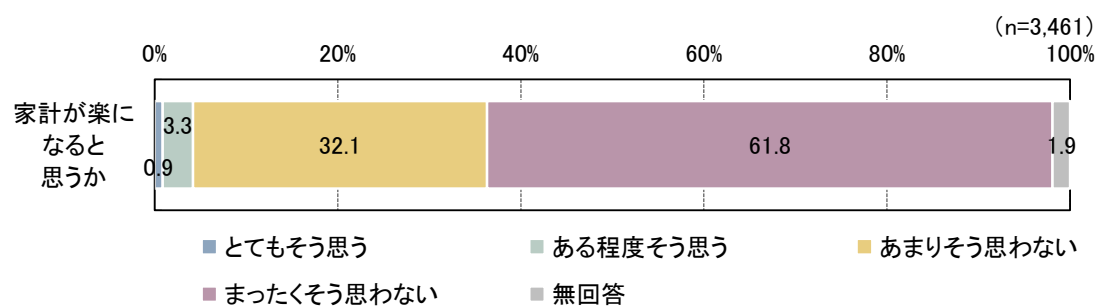
(15) 物価・光熱費の高騰の影響として、「家計がさらに苦しくなった」85.4%。「食事を3回とれなくなった」19.7%にも達する。

図表 48 物価・光熱費の高騰の影響（複数回答）



(16) この1年で家計が楽になると思うかについて「まったくそう思わない」「あまりそう思わない」で合わせて93.9%に達する。

図表 49 この1年で家計が楽になると思うか



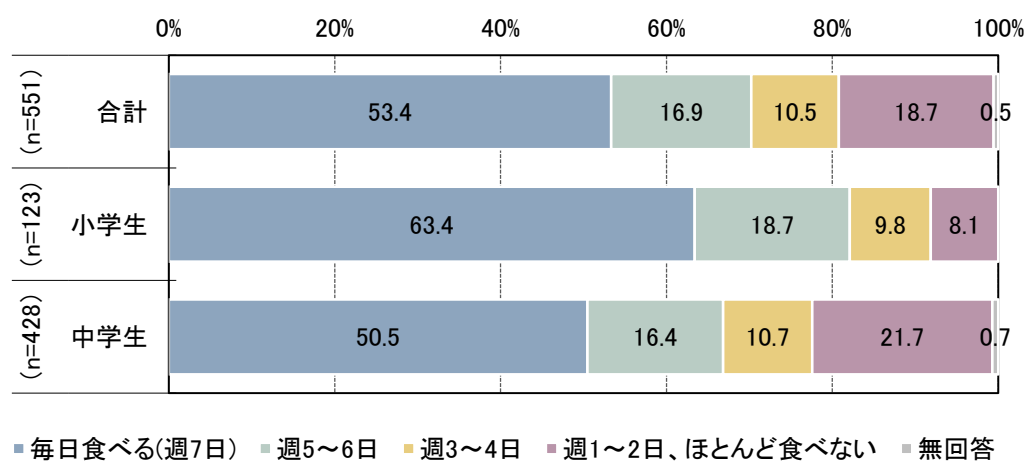
4-2 就学中の子ども・学生の調査から見てきたこと

4-2-1 暮らし・学校生活

(1) 朝食を「毎日食べる」小学生は63.4%、中学生は50.5%⁷。夏休みや冬休み中の昼食を「毎日食べる」小学生は73.2%、中学生は54.7%⁸。入浴頻度が「週4日以下」の子どもが小学生は13.8%、中学生は12.1%⁹。

・朝食を食べる頻度は、小学生では「毎日食べる」は63.4%のみで、「週5～6日」18.7%、「週4日以下」が17.9%をしめる。中学生では「毎日食べる」は50.5%のみで、「週1～2日、ほとんど食べない」21.7%、「週5～6日」16.4%、「週3～4日」10.7%。

図表 50 朝食の頻度（小中学生）



(注) 値0（ゼロ）のラベルは非表示（以下同様）

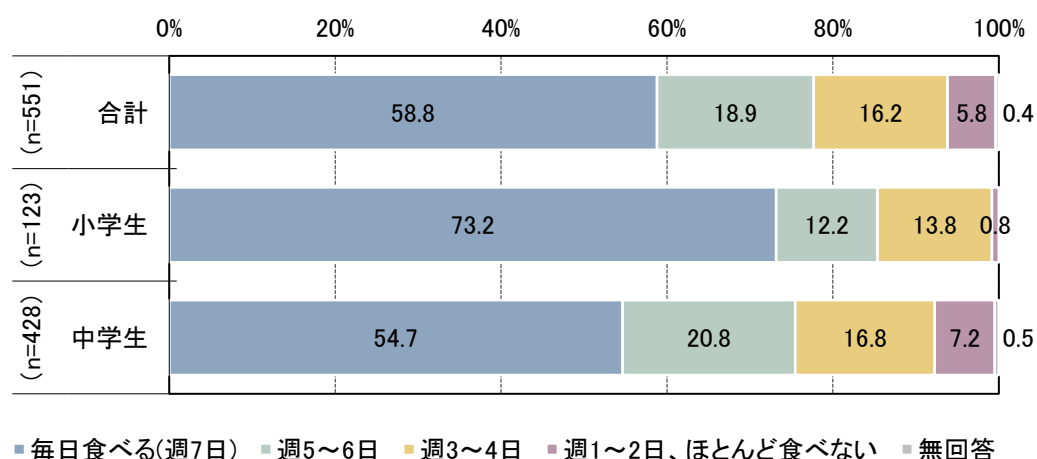
7 「内閣府令和3年調査」（180頁）では、中学生の朝食について、「毎日食べる（週7日）」が82.0%、「週5～6日」が10.3%、「週3～4日」が2.8%、「週1～2日、ほとんど食べない」が4.6%となっている。また、国立教育政策研究所「令和5年度全国学力・学習状況調査結果資料」では、「朝食を毎日食べていますか」の設問に対して、小学生、中学生の回答は、それぞれ「している」が83.7%、79.9%、「どちらかといえばしている」が10.2%、12.0%、「あまりしていない」が4.6%、5.4%、「全くしていない」が1.5%、2.7%となっている。

8 「内閣府令和3年調査」（180頁）では、中学生の朝食について、中学生の夏休みや冬休みなどの期間の昼食について、「毎日食べる（週7日）」が89.1%、「週5～6日」が7.1%、「週3～4日」が2.7%、「週1～2日、ほとんど食べない」が0.6%となっている。

9 厚生労働省「2019年家庭の生活実態及び生活意識に関する調査」では、母子世帯について、一般世帯の95.8%、生活保護受給世帯の90.3%が、それぞれ「毎日入浴する」となっている。

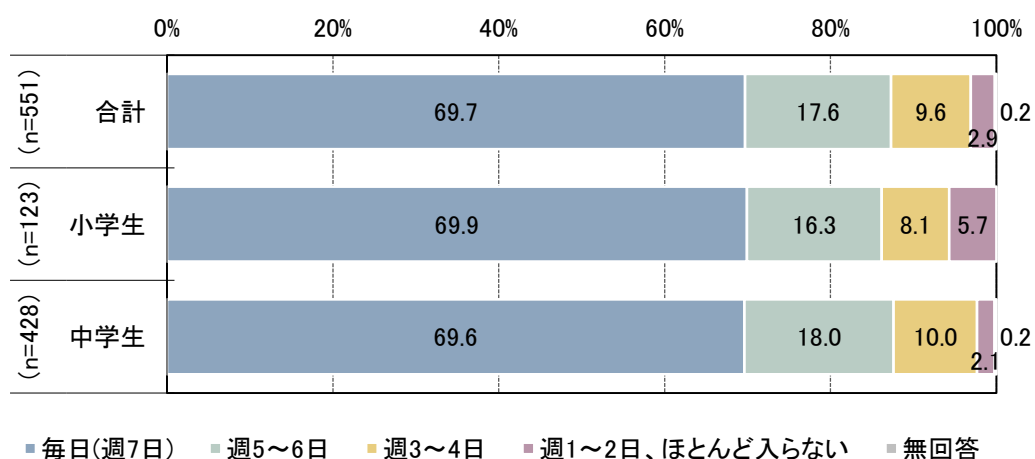
- ・夏休みや冬休み中の昼食を食べる頻度は、小学生では「毎日食べる」は73.2%のみで、「週5～6日」12.2%、「週4日以下」が14.6%をしめる。中学生では「毎日食べる」は、54.7%のみで、「週5～6日」20.8%、「週3～4日」16.8%、「週1～2日、ほとんど食べない」7.2%。

図表 51 夏休みや冬休み中の昼食の頻度（小中学生）



- ・毎日入浴している人は、小学生では69.9%、「週1～2日、ほとんど入らない」が5.7%にのぼる。中学生では、毎日入浴している人は69.6%、「週5～6日」18.0%、「週3～4日」10.0%。

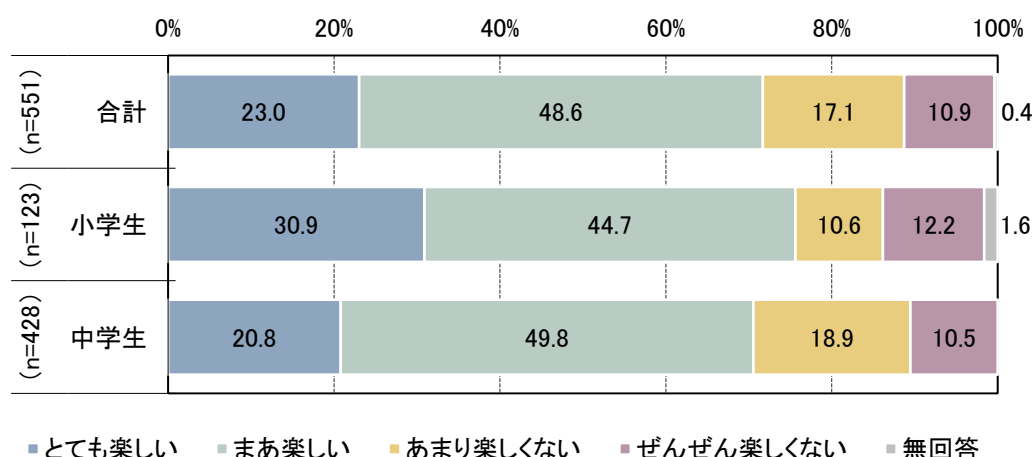
図表 52 入浴の頻度（小中学生）



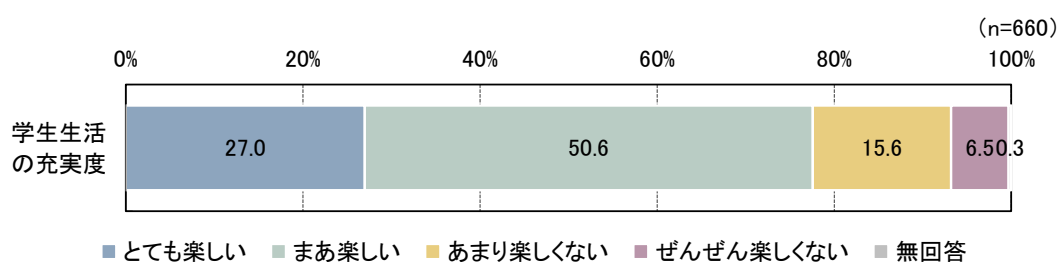
(2) 小学生の22.8%、中学生の29.4%が「学校が楽しくない」¹⁰。「授業が分からない」は小学生で20.3%、中学生で37.8%、高校生で14.2%¹¹。

- ・小学生の75.6%、中学生の70.6%、高校生の77.6%が学校は楽しい、または充実していると回答している一方で、学校が楽しくない子どもの割合は小学生の22.8%、中学生の29.4%、高校生の22.1%に達する。

図表 53 学校は楽しいか (小中学生)



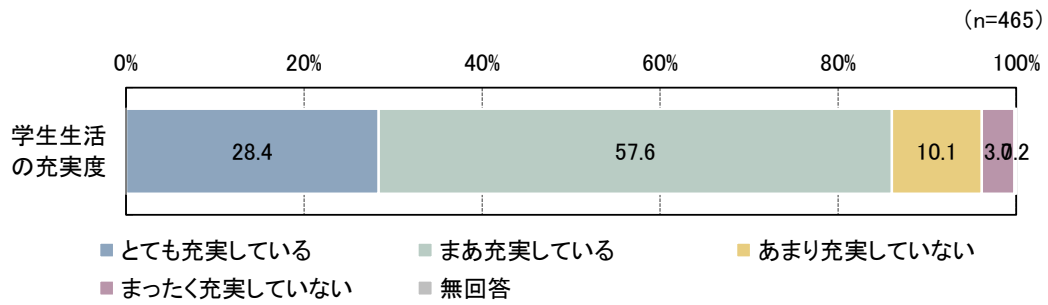
図表 54 学校生活の充実度 (高校生)



10 「NHK2022 年調査」(2頁)では、中学生、高校生について、それぞれ「とても楽しい」が40.9%、40.1%、「まあ楽しい」が49.5%、47.5%、「あまり楽しくない」が5.9%、9.2%、「ぜんぜん楽しくない」が3.5%、3.2%となっている。

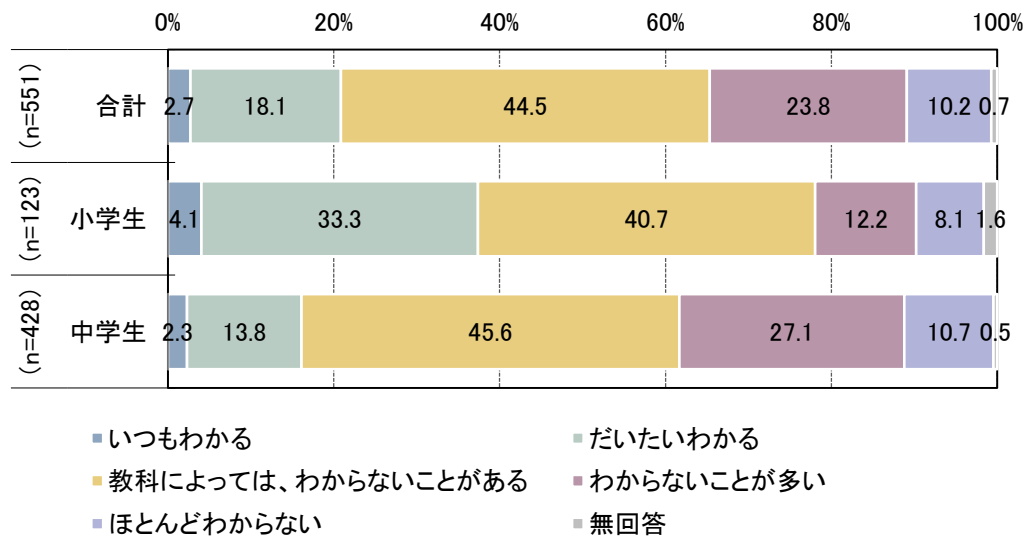
11 「内閣府令和3年調査」(179頁)では、中学生について、「いつもわかる」が10.1%、「だいたいわかる」が34.3%、「教科によっては分からないことがある」が44.0%、「分からないことが多い」が8.6%、「ほとんど分からない」が2.8%となっている。

図表 55 学生生活の充実度（大学・専門学校生）

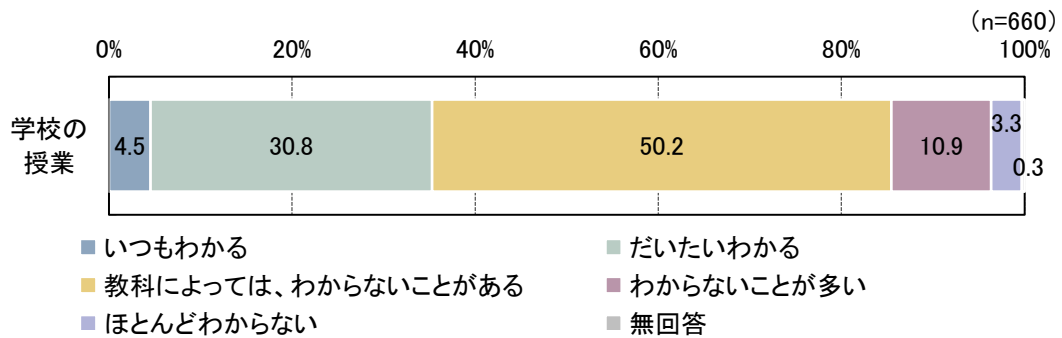


・学校の授業の理解度について、「いつもわかる・だいたいわかる」は小学生では 37%、中学生では 16.1%、高校生では 35.3%。

図表 56 学校での授業が分からないことがあるか（小中学生）



図表 57 学校の授業の理解度（高校生）



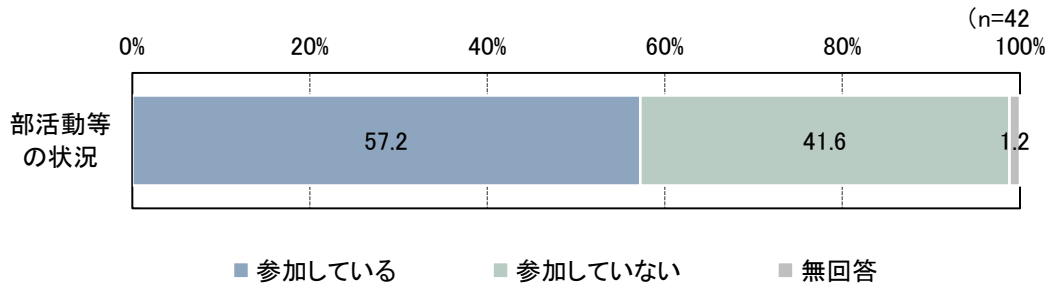
(3) 部活動などに参加していない生徒のうち、4割が「費用がかかるから」、1割強が「家族の世話、家事などがあるから」。

- ・中学生で、学校の部活動などに「参加していない」は、41.6%（既往調査では14.6%、以下同様）をしめ、その理由は、「入りたいクラブ・部活動がない」が43.8%（41.2%）である一方、「費用がかかるから」39.3%（9.3%）、「家の事情（家族の世話、家事など）があるから」11.8%（4.0%）にのぼる¹²。
- ・高校生で、学校の部活動などに「参加している」は49.5%（69.6%）で¹³、「参加していない」も50.2%（30.4%）だった。参加していない理由は、「費用がかかるから」が39.0%、「家の事情（家族の世話、家事など）があるから」が16.9%にのぼる。
- ・大学・専門学校生では、部活動・サークル・課外活動に、「加入していない」は47.7%、「加入したいが、できていない」13.1%。その理由は「お金がかかるから」40.6%、「アルバイトで忙しいから」41.0%、「学業が忙しいから」35.0%。

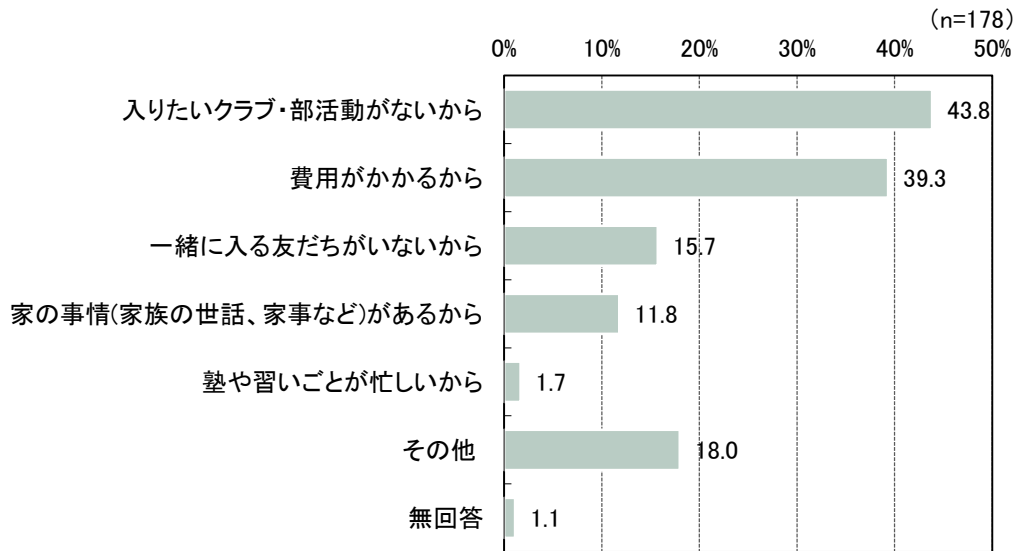
12 「内閣府令和3年調査」（179頁）では、中学生について、「あなたは、地域のスポーツクラブや文化クラブ、学校の部活動に参加していますか。」の問に対して、「参加している」が85.1%、「参加していない」が14.6%となっている。また、「参加していない」と回答した場合に「参加していない理由は何ですか」との問に対して、「入りたいクラブ・部活動がないから」が41.2%、「塾や習いごとが忙しいから」が14.6%、「費用がかかるから」が9.3%、「家の事情（家族の世話、家事など）があるから」が4.0%、「一緒に入る友達がいないから」が6.8%、「その他」が39.6%となっている。

13 「NHK2022年調査」（5頁）では、高校生についてそれぞれ「部活動に入っている（「体育系（運動部）にだけ入っている」「文化系にだけ入っている」「体育系（運動部）と文化系のどちらにも入っている」の合計）」は69.6%となっている。

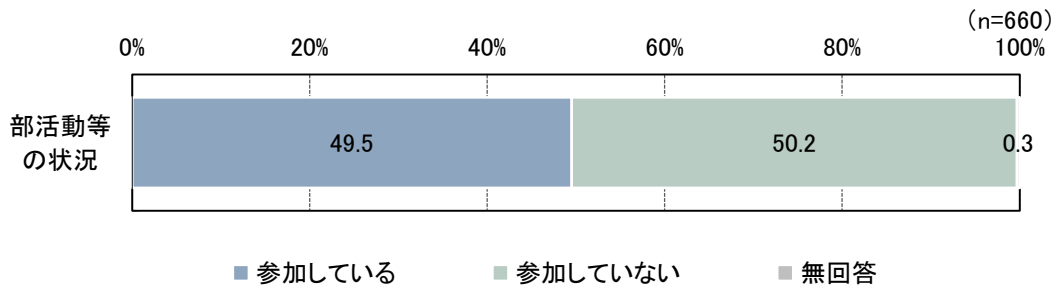
図表 58 部活動などの参加状況（中学生）



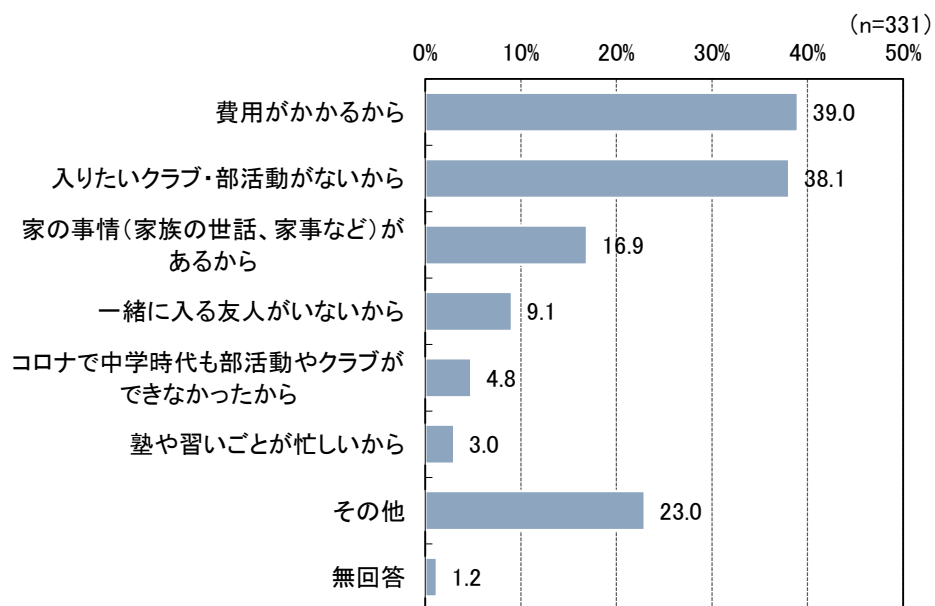
図表 59 部活動などに参加していない理由（中学生）（複数回答）



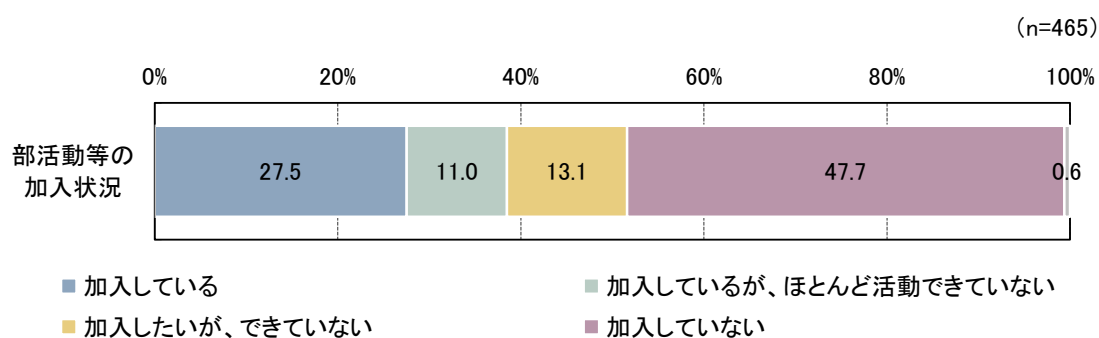
図表 60 部活動などの参加状況（高校生）



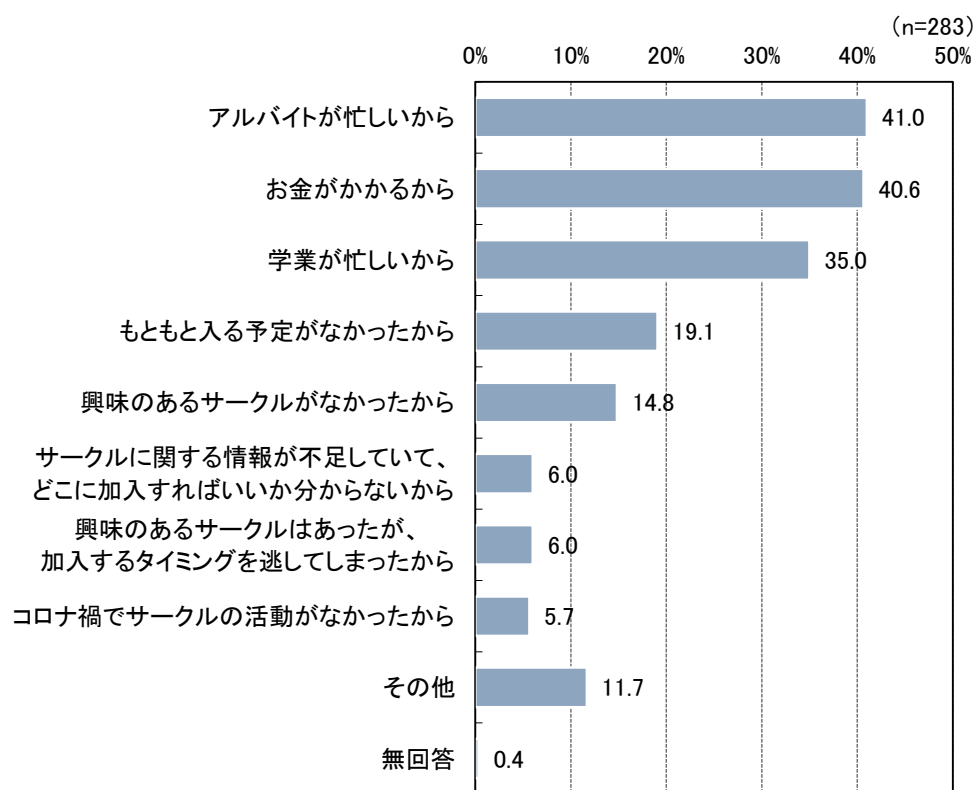
図表 61 部活動などに参加しない理由（高校生）（複数回答）



図表 62 部活動・サークルなどの加入状況（大学・専門学校生）



図表 63 部活動・サークルなどに加入していない理由（大学・専門学校生）（複数回答）

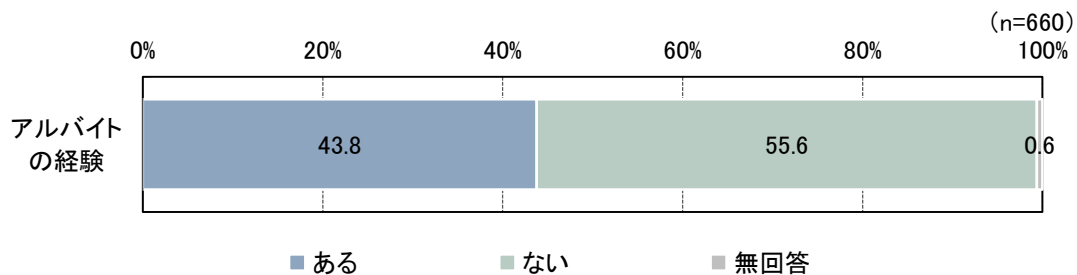


4-2-2 アルバイト・奨学金

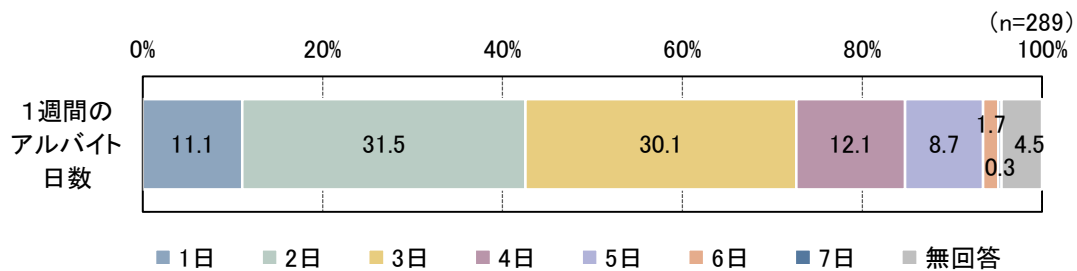
(4) 高校生でアルバイト経験がある者4割強のうち¹⁴、家庭の生活費に充てている者が25.3%。経済的な心配がなければアルバイトを減らしたい者が5割超。

- ・高校生で、アルバイト経験が「ある」は43.8%（約33%）をしめる。アルバイト代の用途は「自分のおこづかい」78.9%、「スマホや携帯電話代」33.6%である一方、「授業料や通学費、学校での食事代、部活動など学校の費用」34.3%、「家庭の生活費」25.3%、「進学や就職など卒業後の費用」16.6%にもものぼった。1週間のアルバイト時間の平均時間は13.0時間、1ヶ月のアルバイト代の平均は4.6万円だった¹⁵。
- ・経済的な心配がなければ、アルバイトの日数を「減らしたい」は54.0%で、アルバイトのために学校の授業や生活に悪い影響が「とてもある・少しある」が50.2%にのぼった。

図表 64 アルバイトの経験（高校生）



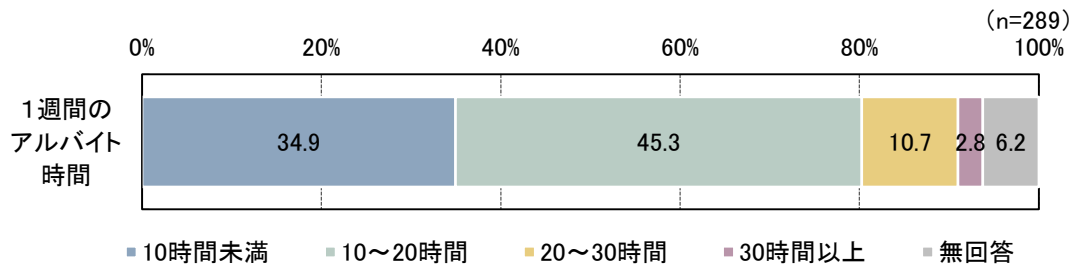
図表 65 1週間のアルバイト日数（高校生）



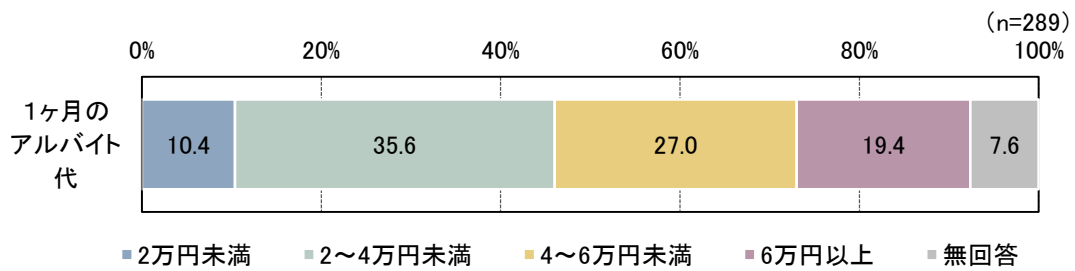
14 「あすのば 2017 年度調査中間報告」（9頁）では、高校生（高校1年世代（主に15歳または16歳））の約33%がアルバイトの経験があると回答している。

15 「あすのば 2017 年度調査中間報告」（9頁）では、高校生（高校1年世代（主に15歳または16歳））のアルバイト経験は、週平均で約3日、1日あたり平均4.6時間の勤務をしており、月々の平均アルバイト代は33,259円となっている。

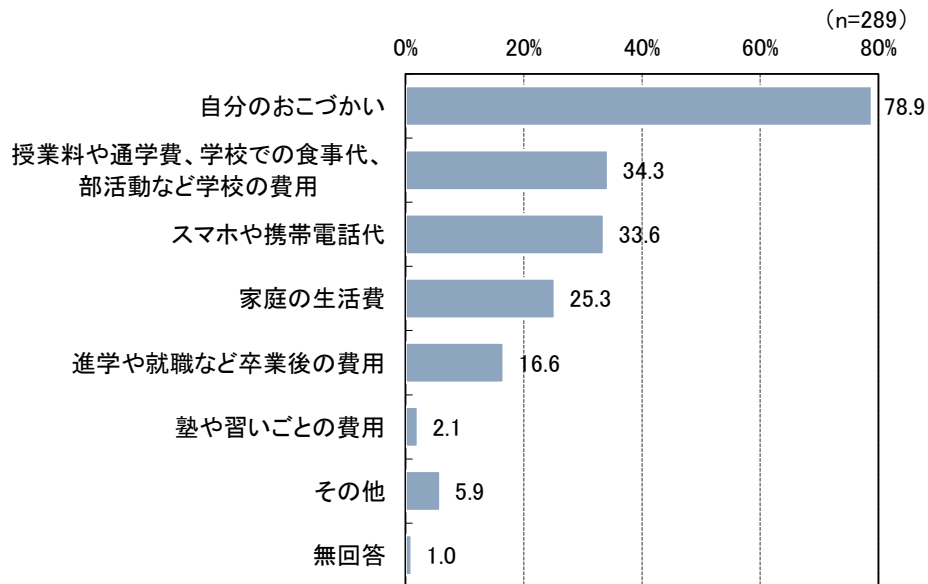
図表 66 1週間のアルバイト時間（高校生）



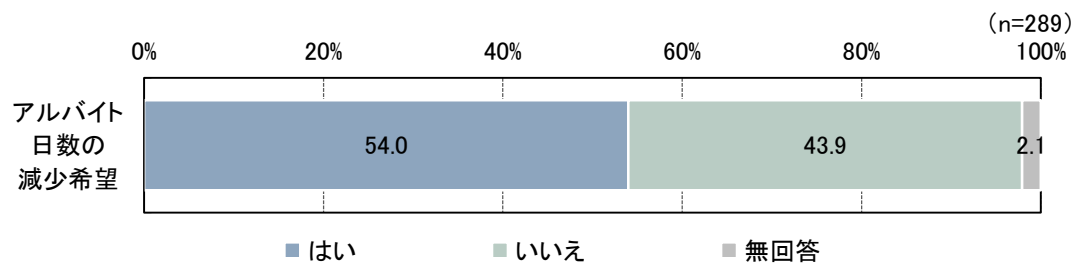
図表 67 1か月のアルバイト代（高校生）



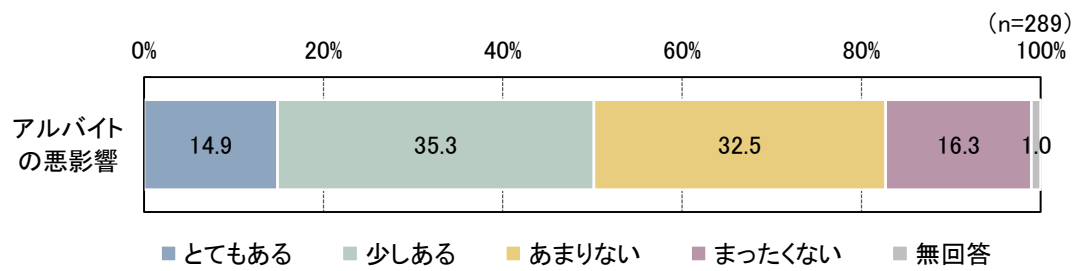
図表 68 アルバイト代の使途（高校生）（複数回答）



図表 69 アルバイト日数の減少希望（高校生）



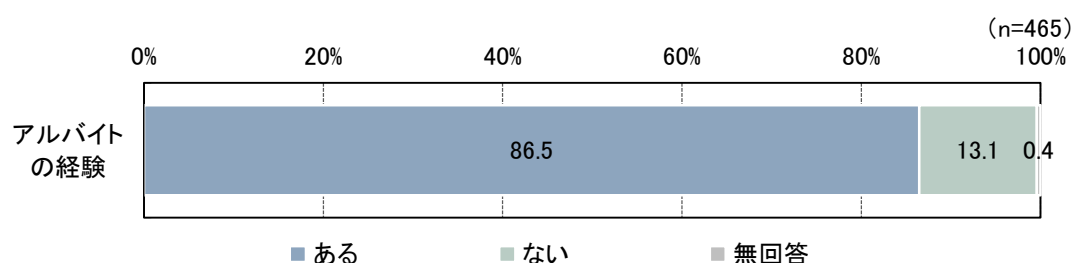
図表 70 アルバイトの悪影響（高校生）



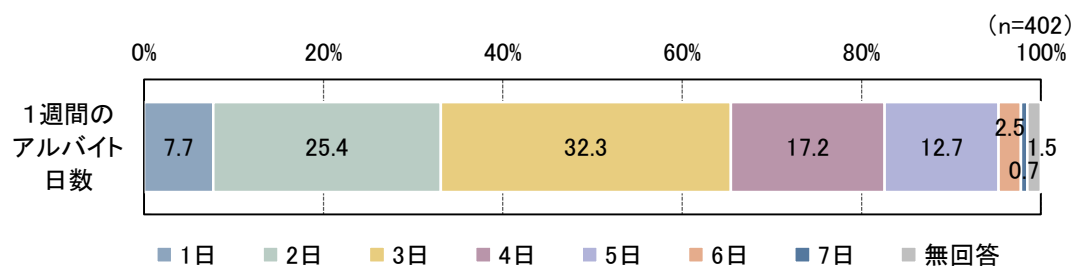
(5) 大学生でアルバイト経験がある者 86.5%のうち、アルバイト代を仕送りに充てている者が約 1 割。経済的な心配がなければアルバイトを減らしたい者が 64.2%。

- ・アルバイト経験が「ある」は、86.5%をしめた¹⁶。アルバイト代の使途は「自分の生活費（衣食住の費用）」68.4%、「交際費」60.9%、「スマホや携帯電話代」40.0%である一方、「学費や通学費、教科書代など学業にかかわる費用」53.0%、「進学や就職など卒業後の費用」14.4%で、「家族の生活費（仕送り）」は 7.5%にのぼった。
- ・経済的な心配がなければ、アルバイトの日数を「減らしたい」は 64.2%で、アルバイトのために学校の授業や生活に悪い影響が「とてもある・少しある」が 62.2%にのぼった。

図表 71 アルバイトの経験（大学・専門学校生）

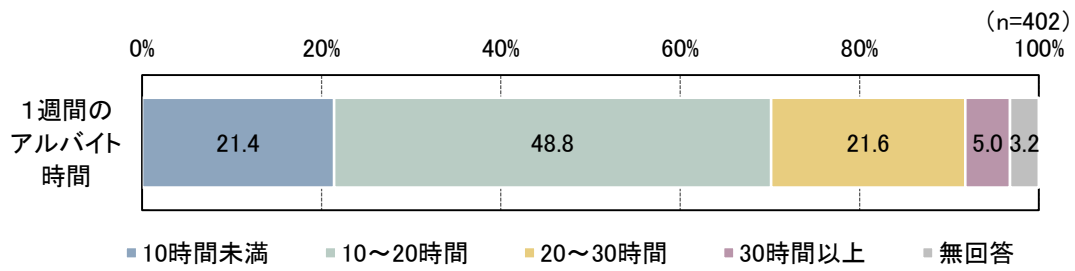


図表 72 1 週間のアルバイト日数（大学・専門学校生）

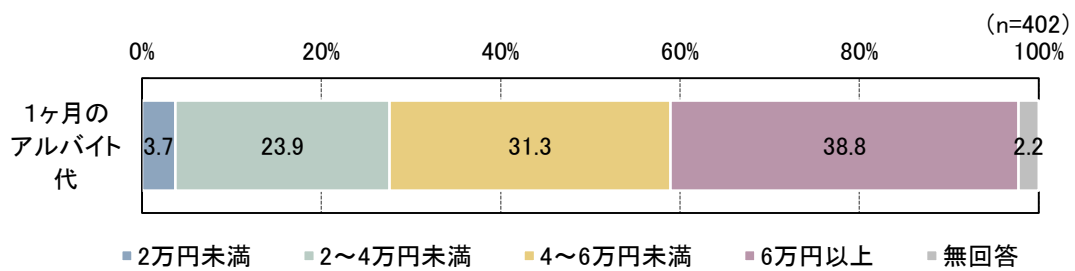


16 「あすのば 2017 年度調査中間報告」（9 頁）では、大学生（大学 1 年世代（主に 18 歳または 19 歳））の約 75%がアルバイトの経験があると回答している。アルバイト経験は、週平均で約 4 日、1 日あたり平均 5.2 時間の勤務をしており、月々の平均アルバイト代は 47,680 円となっている。

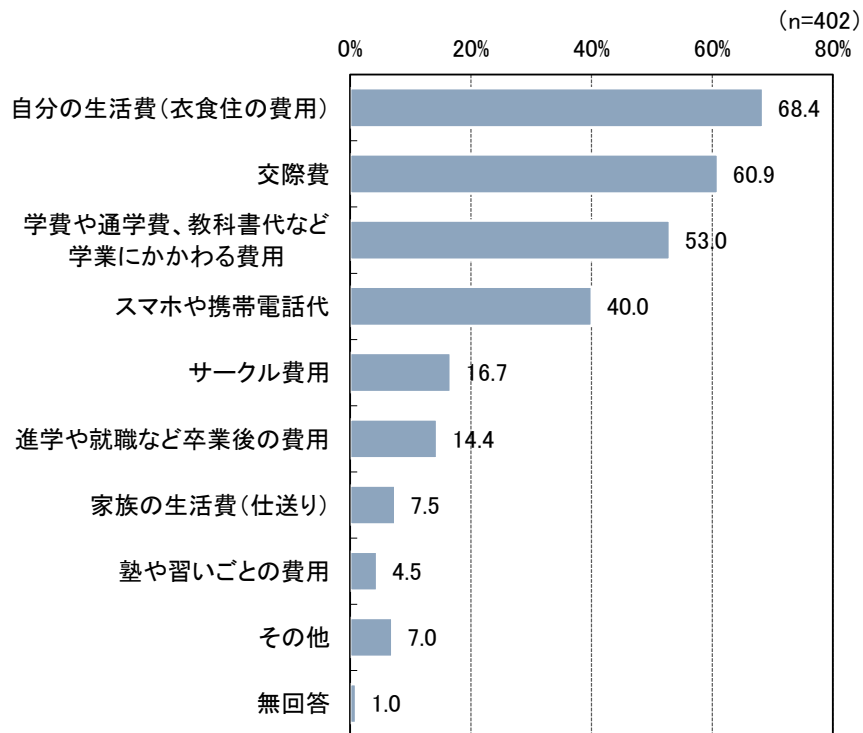
図表 73 1週間のアルバイト時間（大学・専門学校生）



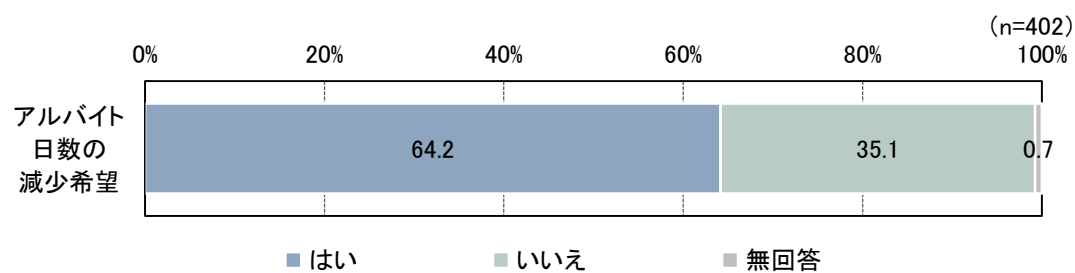
図表 74 1ヶ月のアルバイト代（大学・専門学校生）



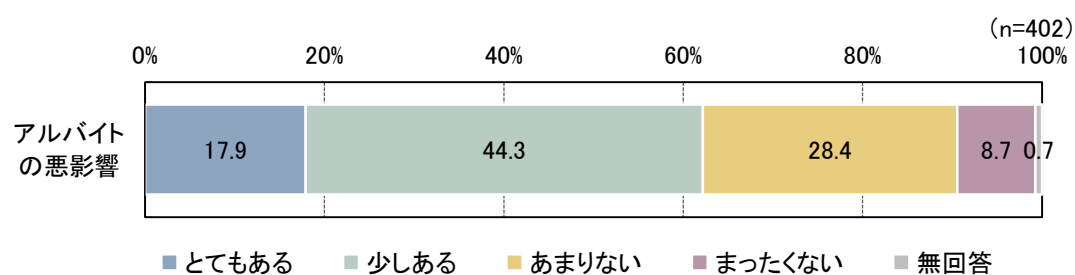
図表 75 アルバイト代の使途(大学・専門学校生)



図表 76 アルバイトの日数の減少希望（大学・専門学校生）



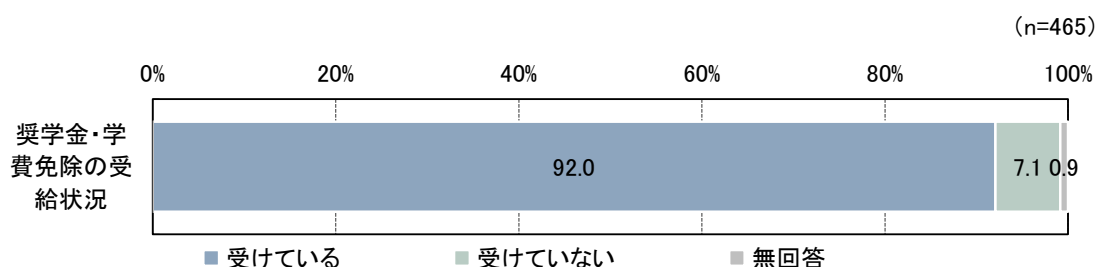
図表 77 アルバイトの学校の授業や生活への悪い影響（大学・専門学校生）



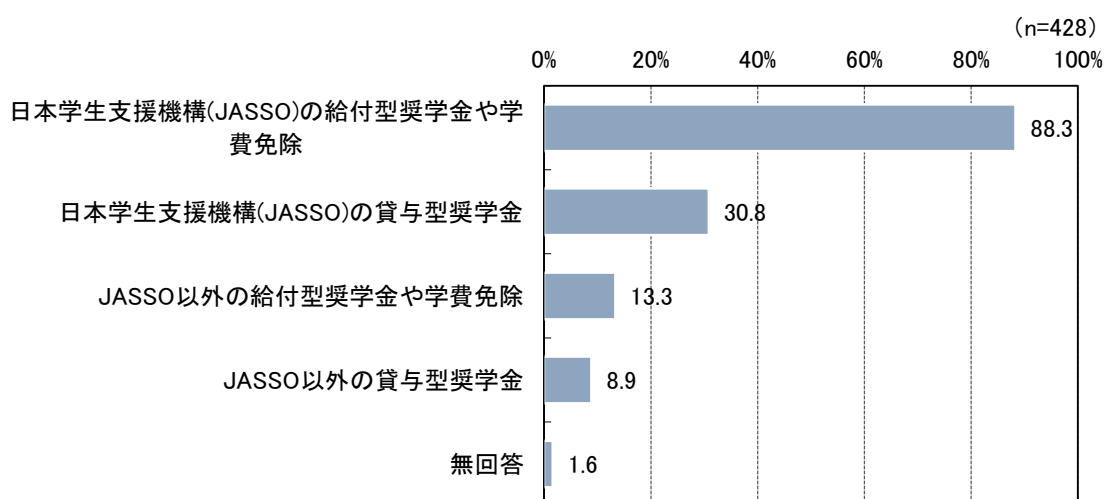
(6) 奨学金などを受けている者が92.0%。その4人に1人が奨学金だけでは不足。

- ・大学・専門学校生で、奨学金や学費免除を受けている者は92.0%。
- ・奨学金などを受けて「家計にゆとりが生まれる」33.6%、「アルバイトが軽減され、学業との両立がしやすい」33.2%の一方で、「利用中の奨学金だけでは足りず、アルバイトの負担が大きい」25.0%、「利用中の奨学金だけでは足りず、仕送りのため保護者の負担が大きい」10.0%。
- ・奨学金や学費免除などを受けていない理由のうち、「奨学金制度を知らなかったから」が12.1%にのぼる。

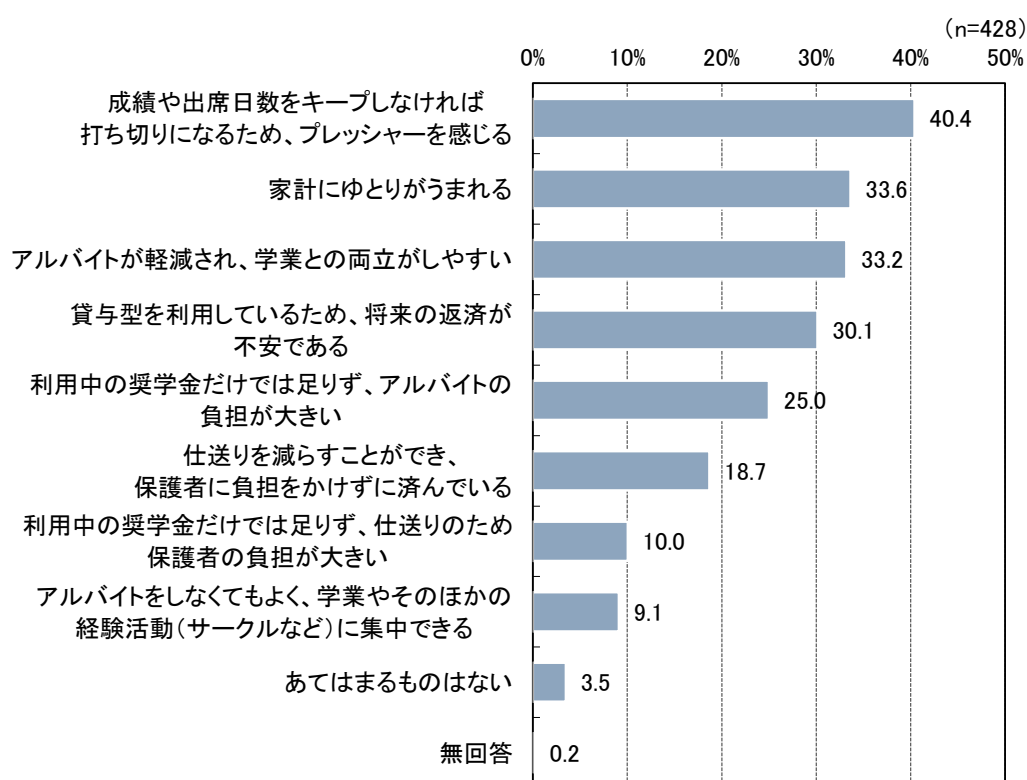
図表 78 奨学金や学費免除の受給状況（大学・専門学校生）



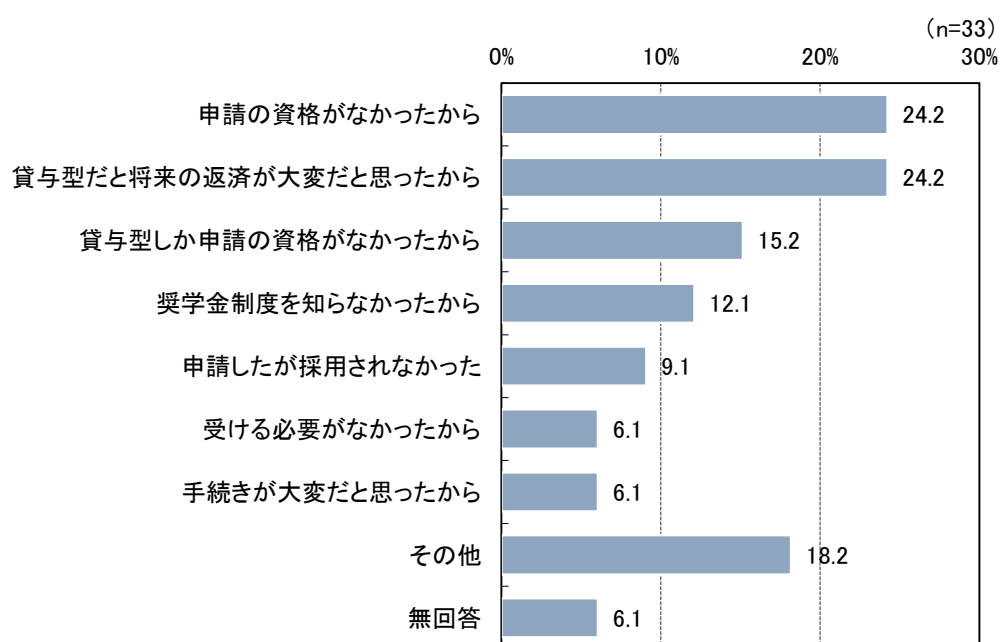
図表 79 受けている奨学金・学費免除（大学・専門学校生）（複数回答）



図表 80 奨学金などを受けて感じたこと（大学・専門学校生）（複数回答）



図表 81 奨学金や学費免除などを受けていない理由（大学・専門学校生）（複数回答）

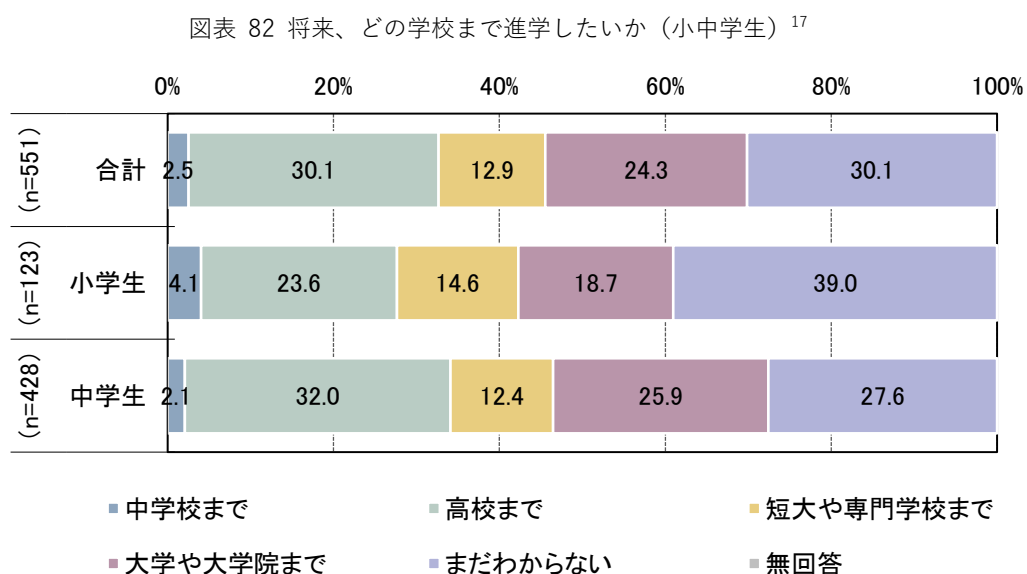


4-2-3 進路希望

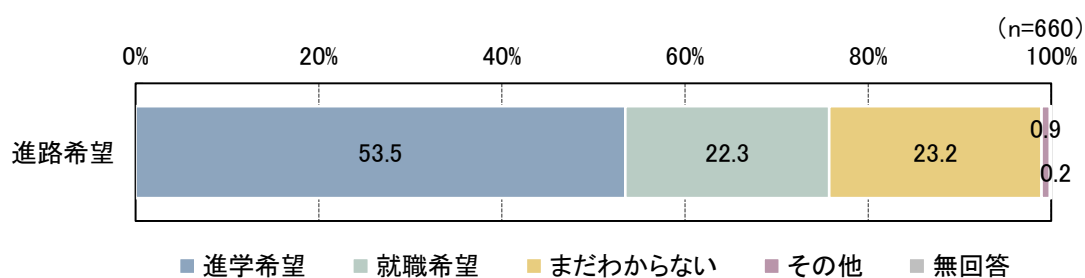
(7) 中学生の進路希望理由の2割前後が「家にお金がない」から。

・進学希望の理由をみると、中学生において「希望する学校や職業があるから」が42.9%（約55%）である一方、「家にお金がないと思うから」が22.6%、「早く働く必要があるから」が13.5%にのぼった。

・同じく高校生の進路選択理由として、「希望する学校や職業があるから」が69.6%にのぼる一方で、「家にお金がないと思うから」が19.0%、「早く働く必要があるから」が12.6%にのぼった。

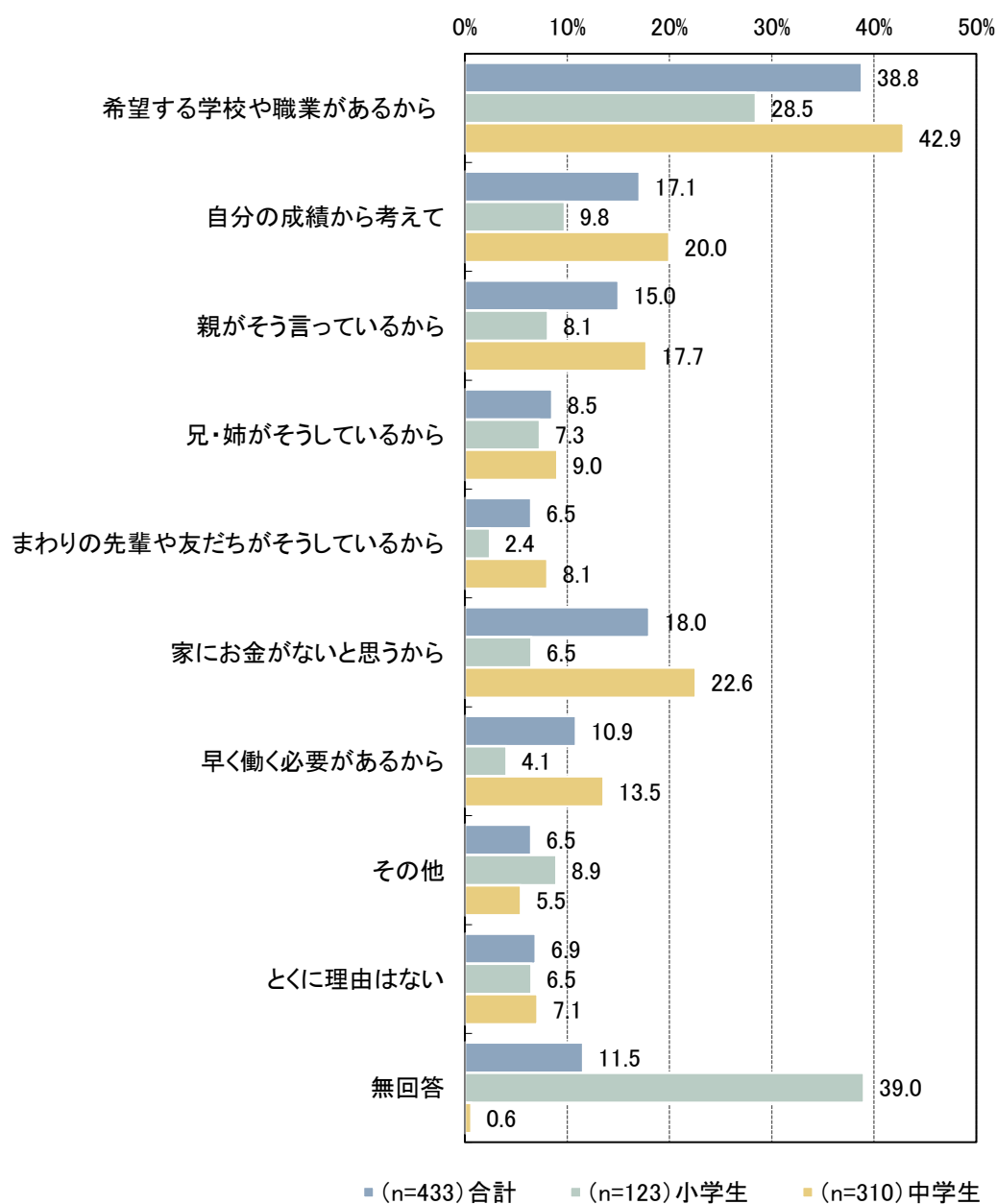


図表 83 進路希望（高校生）

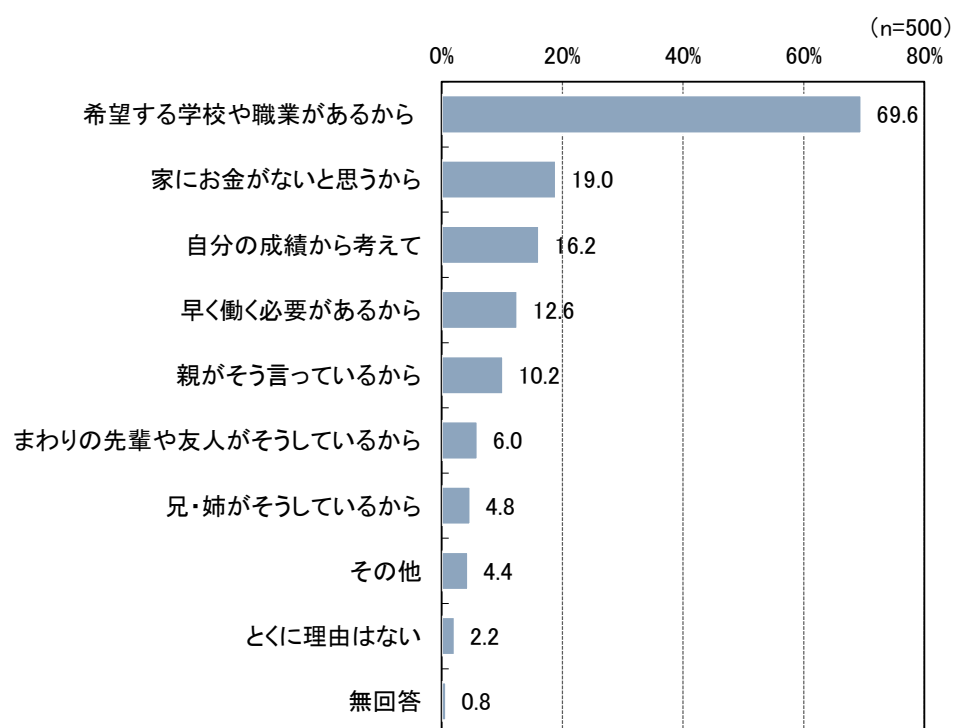


17 「内閣府令和3年調査」（179頁）では、中学生について、「中学まで」が3.0%、「高校まで」が14.8%、「短大・高専・専門学校まで」が16.3%、「大学またはそれ以上」が49.7%、「まだ分からない」が18.2%となっている。

図表 84 「将来、どの学校まで進学したいか」の回答の理由（複数回答）



図表 85 進路選択の理由（高校生）（複数回答）

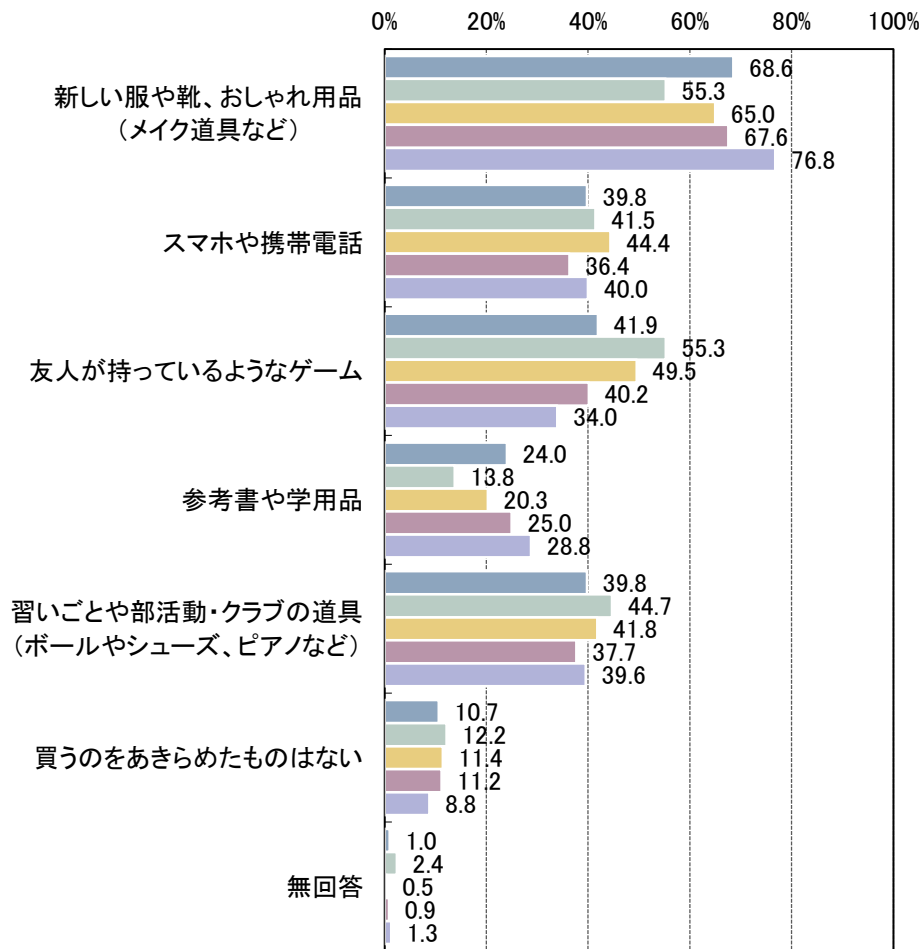


4-2-4 困りごとの状況

(8) 小学生の85.4%、中学生の88.1%、高校生の87.9%、大学・専門学校生の89.9%が「お金がなくて買うのを諦めた」経験。学校生活の必需品を諦めた経験を持つ者も多い。

・お金がなくて買うのを諦めた経験があるのは小学生では85.4%、中学生では88.1%、高校生では87.9%、大学・専門学校生では89.9%にのぼった。そのうち「習いごとや部活動・クラブの道具」が38~45%、「参考書や学用品」も19~29%に達する。

図表 86 今までに経済的な理由で買うのを諦めたことはあるか（複数回答）

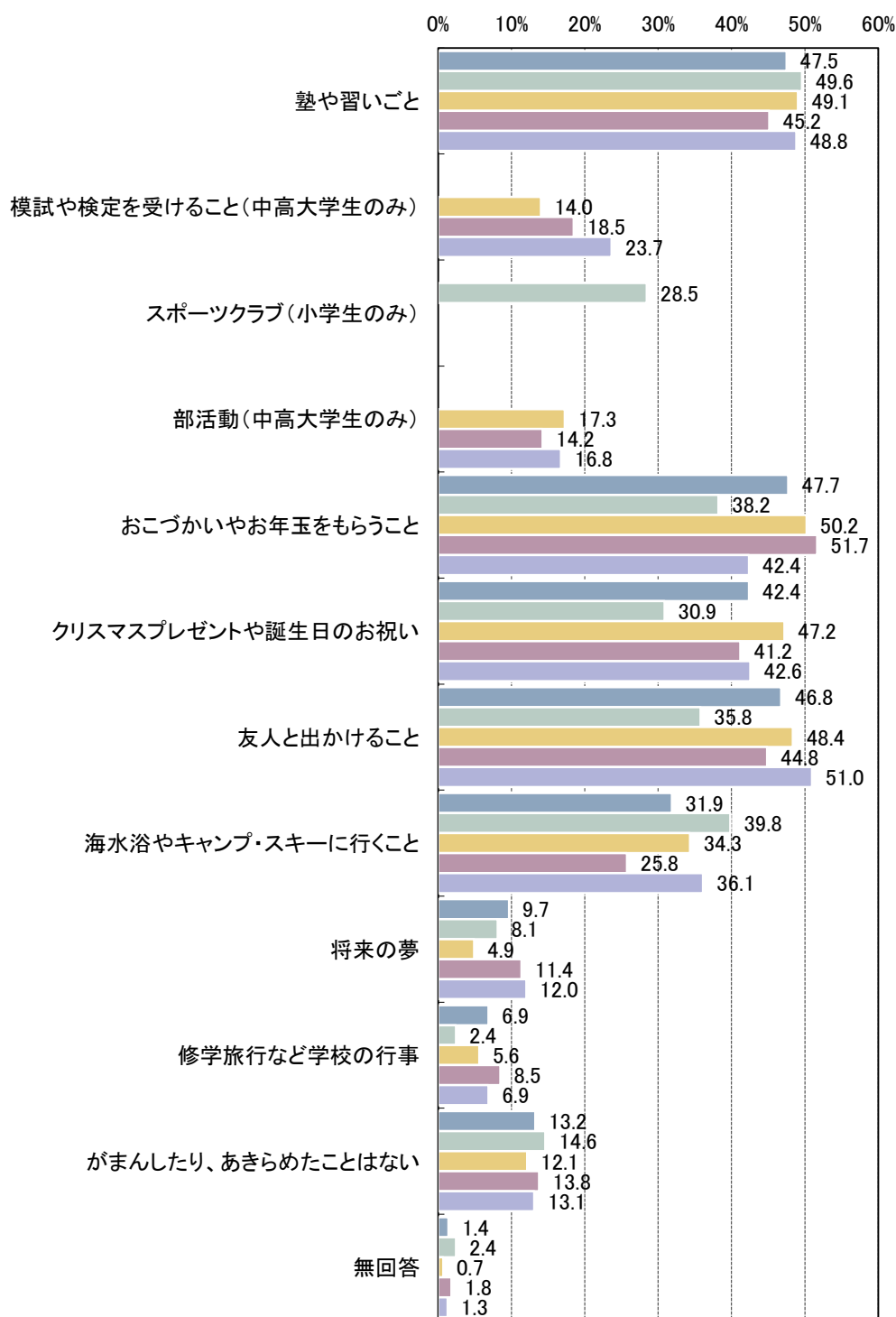


■ (n=1,676) 合計 ■ (n=123) 小学生 ■ (n=428) 中学生 ■ (n=660) 高校生等 ■ (n=465) 大学生等

(9) 小学生の 83.0%、中学生の 87.2%、高校生の 84.4%、大学・専門学校生の 85.6%が「お金がなくて諦めた経験」を有する。

- ・お金がなくてしたくても諦めた経験がある人が、小学生では 83.0%、中学生では 87.2%、高校生では 84.4%、大学・専門学校生では 85.6%にのぼった。このうち、「塾や習いごと」を諦めた経験が 45～50%、「友達と出かけること」が中学生 48.4%、高校生 44.8%、大学・専門学校生 51.0%に達する。高校生や大学・専門学校生では、「模試や検定を受けること」など将来に直結する経験を諦めた者もそれぞれ 18.5%、23.7%に達する。

図表 87 今までに経済的な理由で諦めた経験はあるか（複数回答）



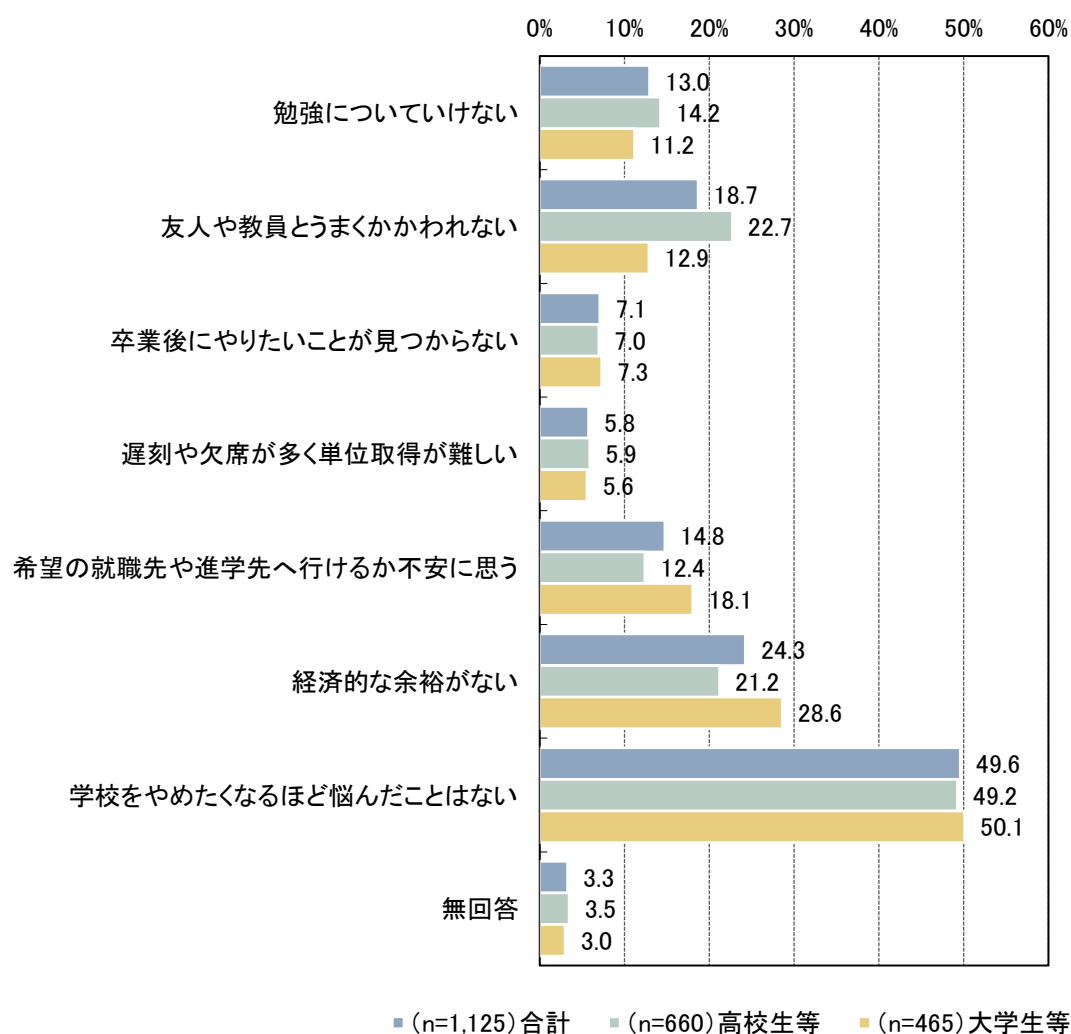
■ (n=1,676) 合計 ■ (n=123) 小学生 ■ (n=428) 中学生 ■ (n=660) 高校生等 ■ (n=465) 大学生等

※「スポーツクラブ」の項目は小学生のみ、「模試や判定を受けること」「部活動」は中学生以上のみに尋ねた項目である。

(10) 高校生、大学生の約半数が学校をやめたくなるほど悩んだことがあり、そのうち2~3割が経済的な理由。

・学校をやめたくなるほど悩んだことが「ある」者は、高校生、大学・専門学校生ともに約50%に達する。このうち「経済的な余裕がない」が高校生で21.2%、大学・専門学校生で28.6%にのぼった。

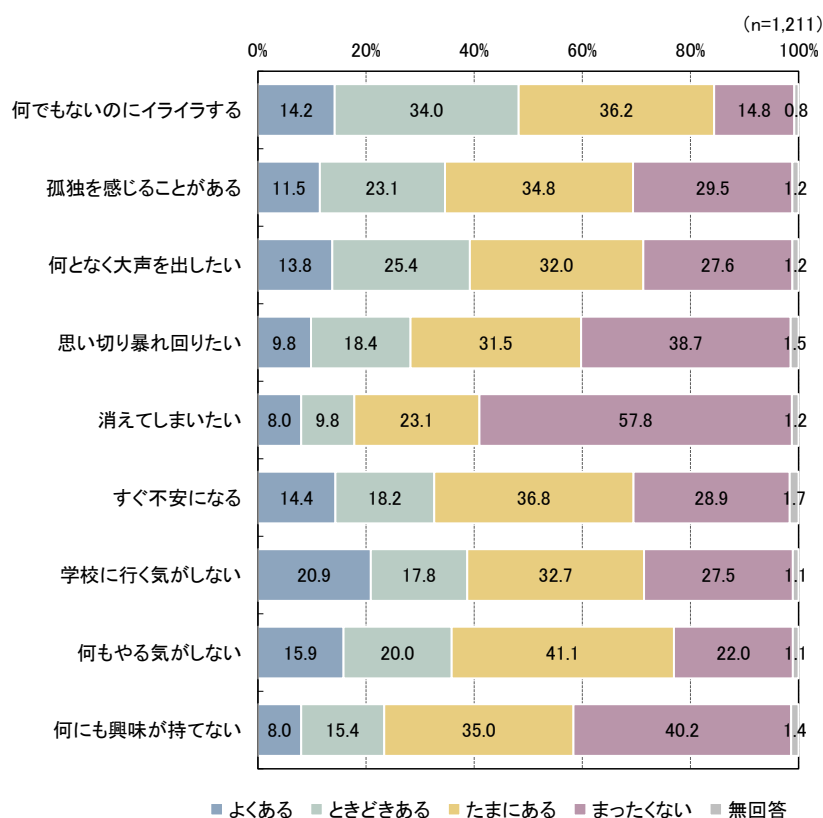
図表 88 学校をやめたくなるほど悩んだこと（高校生、大学・専門学校生）（複数回答）



(11) 小～高校生で「イライラする」ことがよく・ときどきある者が約半数。「孤独を感じる」「学校に行く気がしない」も4割近い¹⁸。

- ・小学生～高校生の合計で、以下の質問について「よくある・ときどきある」と回答した者の割合が、「何でもないのにイライラする」48.2%、「何となく大声を出したい」39.2%、「学校に行く気がしない」38.7%、「孤独を感じることもある」34.6%、「消えてしまいたい」17.8%。

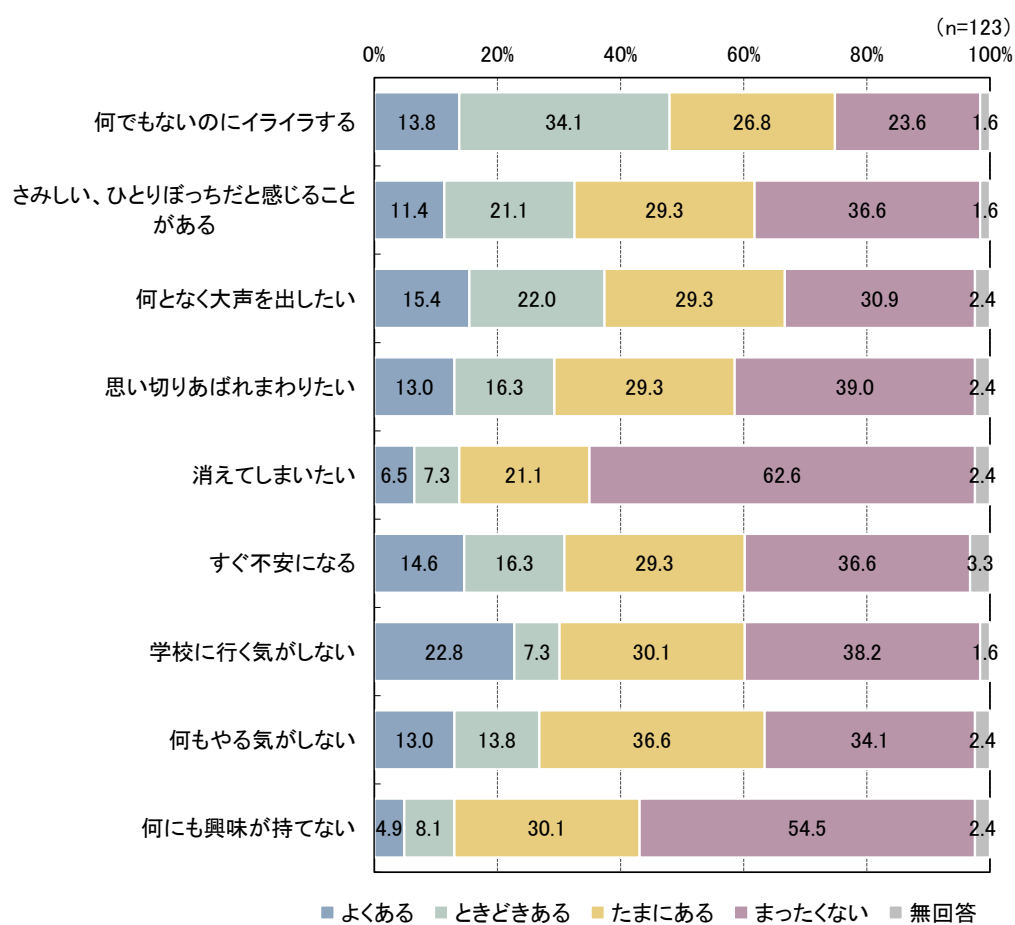
図表 89 精神状況（小～高校生合計）（n=1,211）



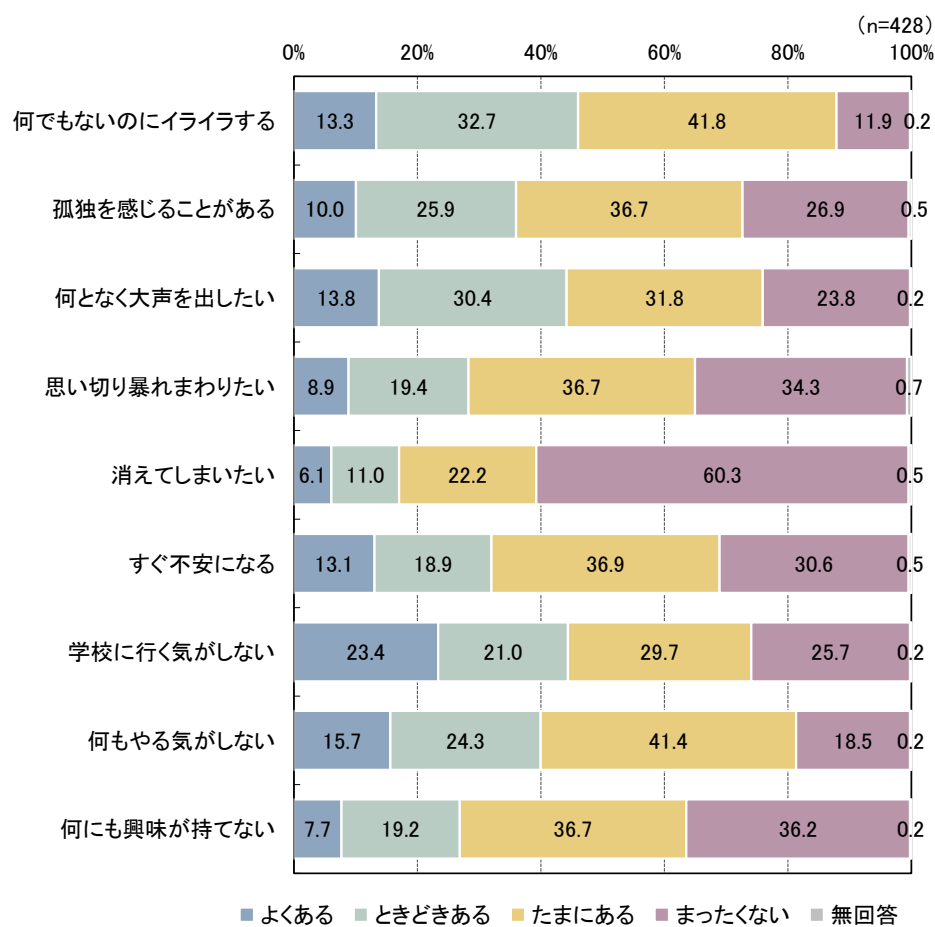
18 「NHK2022年調査」（15頁）では、中学生について「よくある」「ときどきある」の割合をみると、「何でもないのにイライラする」では8.9%、16.9%、「何となく大声を出したい」では13.6%、20.0%、「思い切り暴れ回りたい」では8.1%、19.1%、「消えてしまいたい」では5.5%、8.2%、「すぐ不安になる」では13.8%、14.3%、「学校に行く気がしない」では12.4%、12.2%、「何もやる気がしない」では13.4%、17.8%、「何にも興味を持ってない」では3.9%、10.7%となっている。

また、同調査で高校生について「よくある」「ときどきある」の割合をみると、「何でもないのにイライラする」では11.7%、17.1%、「何となく大声を出したい」では9.2%、22.1%、「思い切り暴れ回りたい」では7.0%、16.9%、「消えてしまいたい」では8.5%、8.5%、「すぐ不安になる」では18.5%、18.0%、「学校に行く気がしない」では16.5%、14.9%、「何もやる気がしない」では18.3%、21.9%、「何にも興味を持ってない」では7.2%、12.4%となっている。

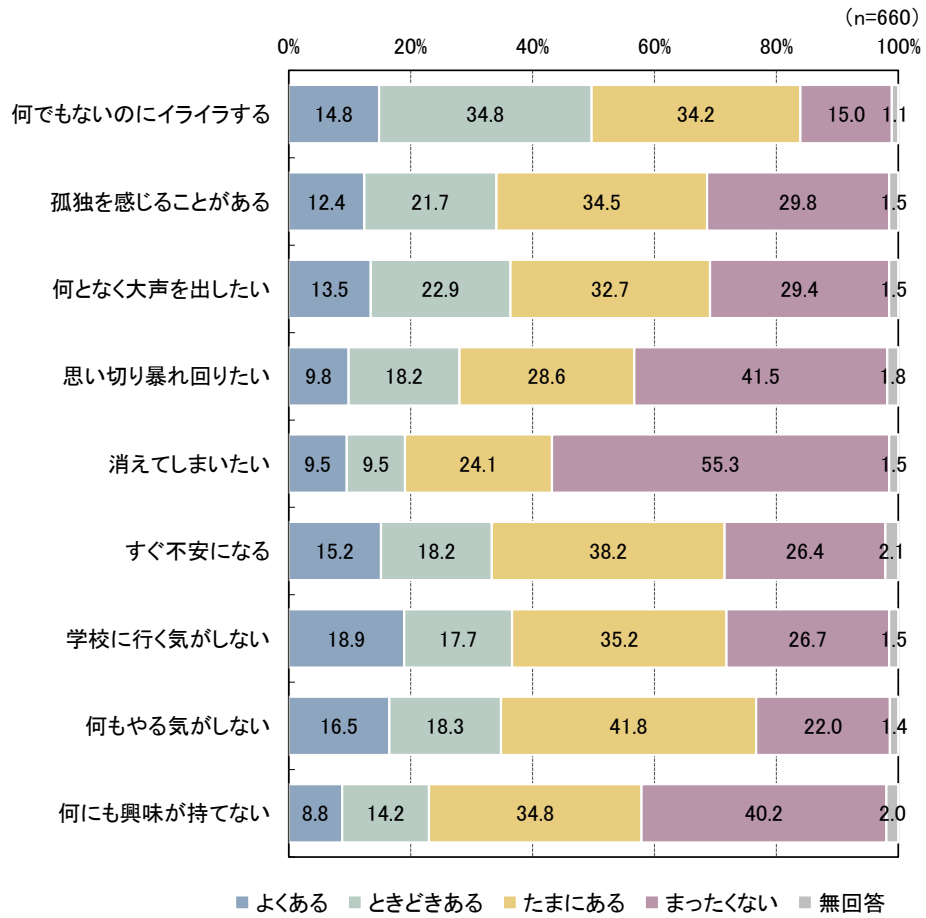
図表 90 次のようなことを感じる事がどのくらいあるか（小学生）（n=123）



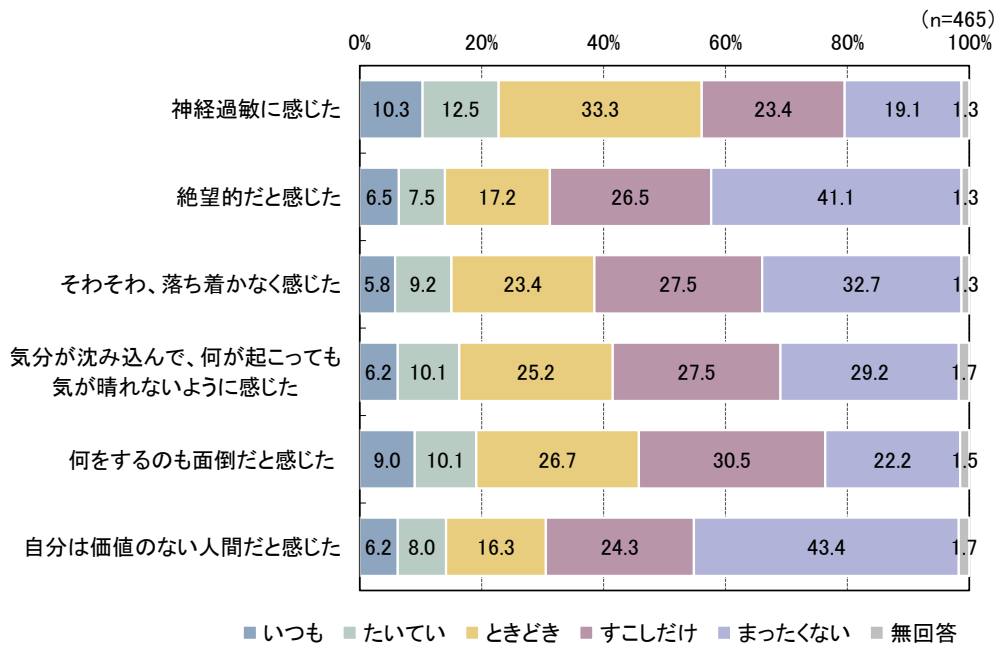
図表 91 次のようなことを感じる事がどのくらいあるか（中学生）（n=428）



図表 92 精神状況（高校生）

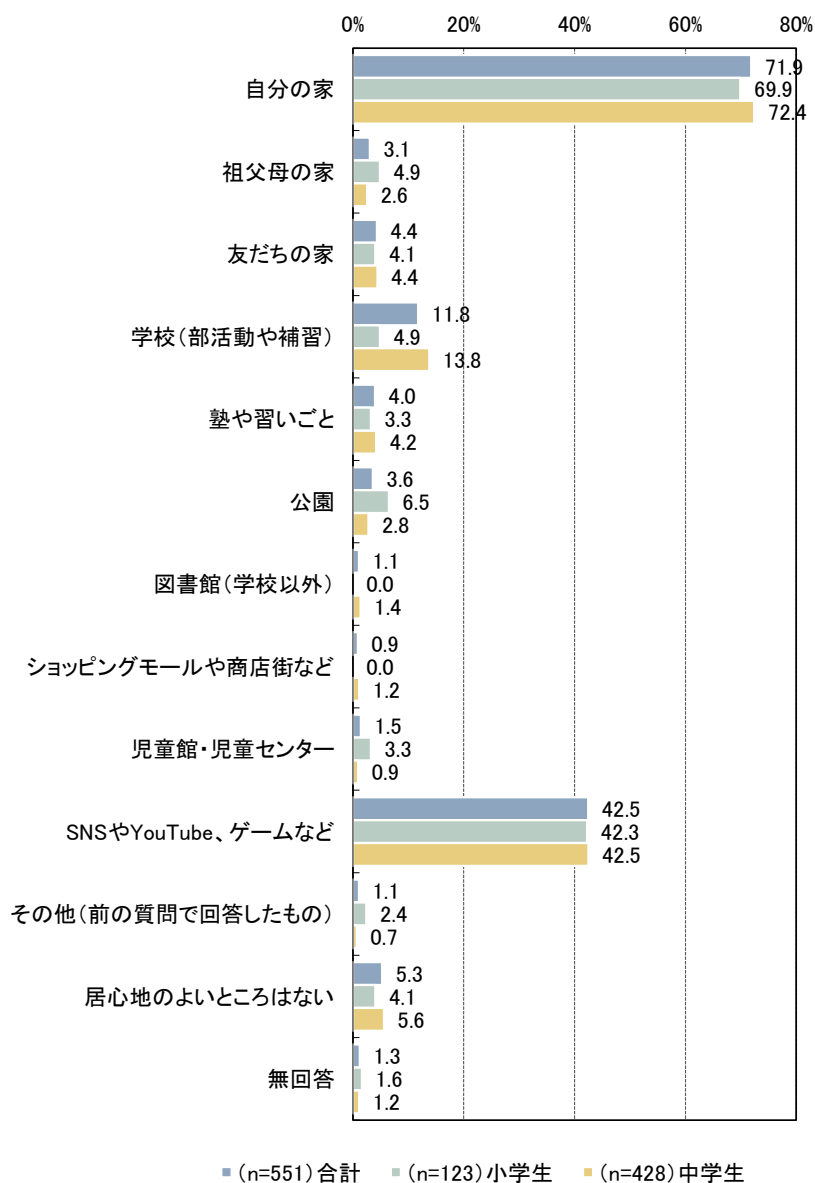


図表 93 精神状況（大学・専門学校生）



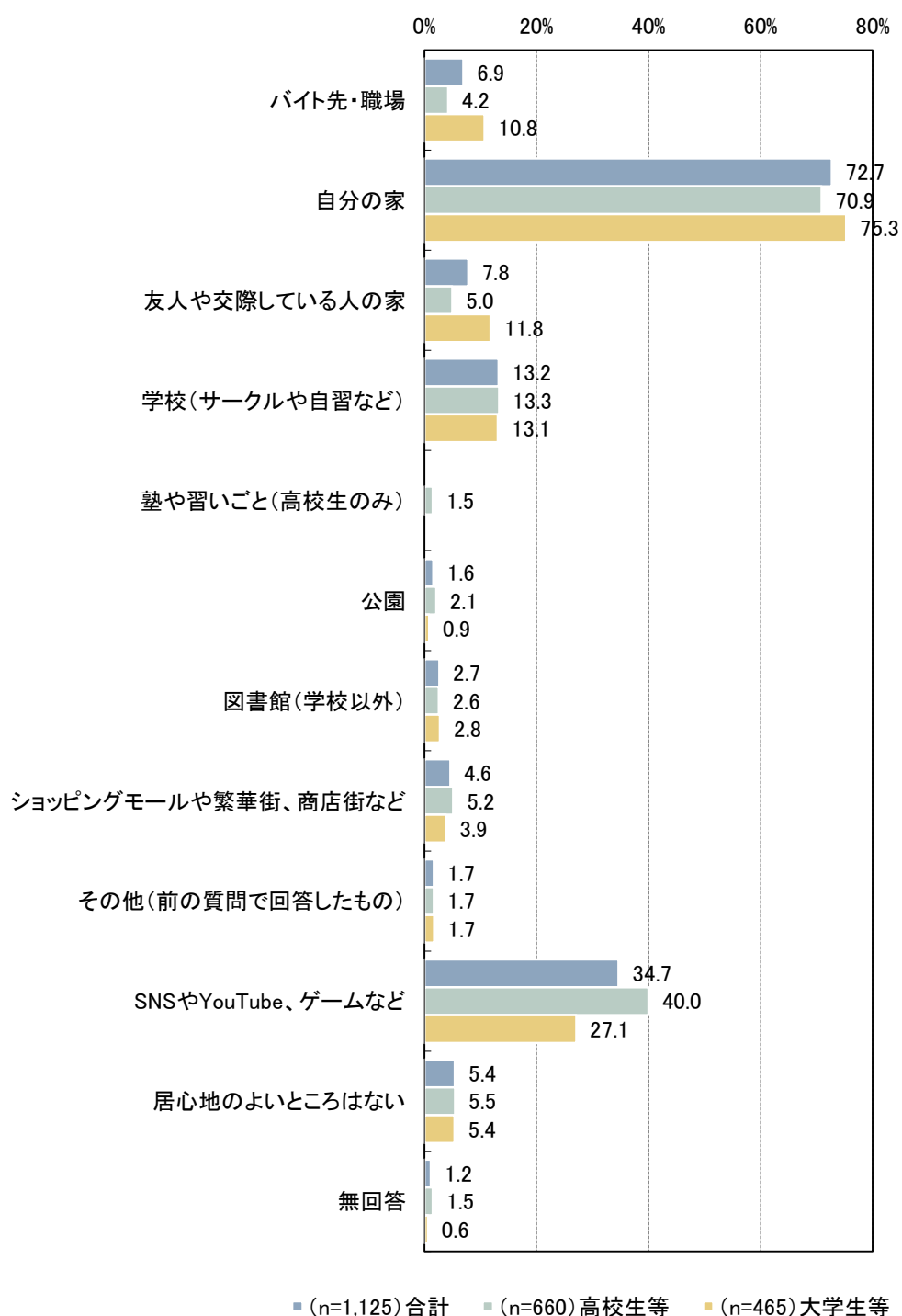
(12) 居心地の良い場所は「自分の家」に次いで「SNSやYouTube、ゲームなど」。
 困っていることや悩みごとがあるときに、「誰にも相談できない、相談したくない」者がそれぞれ約1割¹⁹。

図表 94 放課後に過ごしている場所のうち、居心地のよいところはあるか（小中学生）（複数回答）



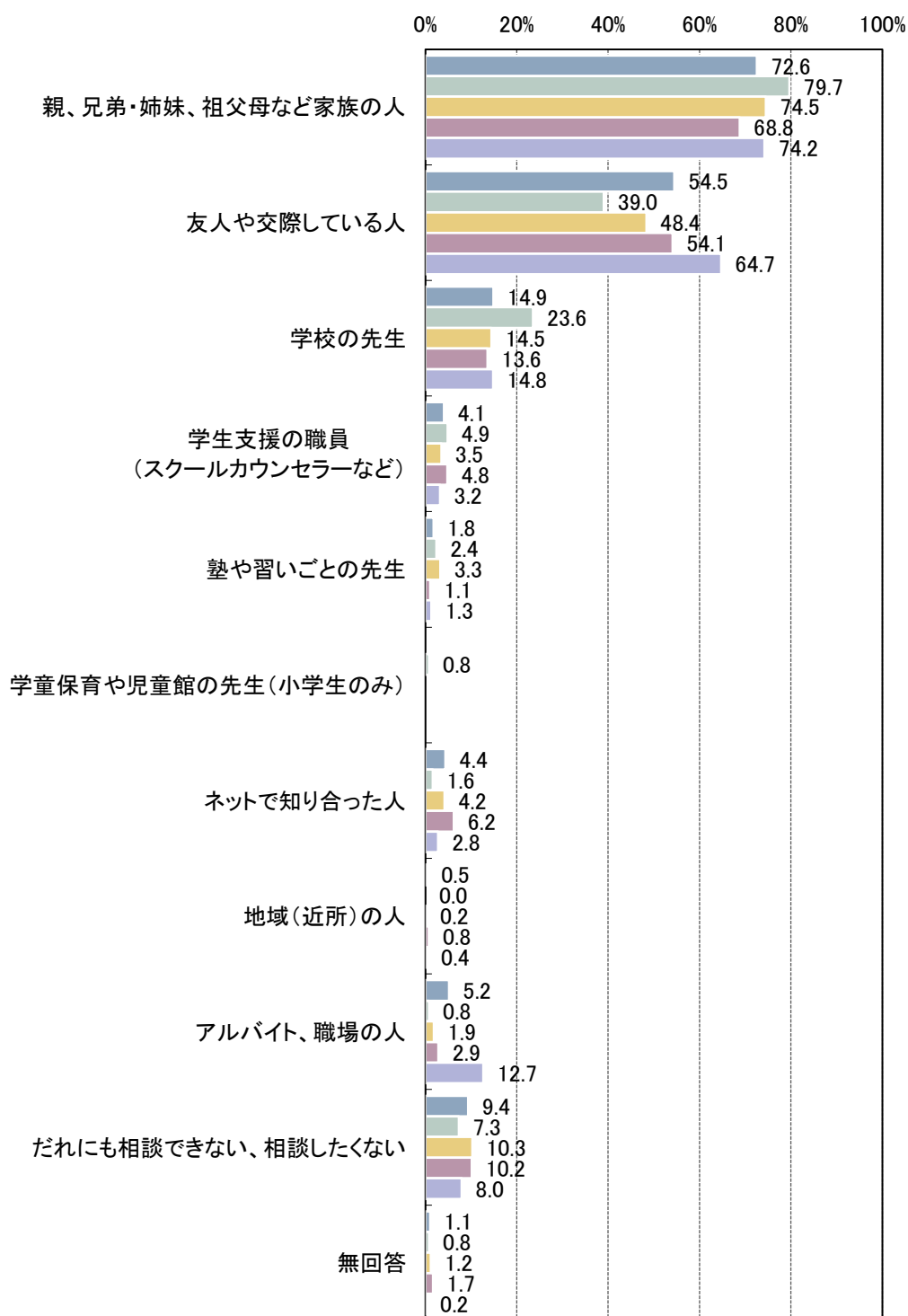
19 「内閣府令和3年調査」(179頁)では、中学生について、「相談できる人がいる(「誰にも相談できない、相談したくない」、「不明・無回答」以外の回答)」が90.1%となっている。また、相談できる相手(複数回答)としては、「親」が65.1%、「きょうだい」が21.0%、「祖父母など」が11.6%、「学校の先生」が23.4%、「学校の友達」が67.3%、「学校以外の友達」が13.9%、「スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーなど」が4.1%、『その他の大人(塾・習いごとの先生、地域の人など)』が6.8%、「ネットで知り合った人」が5.0%となっている。

図表 95 居心地の良い場所（高校生、大学・専門学校生）（複数回答）



※「塾や習いごと」の項目は高校生のみ尋ねた項目である。

図表 96 困っていることや悩みごとがあるとき、相談できると思う人は誰か（複数回答）

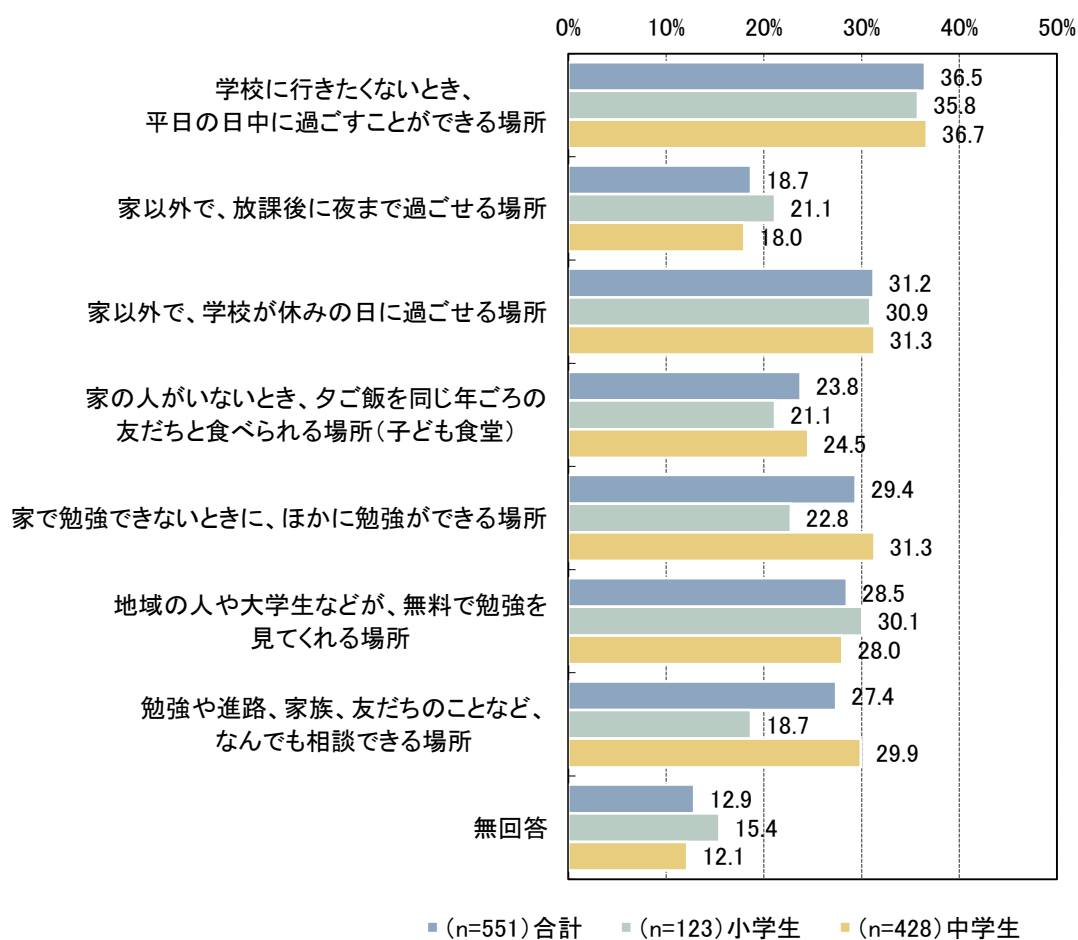


■ (n=1,676) 合計 ■ (n=123) 小学生 ■ (n=428) 中学生 ■ (n=660) 高校生等 ■ (n=465) 大学生等

4-2-5 支援ニーズ

(13) 小中学生で「学校に行きたくないとき、平日日中に過ごすことができる場所」を求める声が小学生で35.8%、中学生で36.7%。

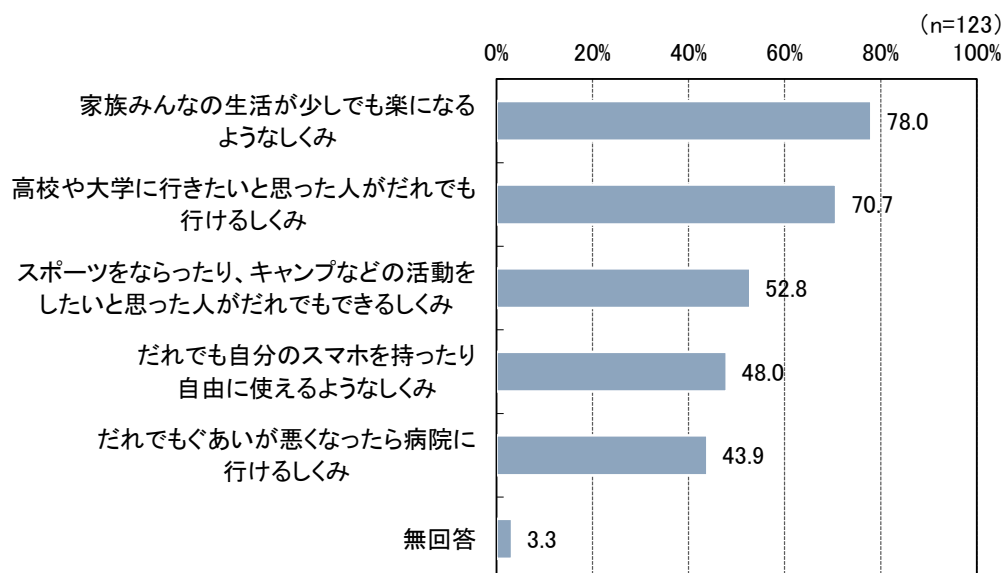
図表 97 使ったことがある、または使ってみたいと思う場所はあるか（小中学生）（複数回答）



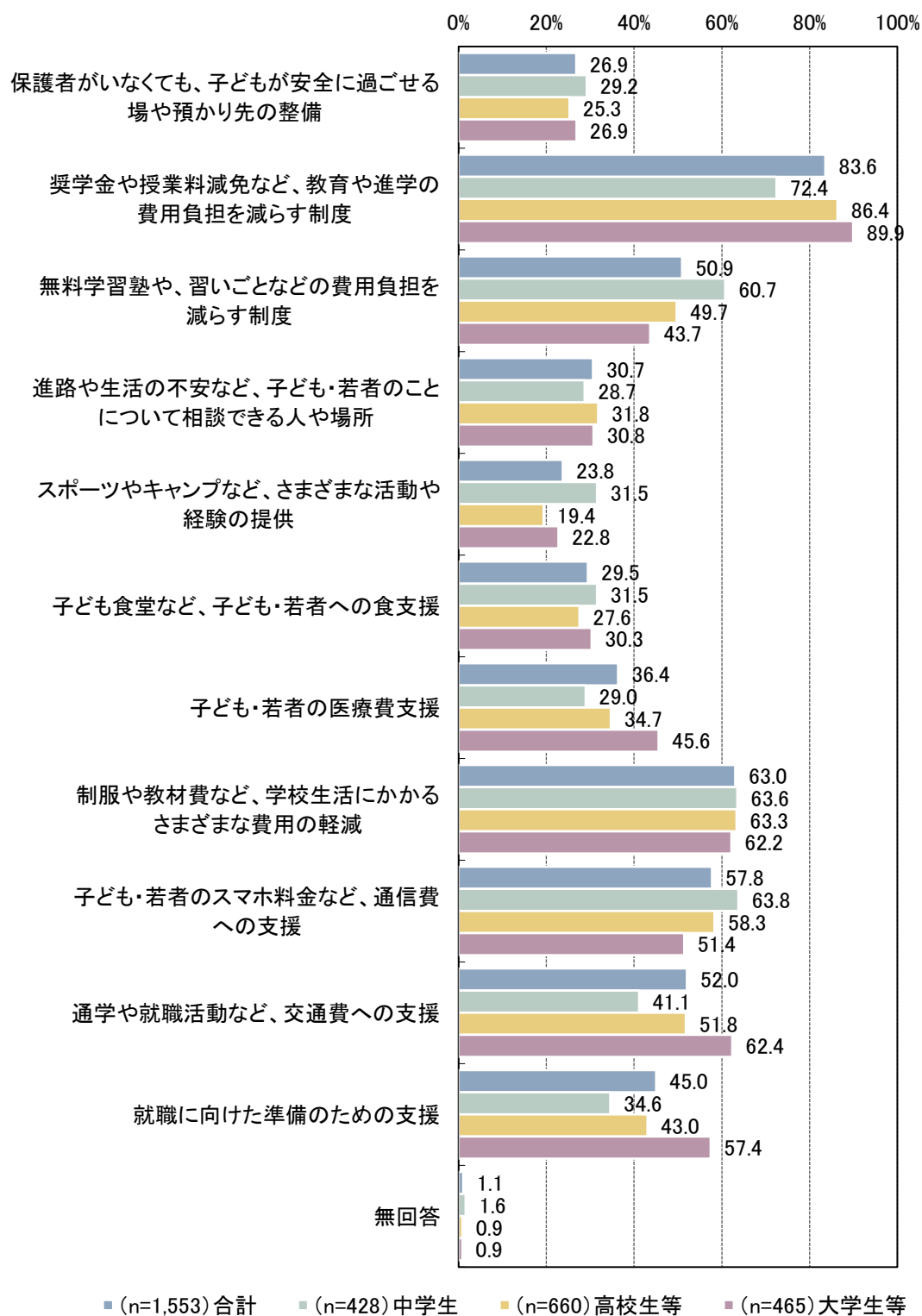
(14) 子ども・若者への支援制度として、中学生の72.4%、高校生の86.4%、大学・専門学校生の89.9%が教育・進学費用負担軽減を希望。

- ・小学生が思う国の制度への希望は、「家族みんなの生活が少しでも楽になるようなしくみ」が最も高く78.0%、次いで「高校や大学に行きたいと思った人が誰でも行けるしくみ」70.7%。
- ・子ども・若者への支援制度への希望については、「奨学金や授業料免除など、教育や進学の費用負担を減らす制度」が中学生で72.4%、高校生で86.4%、大学・専門学校生で89.9%にのぼった。「制服や教材費など、学校生活にかかるさまざまな費用の軽減」もそれぞれ63.6%、63.3%、62.2%。大学生では「就職に向けた準備のための支援」も57.4%に達する。

図表 98 国がつくるしくみ（制度）の中に、あったらいいと思うもの（小学生）（複数回答）



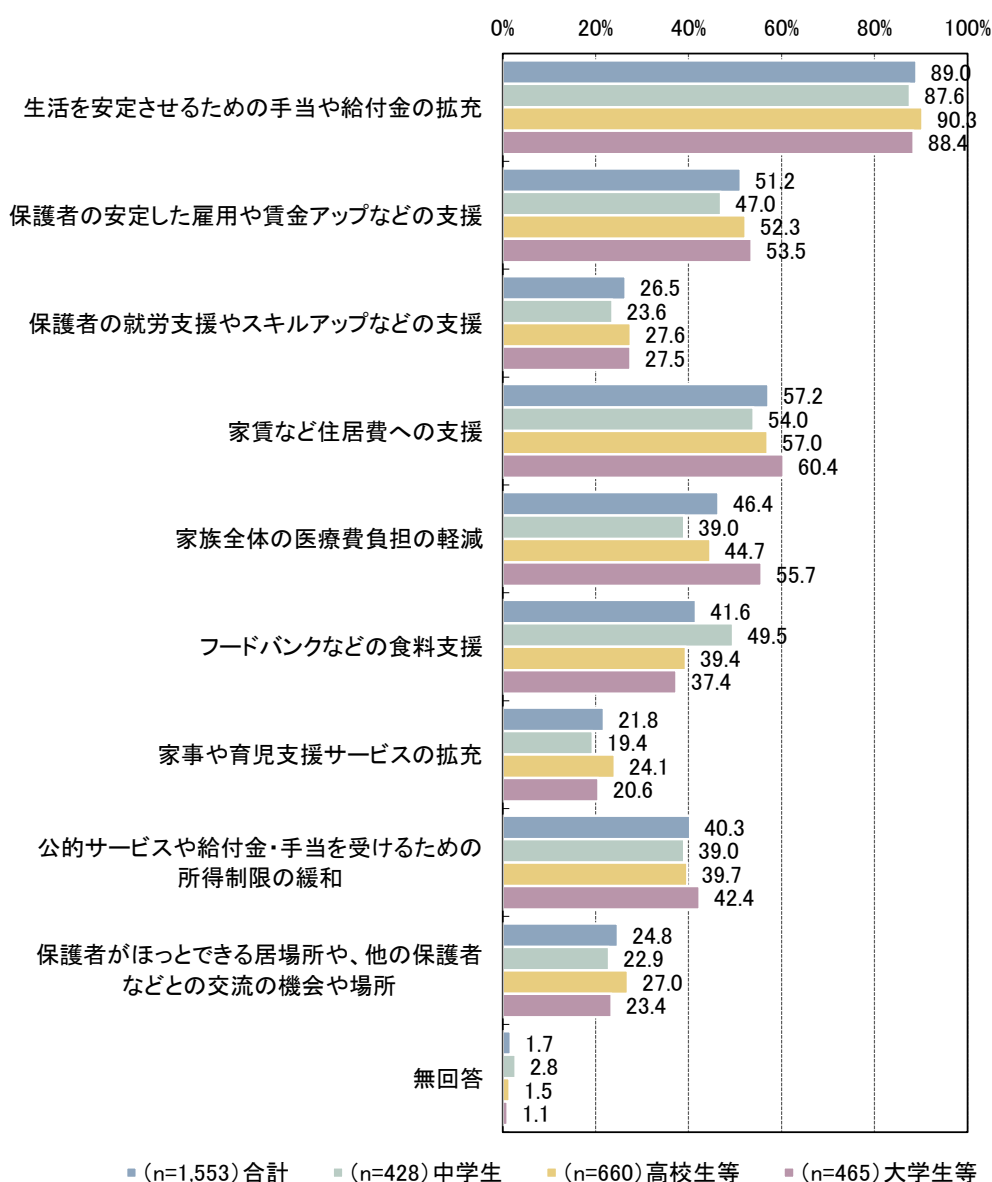
図表 99 子ども・若者にとって、どのような支援制度があるとよいと思うか（中学生、高校生、大学・専門学校生）（複数回答）



(15) 保護者や家族全体への支援制度として、89.0%が生活を安定させるための手当や給付金の拡充を希望。

- ・保護者や家族全体への支援制度への希望は、中学生では、「生活を安定させるための手当や給付金の拡充」87.6%、「家賃など住居費への支援」54.0%、「フードバンクなどの食料支援」49.5%、「保護者の安定した雇用や賃金アップなどの支援」47.0%、「家族全体の医療費負担の軽減」39.0%、「公的サービスや給付金・手当を受けるための所得制限の緩和」39.0%。

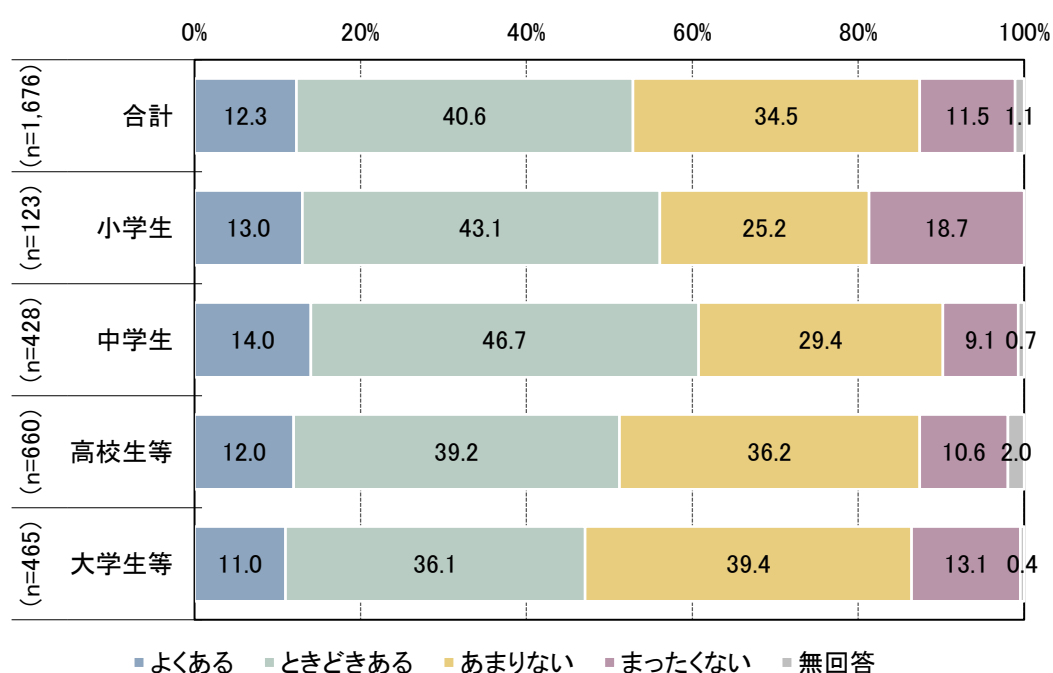
図表 100 保護者や家族全体にとって、どのような支援制度があるとよいと思うか（中学生、高校生、大学・専門学校生）（複数回答）



(16) 約半数の子ども・若者が「大人たちが自分の意見を聞いてくれないと思うことがある」²⁰。約9割が「学校や社会で何かを決めるときに子どもの意見を聞いてほしい」²¹。

- ・小学生では、大人たちが自分の意見を聞いてくれないと思うことが「よくある・ときどきある」56.1%、学校や社会で何かを決めるときに子どもの意見を聞いてほしいと思うかについて「とてもそう思う・まあそう思う」が87.8%。

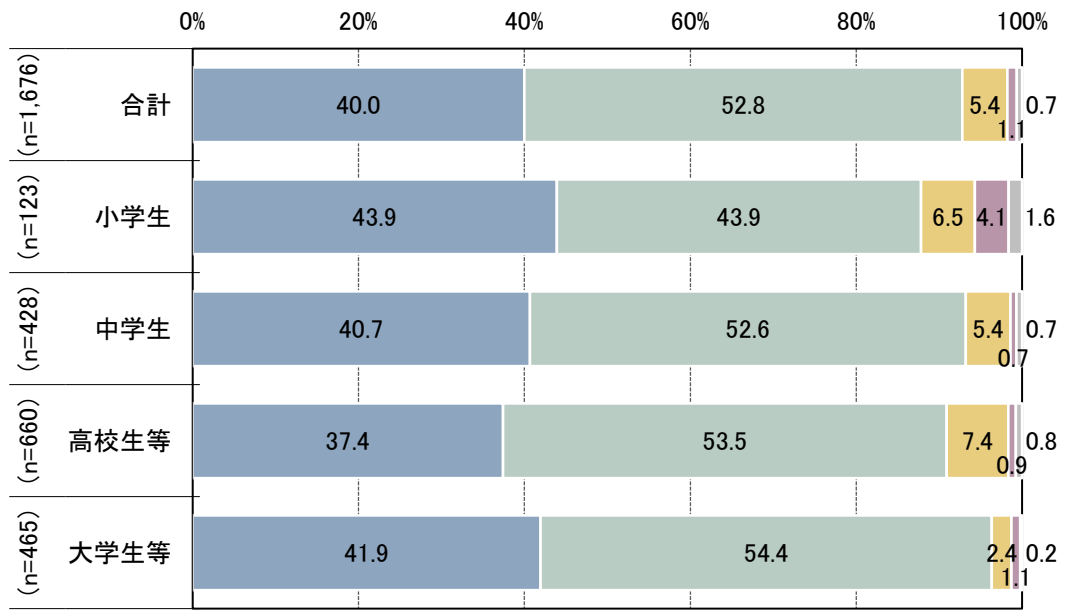
図表 101 周りの大人たちが、自分の意見を聞いてくれないと思うことがあるか



20 「NHK2022年調査」(6頁)では、中学生、高校生について、それぞれ「よくある」が9.1%、9.0%、「ときどきある」が33.6%、37.4%、「あまりない」が35.9%、38.7%、「まったくない」が21.1%、

21 「NHK2022年調査」(7頁)では、中学生、高校生について、それぞれ「とてもそう思う」が35.2%、43.5%、「まあそう思う」が51.7%、47.5%、「あまりそうは思わない」が10.7%、7.6%、「まったくそうは思わない」が2.0%、1.3%となっている。

図表 102 学校や社会で何かを決めるときに子どもの意見を聞いてほしいと思うか



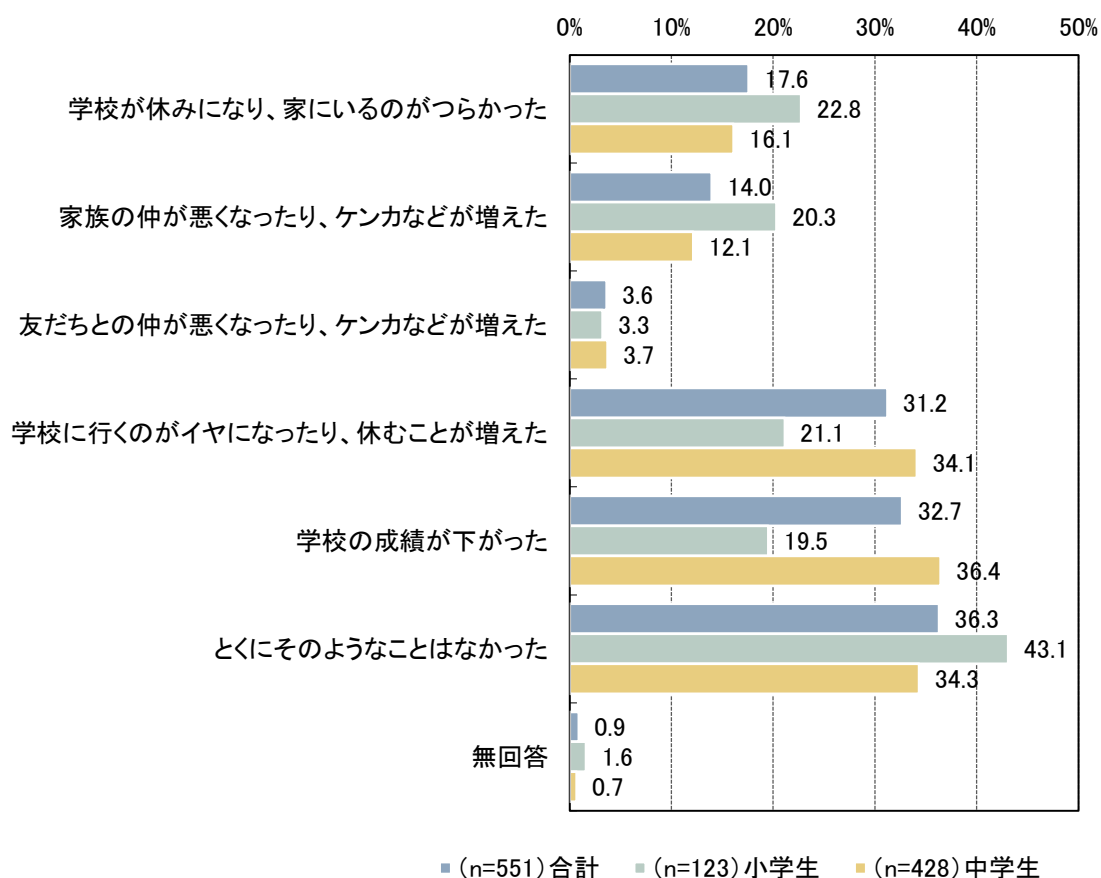
■とてもそう思う ■まあそう思う ■あまりそうは思わない ■まったくそうは思わない ■無回答

4-2-6 コロナ禍・物価上昇の影響

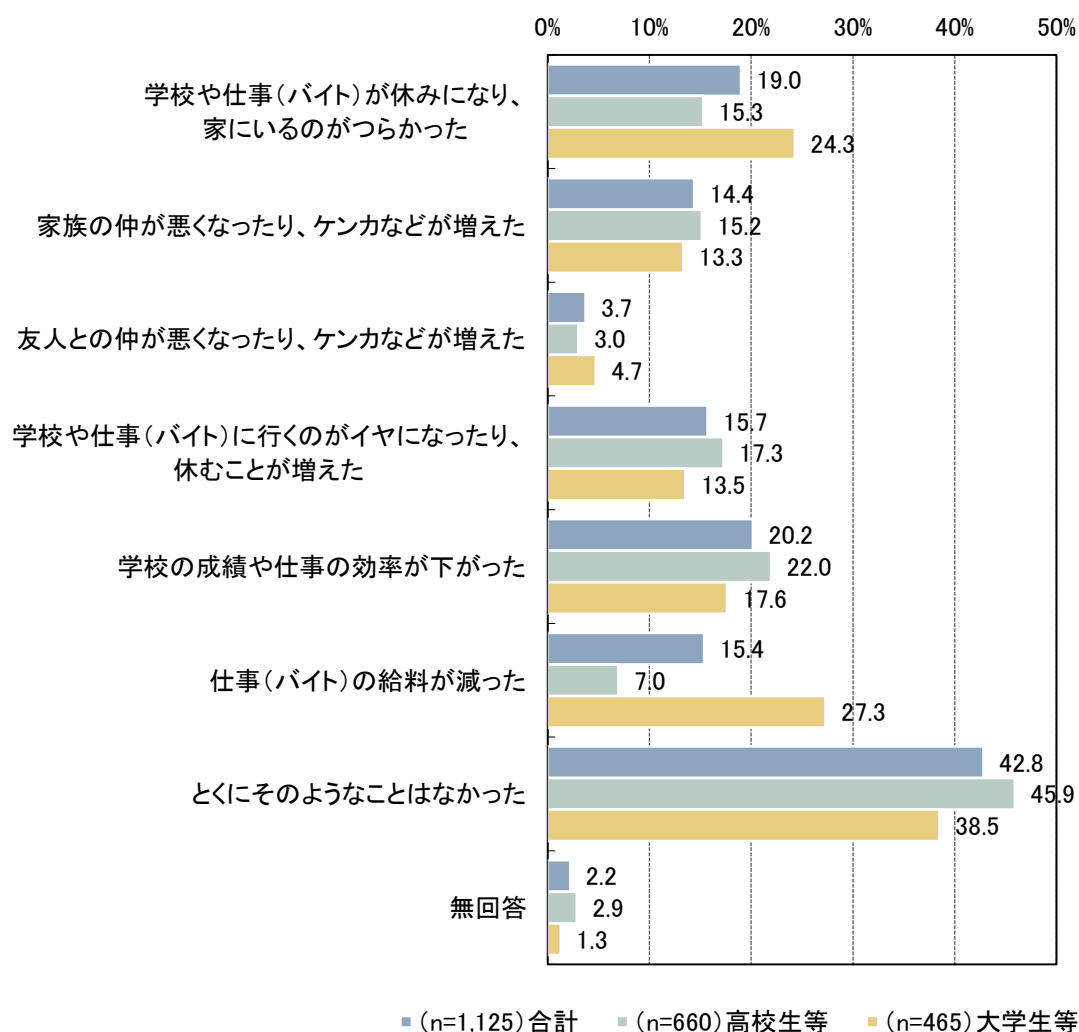
(17) 半数～6割超で「コロナ禍の影響あり」。中高校生で特に「学校の成績が下がった」の回答が多く、中学生では3割超が「休むことが増えた」。

- ・小学生では、コロナ禍で「学校が休みになり家にいるのがつらかった」22.8%、「学校に行くのがイヤになったり、休むことが増えた」21.1%、「家族の仲が悪くなったり、ケンカなどが増えた」20.3%、「学校の成績が下がった」19.5%。

図表 103 コロナの間（一斉休校から今年春まで）で、以下のようなことがあったか（小中学生）
（複数回答）



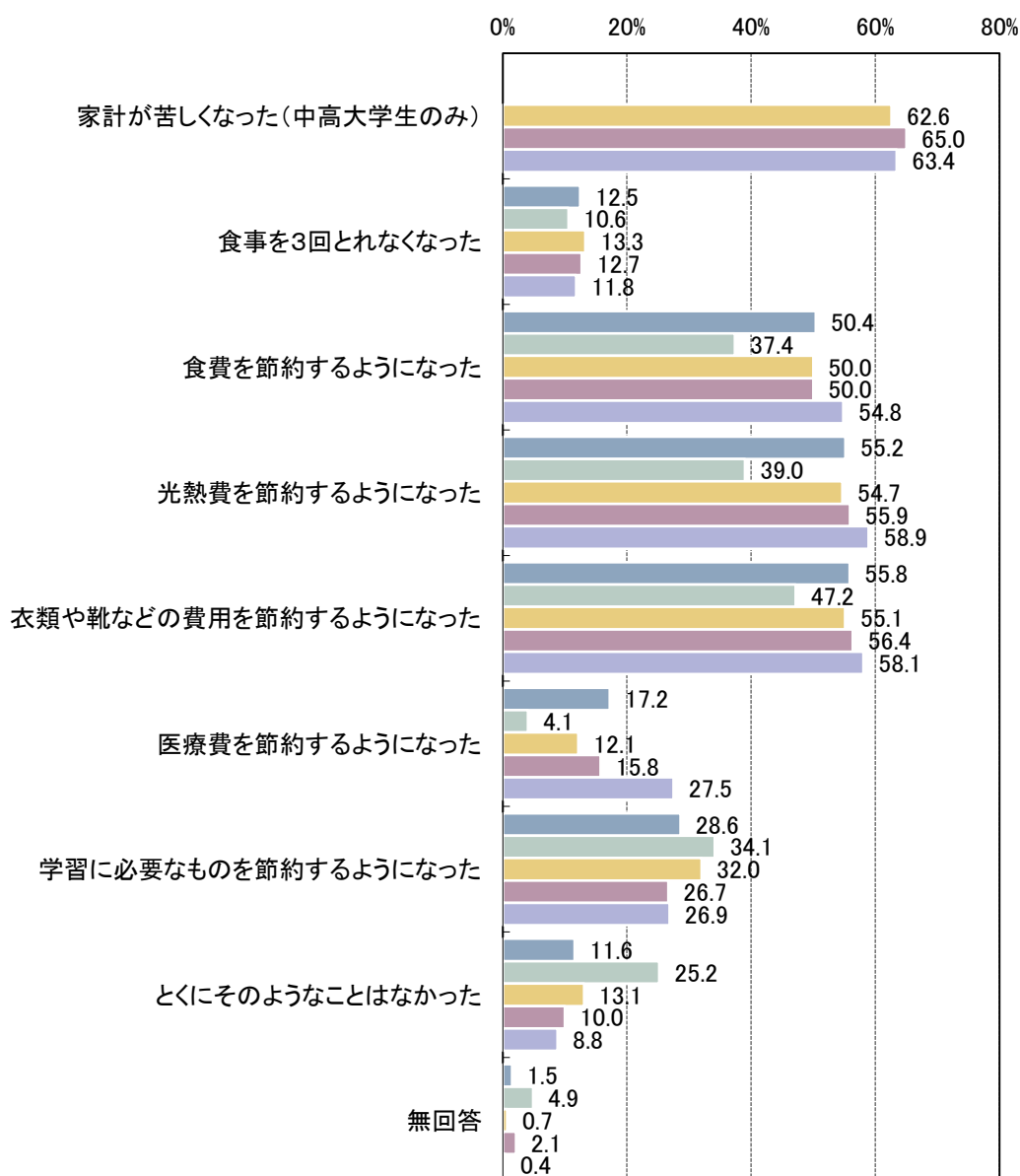
図表 104 コロナ禍での何らかの影響（高校生、大学・専門学校生）（複数回答）



(18) 小学生 69.9%～大学生 90.8%の家庭に物価高の影響あり。「家計が苦しくなった」が6割超、食事を3回とれなくなった者も1割超。

- ・小学生では、物価高騰で「衣類や靴などの費用を節約するようになった」47.2%、「光熱費を節約するようになった」39.0%、「食費を節約するようになった」37.4%、「学習に必要なものを節約するようになった」34.1%。

図表 105 物価や光熱費（電気代・ガス代）などが高くなったことで、この1年間に以下のような影響があったか（小中学生）（複数回答）



■ (n=1,676)合計 ■ (n=123)小学生 ■ (n=428)中学生 ■ (n=660)高校生等 ■ (n=465)大学生等

※「家計が苦しなくなった」は中学生以上の方に尋ねた項目である。

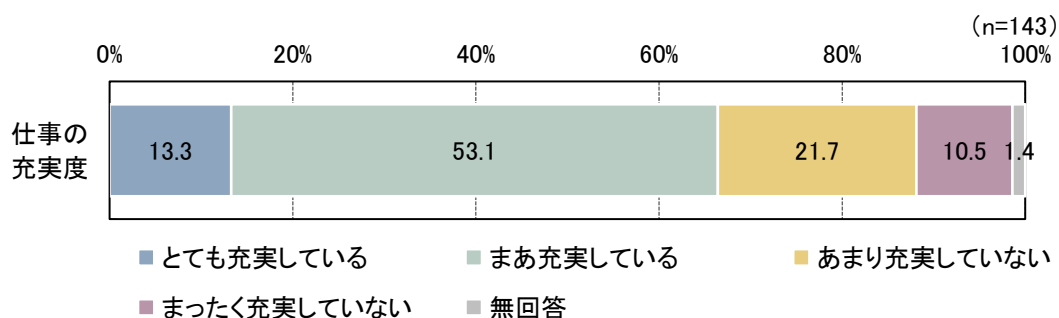
4-3 就業している若者、非就業の若者調査から見てきたこと

4-3-1 過去・現在の暮らし

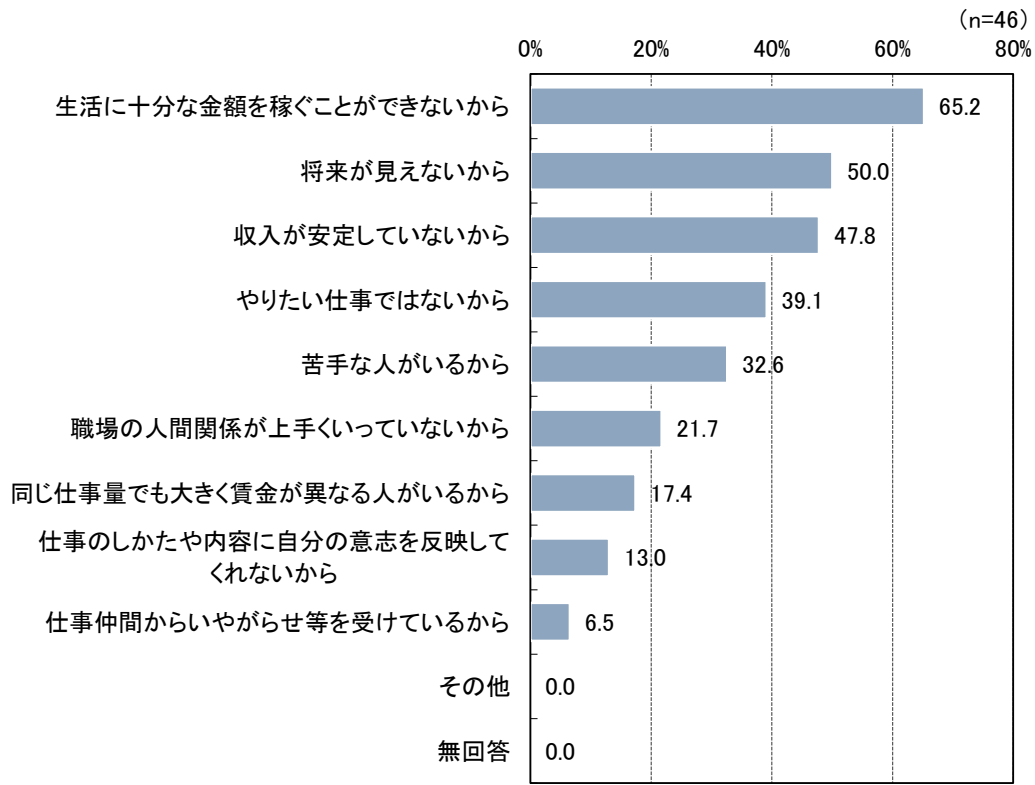
(1) 就業者で「仕事が充実していない」と回答した者（約 32%）のうち、「将来が見えないから」が 50.0%、「収入が安定していないから」が 47.8%。将来の希望は「自分にとって納得のいく職場で働くこと」が 52.4%。

・充実していない理由は、「生活に十分な金額を稼ぐことができないから」65.2%、「将来が見えないから」50.0%、「収入が安定していないから」47.8%、「やりたい仕事ではないから」39.1%。

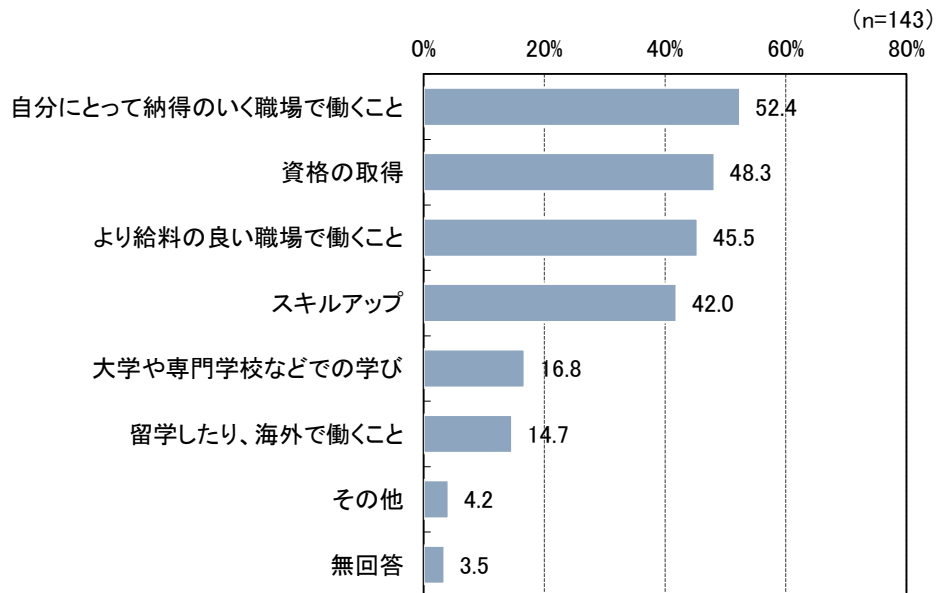
図表 106 仕事の充実度（就業）



図表 107 仕事が充実していない理由（就業）（複数回答）



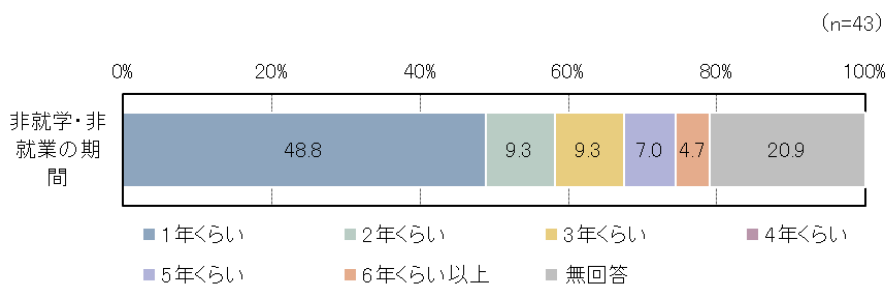
図表 108 将来の希望（就業）（複数回答）



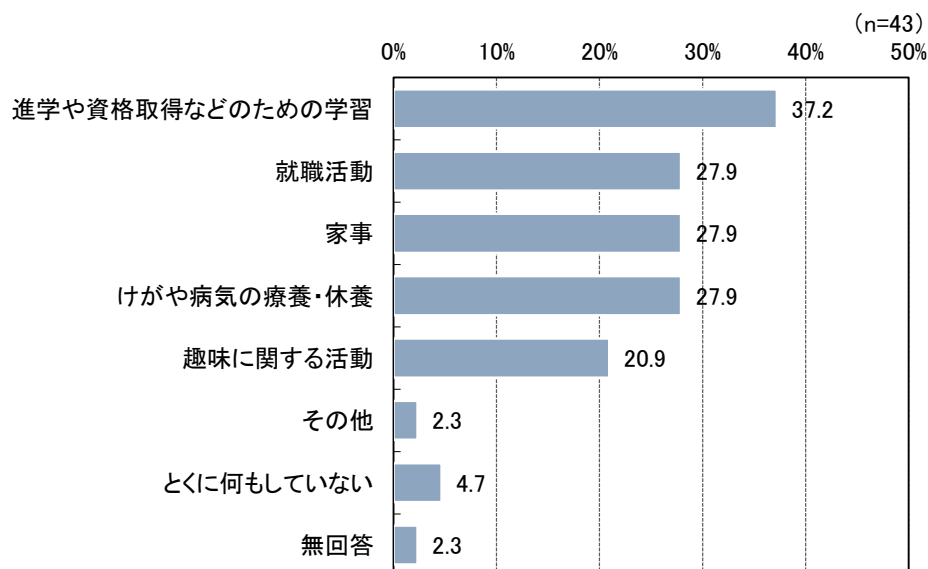
(2) 非就業の若者のうち、5年以上就学・就職していない者が11.7%。日中は学習や就職活動を行う者が多いものの、療養・休養の者も27.9%。

・就業・就学していない期間は、「1年くらい」が48.8%で、「5年くらい以上」の者が11.7%。

図表 109 学校に通っていない・仕事に就いていない期間（非就業）



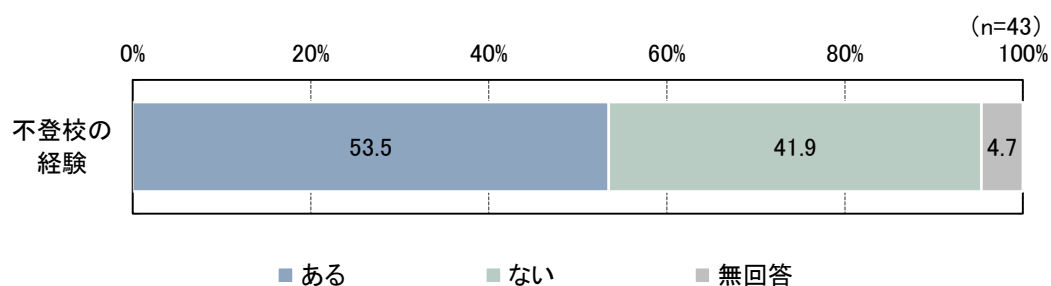
図表 110 日中の過ごし方（非就業）（複数回答）



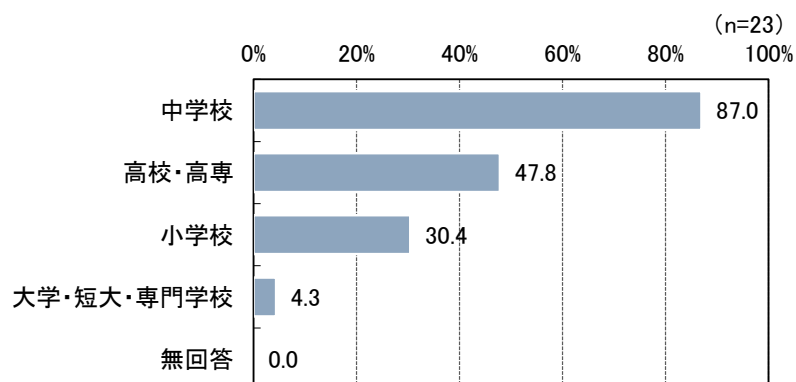
(3) 非就業の若者のうち 53.5%が不登校を経験。そのうち 87.0%が中学時代に不登校を経験。

- ・不登校の経験があるのは、「小学校」で 30.4%、「中学校」で 87.0%、「高校・高専」で 47.8%。

図表 111 不登校の経験（非就業）



図表 112 不登校の経験があった時期（非就業）（複数回答）

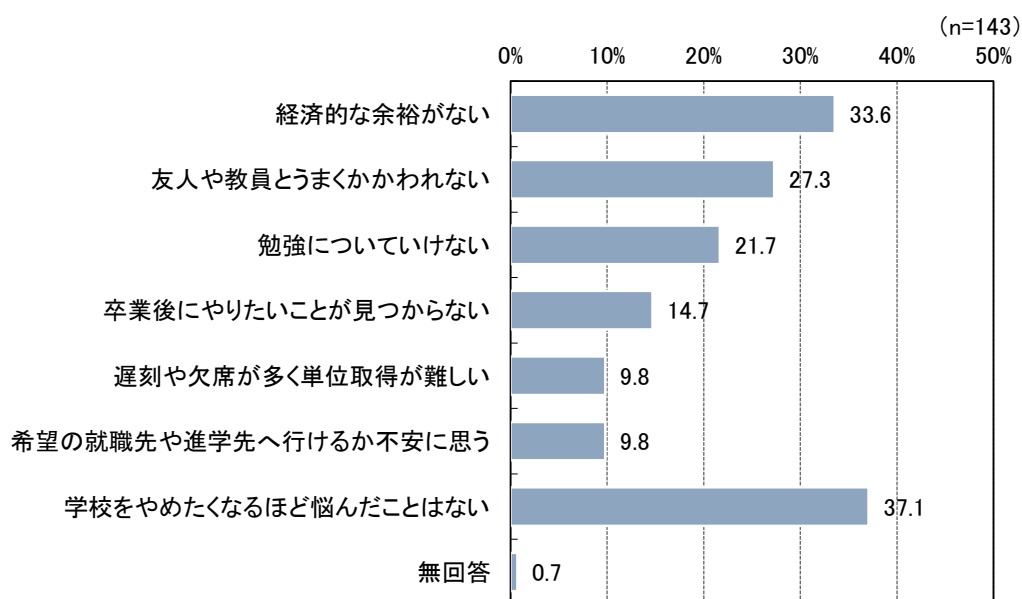


4-3-2 困りごとの状況

(4) 就業者のうち 62.9%が過去に学校をやめたくなるほど悩んだことがあり、そのうち 33.6%が経済的な理由。

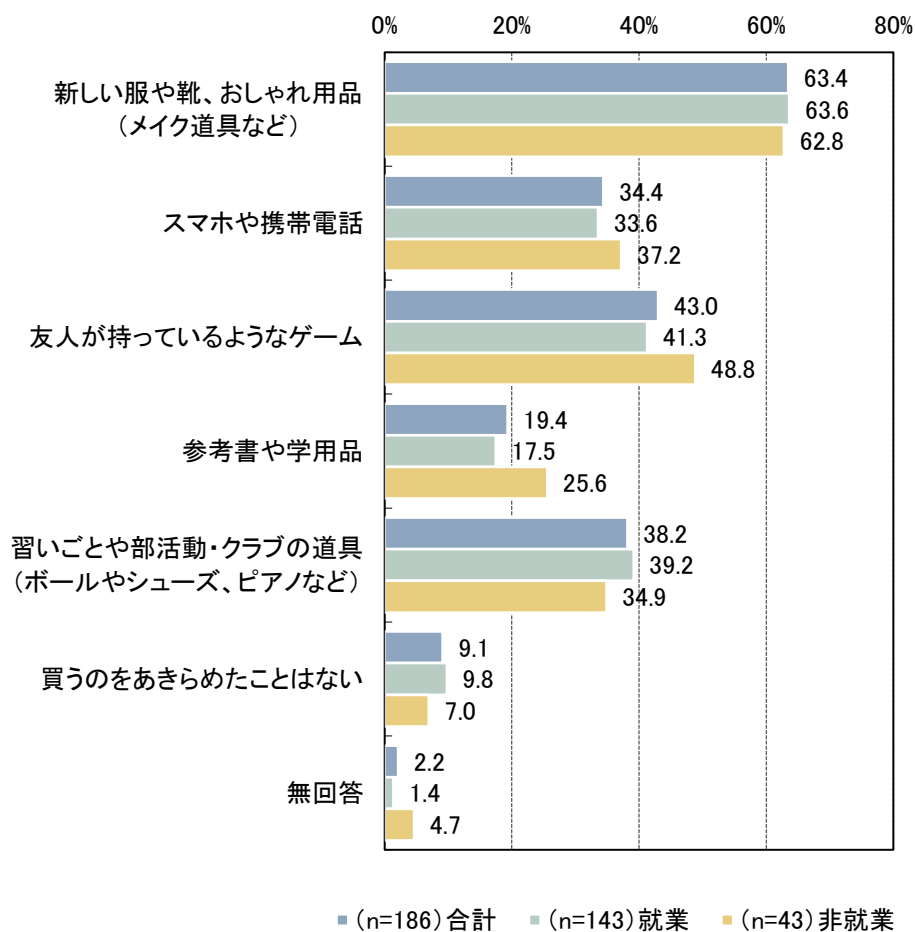
- ・就業者では、学生の頃に学校をやめたくなるほど悩んだことがあった人について、「経済的な余裕がない」33.6%、「友人や教員とうまくかかわれない」27.3%、「勉強についていけない」21.7%。

図表 113 学生の頃、学校をやめたくなるほど悩んだこと（就業）（複数回答）

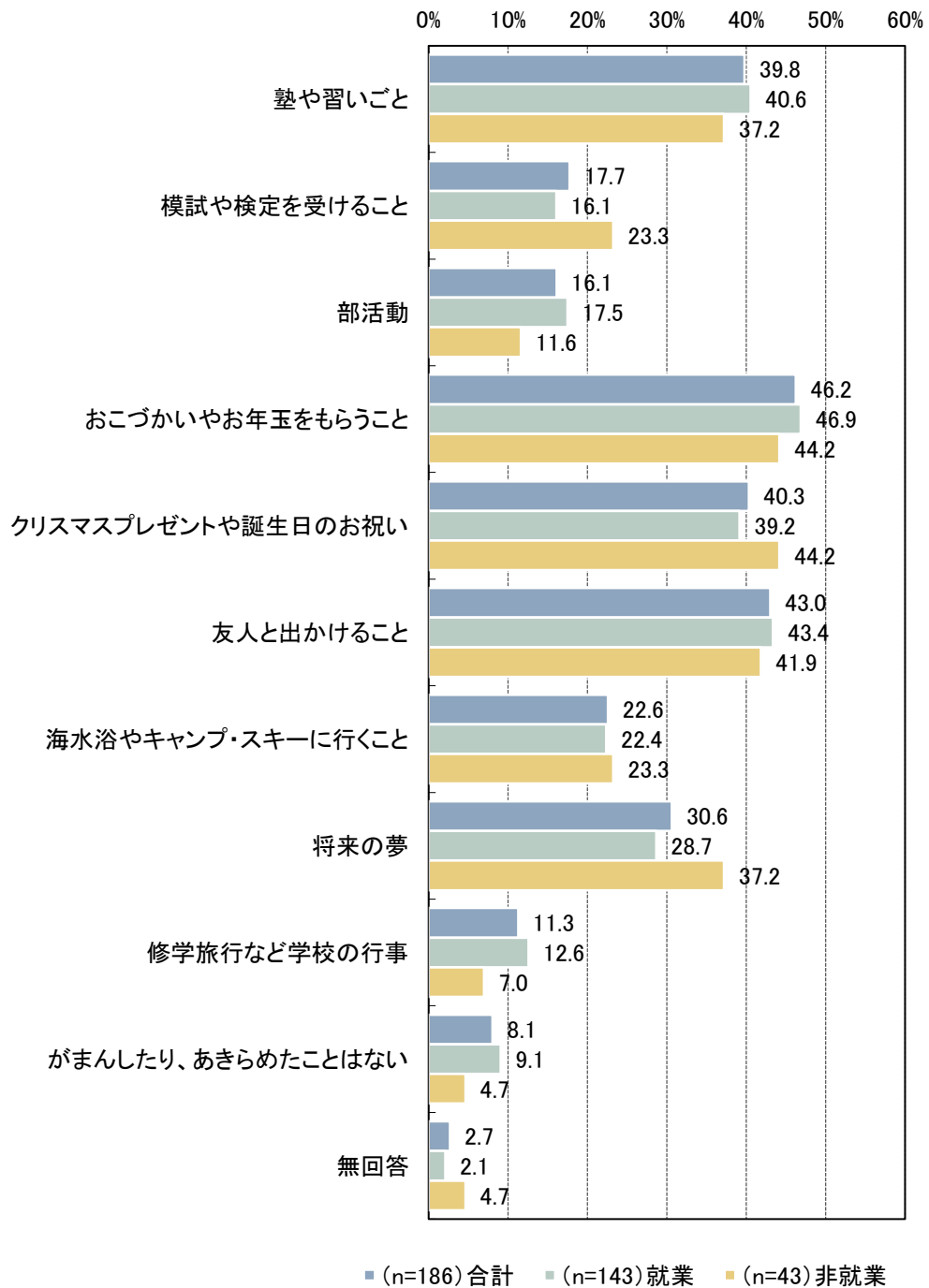


(5) 9割超の者が、経済的な理由で購入や経験を諦めている。

図表 114 経済的な理由で買うのを諦めた経験（複数回答）



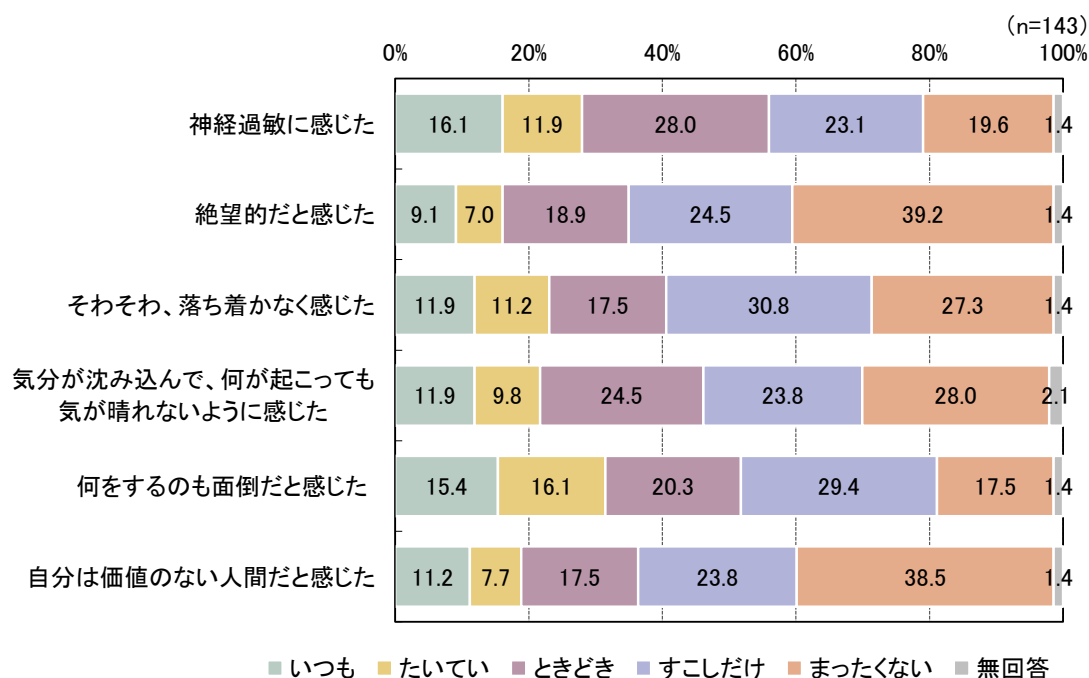
図表 115 経済的な理由で諦めた経験（複数回答）



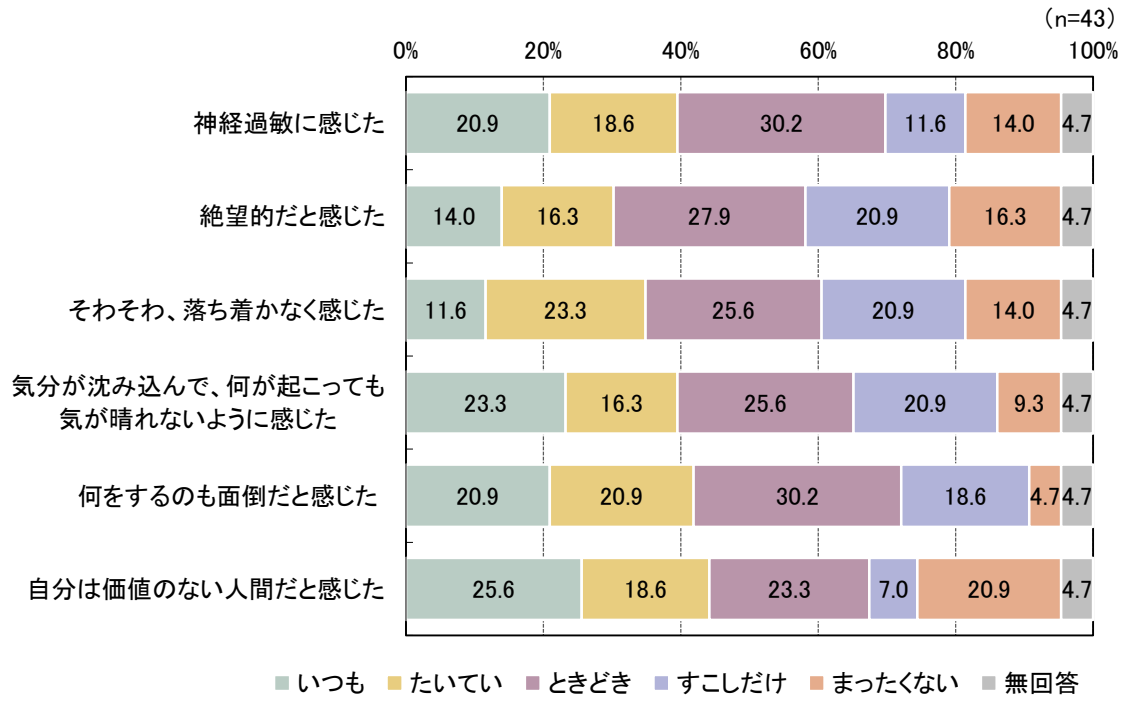
(6) 精神的負担は非就業者において高く、4割程度が「いつも・たいてい」精神的負担を抱えている。

- ・就業者の精神面では、以下の質問について「いつも・たいてい」と回答した者の割合が、「何をするのも面倒だと感じた」31.5%、「神経過敏に感じた」28.0%、「そろそろ、落ち着かなく感じた」23.1%、「気分が沈み込んで、何が起こっても気が晴れないように感じた」21.7%、「自分は価値のない人間だと感じた」18.9%、「絶望的だと感じた」16.1%。

図表 116 精神的な状況（就業者）



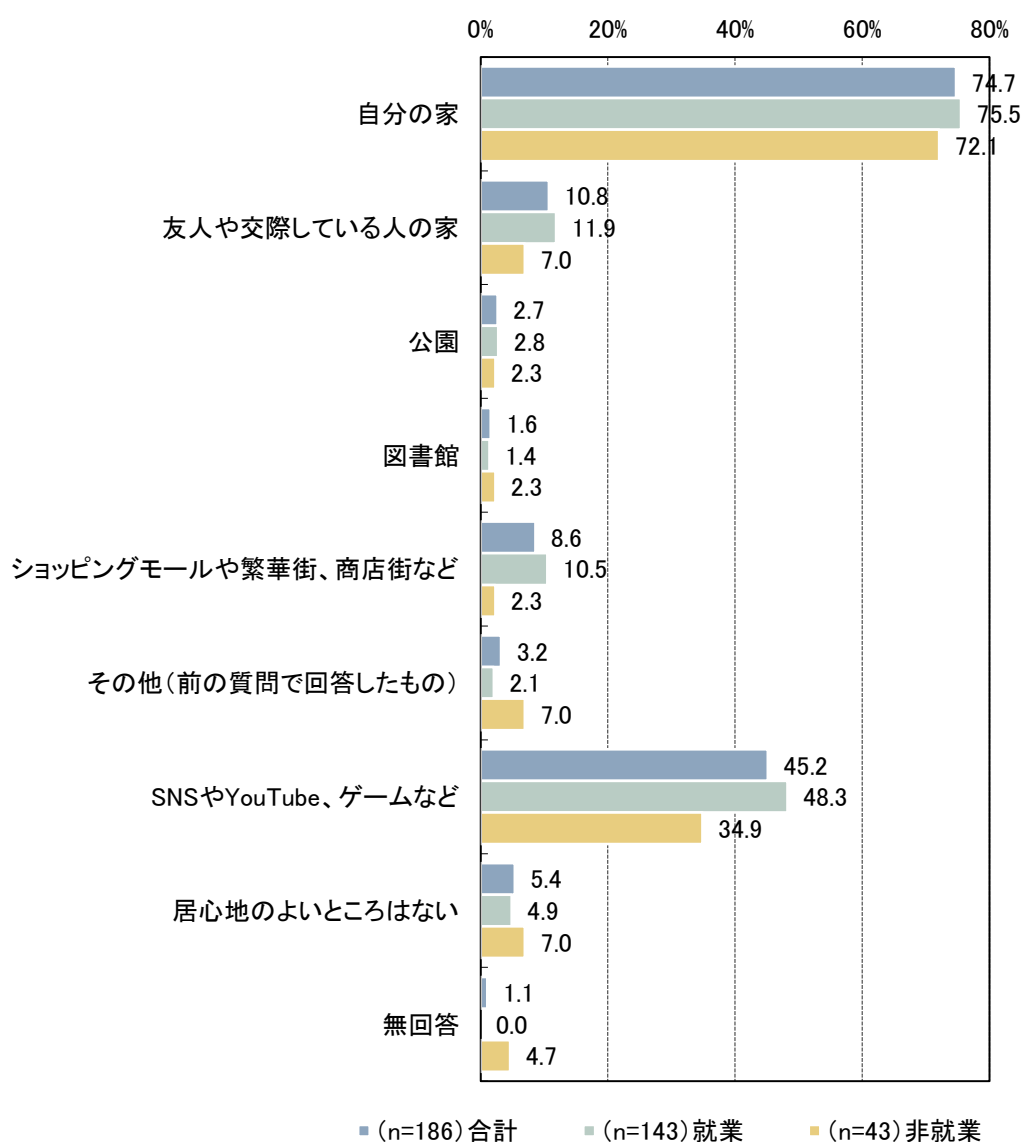
図表 117 精神的な状況（非就業）



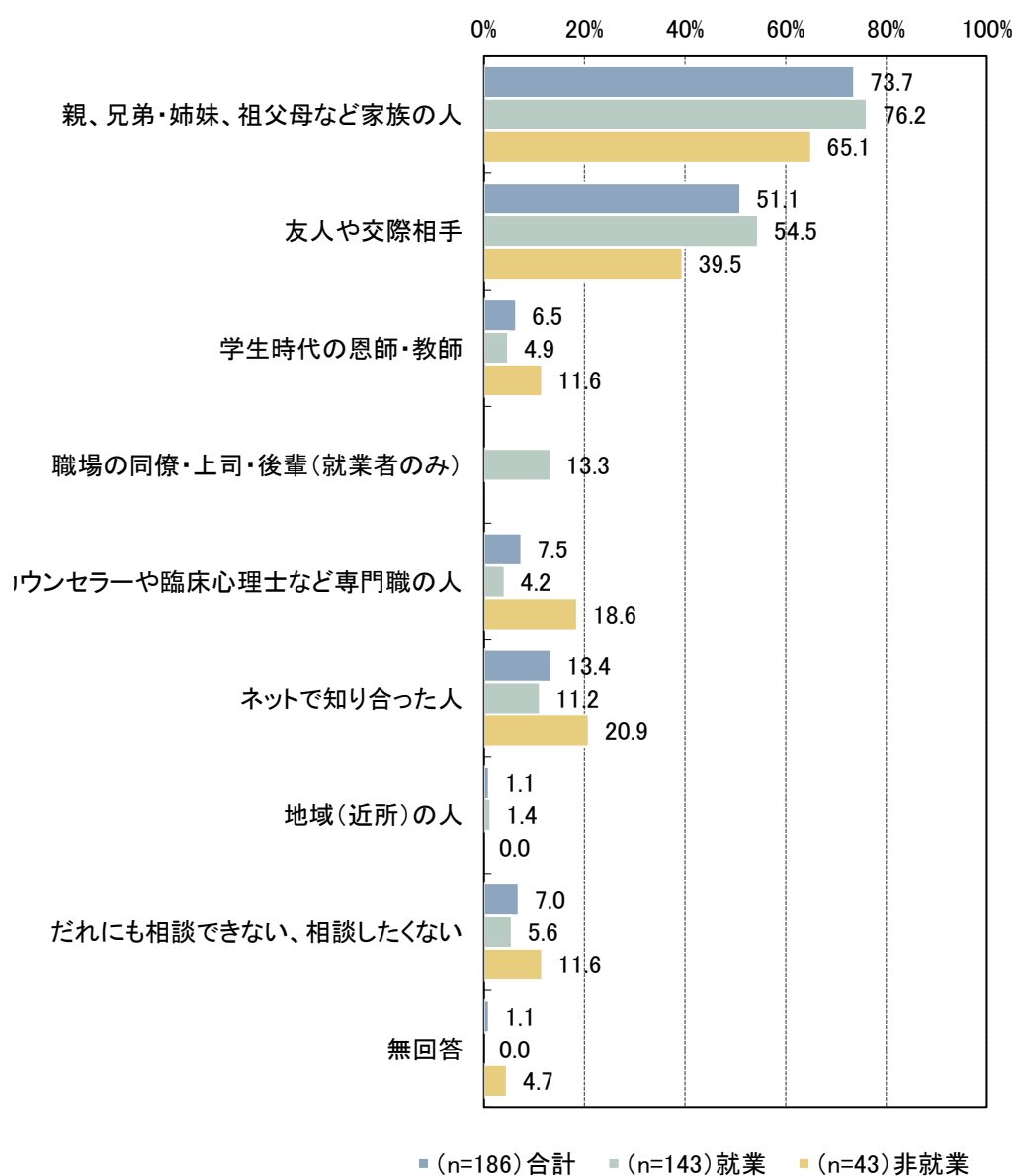
(7) 居心地の良い場所は「自分の家」や「SNS、YouTube、ゲームなど」。相談しようと思う人は「誰にも相談できない、相談したくない」が非就業者で11.6%。

- ・就業者の居心地のよい場所は、「自分の家」75.5%、「SNSやYouTube、ゲームなど」48.3%で、相談しようと思う人は、「親、兄弟・姉妹、祖父母など家族の人」76.2%、「友人や交際相手」54.5%、「職場の同僚・上司・後輩」13.3%、「誰にも相談できない、相談したくない」が5.6%。

図表 118 居心地の良い場所（複数回答）



図表 119 相談しようと思う人（複数回答）

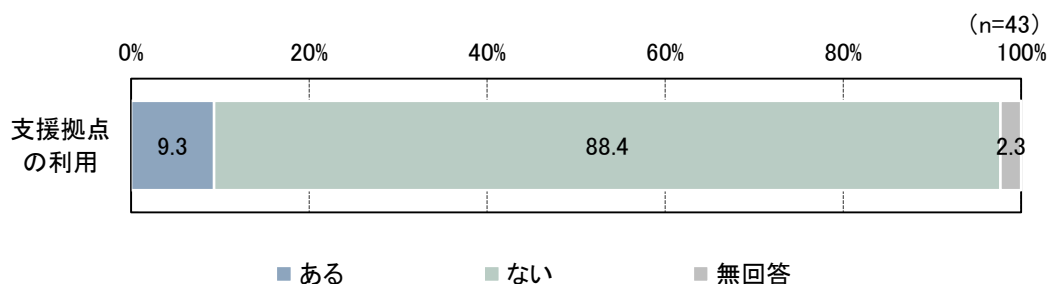


4-3-3 支援ニーズ

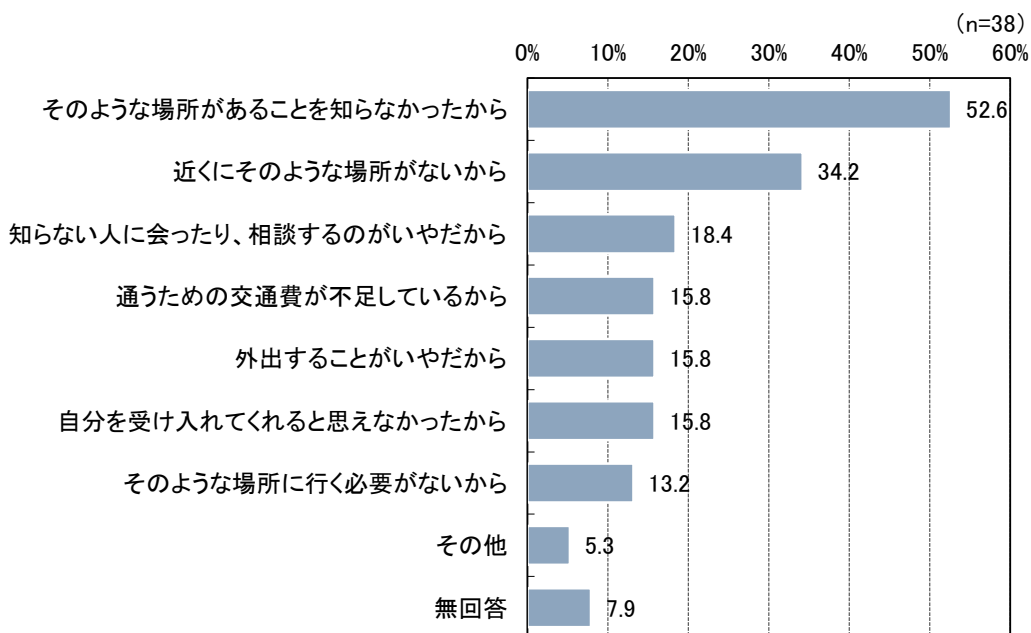
(8) 非就業者のうち若者支援拠点の利用経験「なし」が88.4%。

- ・サポステなど若者支援の拠点を利用していない理由は、「そのような場所があることを知らなかったから」は52.6%と半数超。また、「近くにそのような場所がないから」が34.2%。

図表 120 若者支援の拠点利用経験（非就業）

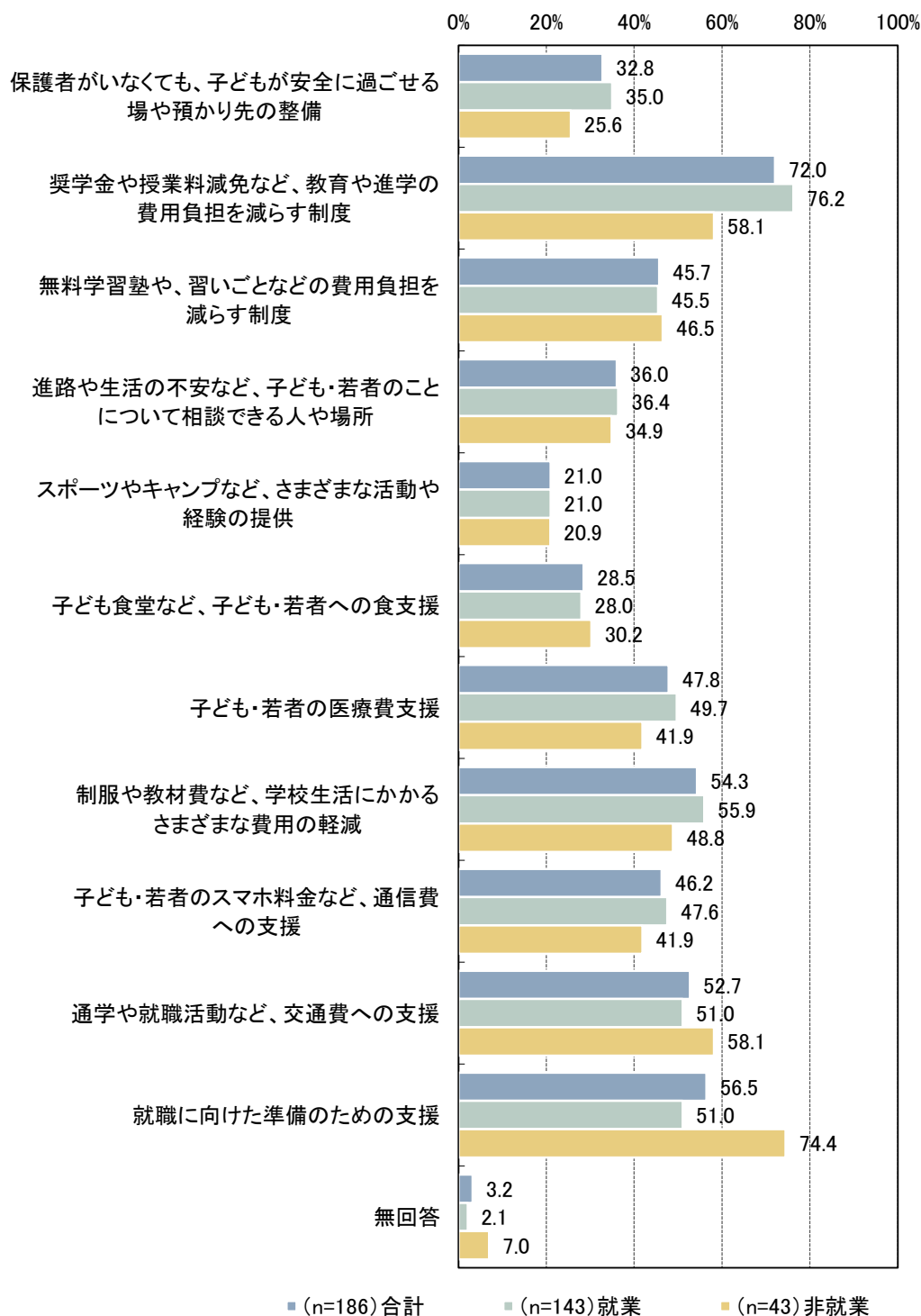


図表 121 若者支援の拠点を利用したことがない理由（非就業）（複数回答）



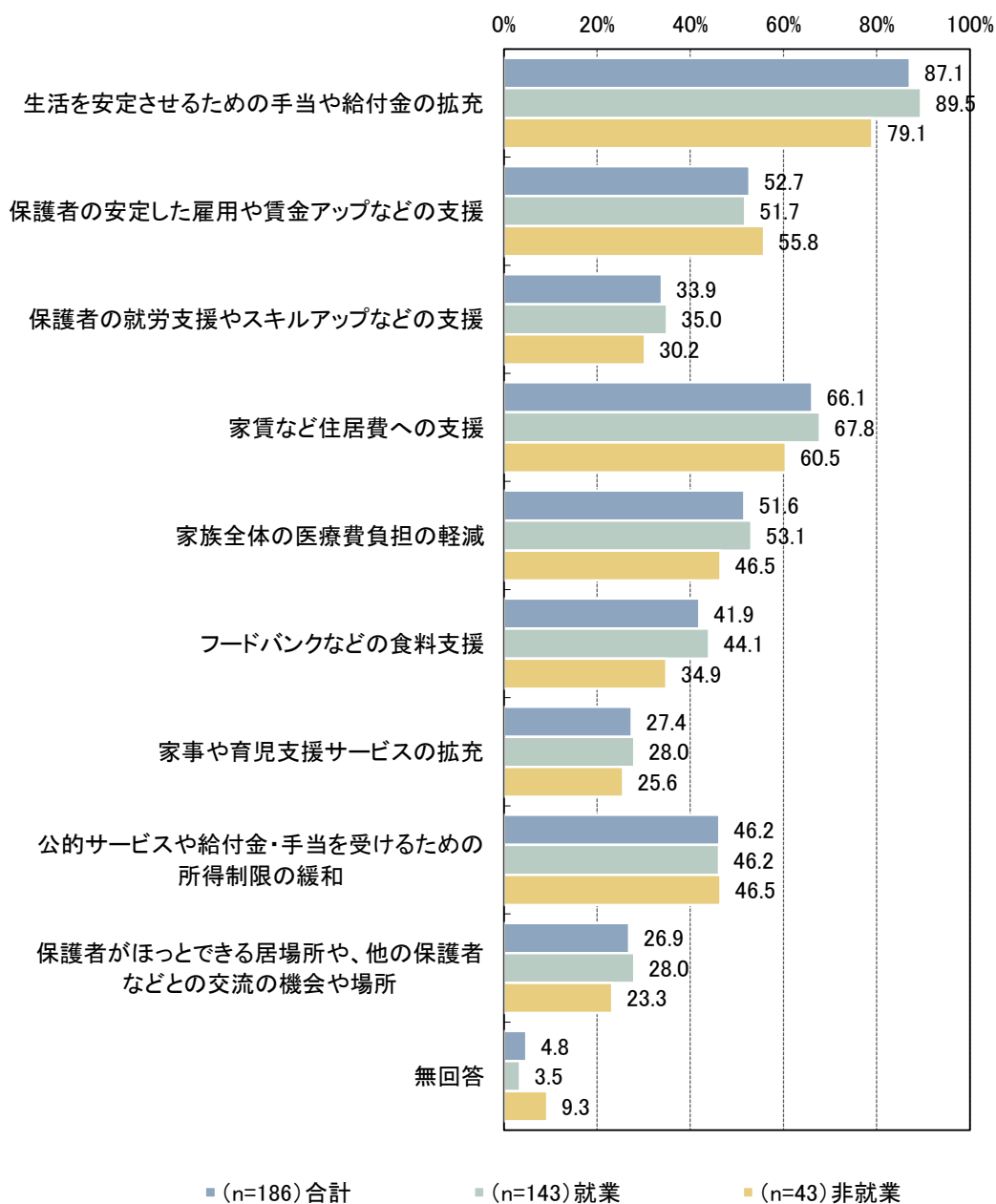
(9) 子ども・若者への支援制度として、就業者は、就学中の子どもと同じく、教育や進学のコスト負担減などを高く希望。非就業者は74.4%が「就職に向けた準備のための支援」を希望。

図表 122 子ども・若者への支援制度の希望（複数回答）



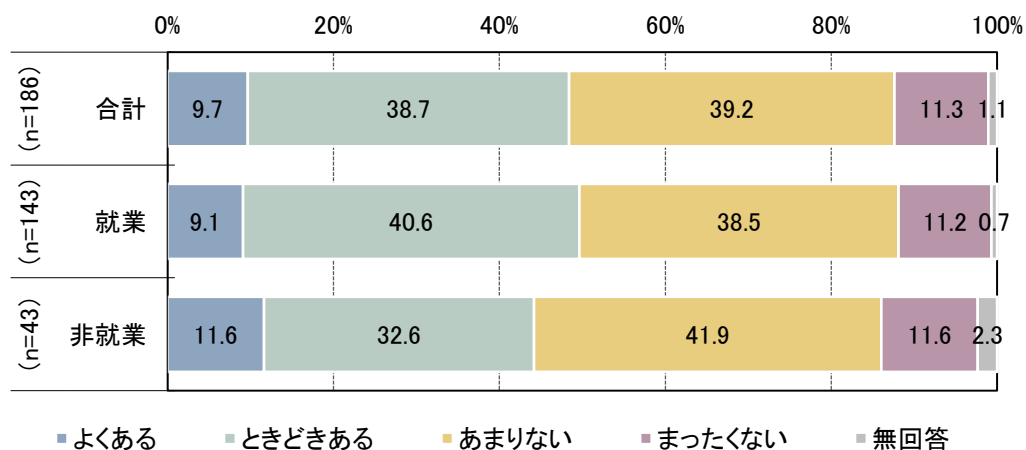
(10) 保護者や家族全体への支援制度として、就業者の89.5%、非就業者の79.1%が生活を安定させるための手当や給付金の拡充を希望。

図表 123 保護者・家族全体への支援制度の希望（複数回答）

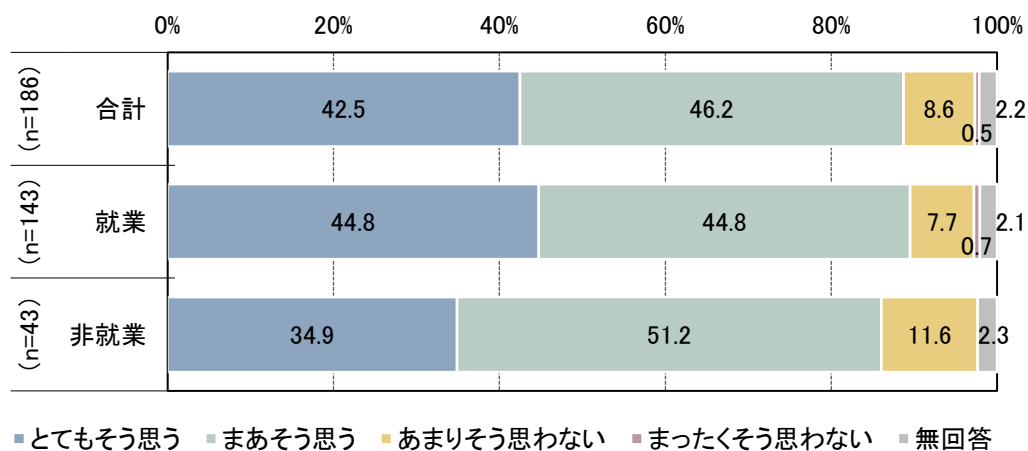


(11) 約半数の若者が、「大人たちが自分の意見を聞いてくれないと思うことがある」。9割程度が「学校や社会で何かを決めるときに子どもの意見を聞いてほしい」。

図表 124 大人たちが自分の意見を聞いてくれないと思うか



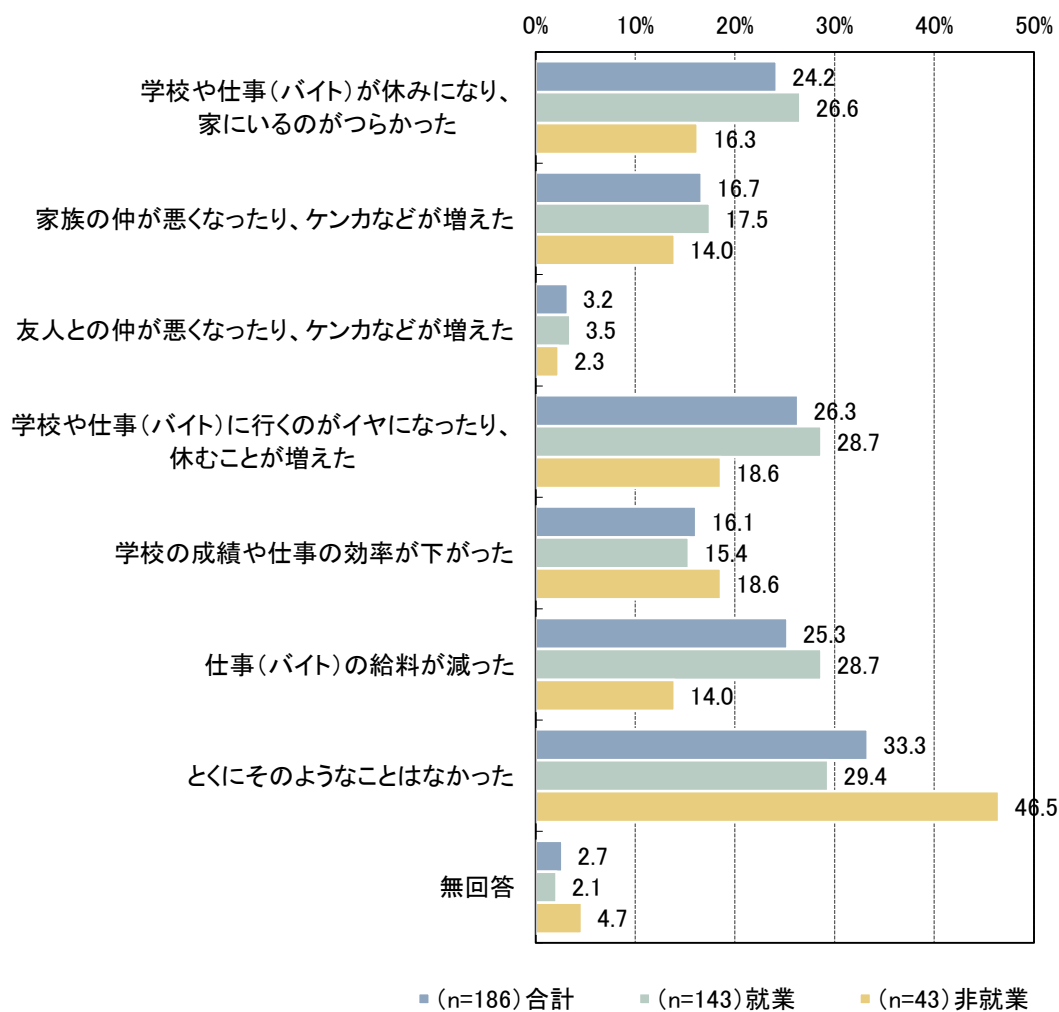
図表 125 学校や社会で何かを決めるときに子どもの意見を聞いてほしいと思うか



4-3-4 コロナ禍・物価上昇の影響

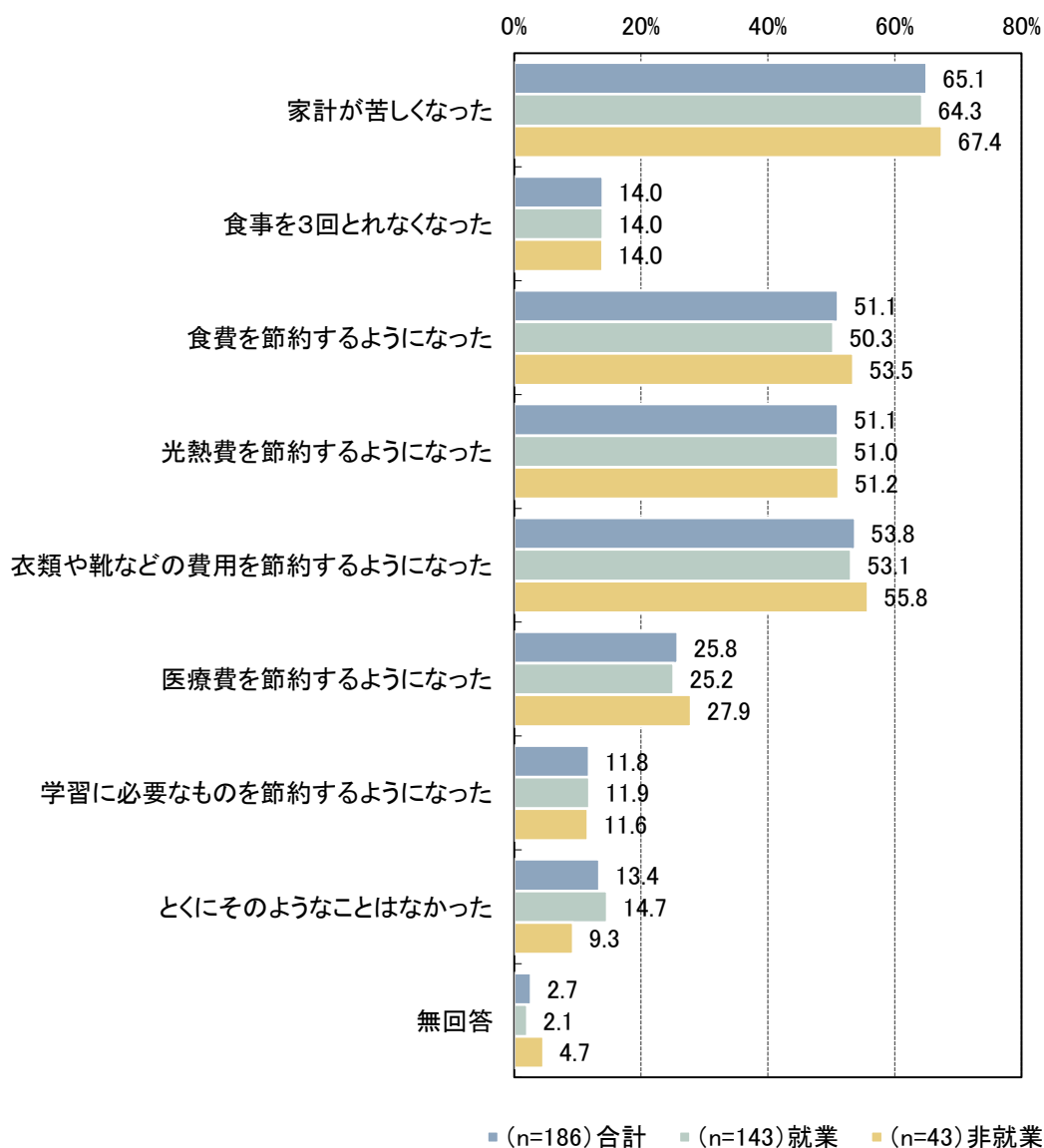
(12) 就業者の68.5%、非就業者の48.8%で「コロナ禍の影響あり」。就業者の28.7%が「仕事(バイト)の給料が減った」。

図表 126 コロナ禍での何らかの影響(複数回答)



(13) 就業者の83.2%、非就業者の86.0%に物価高の影響あり。「家計が苦しくなった」が特に非就業者で67.4%に達する。「食事を3回とれなくなった」者も14.0%に達する。

図表 127 物価高騰の影響（複数回答）



公益財団法人 あすのば

〒107-0052

東京都港区赤坂 3-21-6 河村ビル 6F

TEL : 03-6277-8199

FAX : 03-6277-8519

E-mail : info@usnova.org

WEB : <https://www.usnova.org/>